352
1104

始

特223
800

通解十六夜日記

塚本哲三 著

東京
有朋堂書店發行

帝國圖書館藏

緒言

□本書は、十六夜日記解釋に對する自己の所見を忌憚なく詳細に發表したものである。十六夜日記の註解書には、古註に「殘月抄」があり、明治大正の間に出たのも十種ほどもあるが、而も私自身の古典解釋態度から見て、どうしてもそれ等諸註の說に甘んずる事の出來ぬ點がかなり澤山にある。卽ち敢てこの小著を公にして、私自らの古典研究の小さい歩みの一つに加へようとした次第である。

□私は殘月抄の外に、現下の讀書界に行はれつゝあると信ぜられる所の數種の註解書を取つて、かなり克明にそれを參看した。そして苟も自分の考と異なる解は、三角符を附けて之を引用し、自分がそれに同意し難いとする理由を述べる事にした。敢て他の非を云々するといふ意味ではない。努めて自家獨斷の見を避け、諸家の意見と自己の意見とを對比して、大方の批判に訴へるのが、學に忠なる者の取るべき態度だと信ずるからである。

□私は原文を通して原作者の言はんとする所を正しく把握し、之を平明自然の口語に寫し出す事を以て古典解釋上の理想とする。從つて私は原作者の思想の動きとしての一語一句、助詞一つの用ひ方をも輕輕に看過する事が出來ない。「つまり同じ事ではないか」といふやうな大ざつぱさに甘んずる事は、どうしても私の主觀が承知しない。諸家の註解に對する私の反對意見も、多くはさういふデリケートな違ひ

を基調として出發し、而もそれを讀者のアタマに徹底させたいと思ふがために、勢ひ説明のくどくしくなる場合がある。この點特に讀者の寛恕を冀ふと同時に、寛大な辛棒强さを以て之を熟讀考察して下されん事を切望して止まない。

□本文は一に殘月抄の本文に準據した。殘月抄には異本の考證がかなり克明に示されてゐるが、文の本質から見て、その多くは深く考究するに値するほどのものではないと思ふ。從つて文義上相當に大きい異同のあるものの外は凡て省略する事にした。將來、より以上の善本が發見されれば格別、今の所、殘月抄の立てた本文を以て十六夜日記のテキストとする事は、學界に於て異議なき所だと信ずる。

昭和五年三月

著者

目次

語句索引……七
解題……二九

東への首途
むかし壁の中より……一
また賢王の人をすて給はぬ政……三
更に思ひつゞくれば……五
さてもまた集をえらぶ人は……六
惜しからぬ身ひとつは……九
さりとて文屋康秀が……一二

悲しき別離
めかりせざりつる程……一四
代々に書きおかれける歌……一七
大夫のかたはら去らず馴れ來つる……二一
山より侍從の兄の律師も……二三
女の子はあまたもなし……二六
いつゝの子どもの歌……二九

東路のたび
栗田口といふ所より……三一
野路といふ所は……三二
今宵は鏡といふ所に……三四
いまだ月の光はかすかに……三六
十七日の夜は……三七
醒が井といふ水……三九
十八日美濃國關の藤川わたる……四一
不破の關屋の板びさしは……四二
關よりかきくらしつる雨……四三
十九日又こゝを出でて行く……四五
盡つ方過ぎ行く道に……四六
洲俣とかやいふ川には……四七
二十日尾張國下戸といふうまやを行く……五〇
鳴海の潟を過ぐるに……五三

二村山を越えて行くに……五五
八橋にとゞまらむといふ……五六
廿一日八橋を出でて行くに……五八
廿二日のあかつき……六二
高師の山も越えつ……六四
濱名の橋より見渡せば……六六
今宵は引馬の宿といふ所に……六七
廿三日天龍のわたりといふ……六九
今宵はとほつあふみ見付の國府……七一
廿四日ひるになりて……七二
廿五日菊川を出でて……七五
宇都の山越ゆるほどにしも……七六
今宵は手越といふ所にとゞまる……七九
廿六日藁科川とかや渡りて……七九
暮れかゝるほど……八二
富士の山を見れば烟も立たず……八四
廿七日明けはなれて後……八八
今日は日いとうらゝかにて……八九
伊豆の國府といふ所にとゞまる……九一
廿八日伊豆の國府を出でて……九三
いとさかしき山を下る……九六
湯坂より浦に出でて……九七
廿九日酒匂を出でて……九八

都のたより

あづまにて住む所は……一〇一
前の右兵衛督の御女……一〇五
式乾門院のみくしげ殿……一〇八
草の枕ながら……一一一
あかつき便ありと聞きて……一一六
ほど經てこのおとゞひ二人の返事……一一九
ほどなく暮れて……一二二
櫃中納言の君は……一二五
彌生の末つ方……一三三
卯月のはじめつかた……一三七
さるほどに卯月の末になりければ……一四一
又和德門院の新中納言と聞ゆるは……一四三
そのついでに故入道大納言……一四七
夏のほどはあやしきまで……一五〇
侍從の宰相の君の許より……一五一
侍從の弟爲守の君……一五七
また櫃中納言の君……一五九

長歌

しきしまや……一六二

奥書（その一）……一七五
奥書（その二）……一七八

日次終

語句索引

▼『語義』に掲出したる語句を悉く採錄し
▼歴史的假名遣により五十音順に排列す

あ

あかざりし　五五
あかつき　六三
秋深き　一五六
あきらけき世　一七四
あくがれ出でし　一〇四
明くるまゝに　四五
あけぼの　三七
朝川　八九
あさはあとなくなりぬ　一七二
朝日とたのめ　二九
朝夕まうし馴れしかばにや　一〇七
阿闍梨　七八
阿闍梨の君　二五
足柄山　九四
蘆田鶴　一四七
あしはらのみちの　一七一
明日は鎌倉へ入るべしといふなり　九八
あせて　七六
朝臣　八七
あだならぬかぎり　一九
あだなる　六
あだにのみ　二五
あだにはならじ　二〇
あづかりもたることあれど　八
熱田の宮　五二
あづま　一〇三
あづま路　七五
東路おもひ立ちし明日とて　一一〇
あづま路の櫻を見ても忘れず　一三二
東路の空なつかしきかたみだに　一六一
あづまのかめの鑑にうつさば　一一
あととふ法の燈火　九
あととむ　五五
あとなき麻のみを知らば　一七七
あなかしこ　二〇
あながちに　二二
あながちに　一五〇
兄なり　二五
姉君　一一八
粟田口　三一
あはれとや三島の神哀なり　九二
　　六九

あはれなり　七五
あはれなる事　一四六
あはれなるにも　二〇
あはれなれば　一五六
あはれに　二九
あはれに　一一八
あはれに畳ゆるまゝに　三〇
あはれにて　二三
あはれにて　一二一
あはれにも　七八
あはれにもをかし　一二二
あひしらふ　六九
逢坂の關　三二
押領候ふ　一七九
海士　九〇
蜑衣　九〇
あまた擊　一四二
天の岩戸ひらけし時　六
海士の藻鹽木　九六
あま人　一一九
あめつちの云々　一六七
雨にやどかる　四五
あやしう　一三五
あやしき　八一
あやしき歌　一四六
あやしく　一五五
危きほど　一三六
あやふく心細きものから　九
あやふけれど　四九
あらいそ涙のかゝる寢ざめ　八四
嵐にきほふ木の葉さへ　一四
嵐もおよばぬなめり　七四
荒らかに物いひまぎらはすも　二五
有明のかげに　六三
有明の月さへ笠きたり　六四
ありがたくやありけむ　八
ありし御返　一〇四
ありしにも似ぬ心地のみし

て

ありとばかりはきく川　一四〇
荒れたる音　七五
荒れまさりつる　八八
青地の錦　一六
安嘉門院　六〇
　　一一〇

い

いかゞ　三〇
いかさまにかはなりぬらむ　一七一
いかなるえにかありけむ　八
如何にして　六一
いかにして　一三〇
いかになろみの浦なれば　八七
いかにもるらむ　四三
いかばかり　一四六
いかばかりかと　一五六
いきうし　一四
いくかされ　八三
いくせの石のかずもあよばじ　七六
生ける世　一六九
いさゝかかけて問へ　一七二
いざよふ　一二
いざよふ月とおとづれ給へ
　りし人　一二四
いざよふ月をおぼしめし忘
　れざりけるにや　一〇四
いさりする　九〇
いそぎ出でしにも　一一一
急ぎたる使とて　一三一
いそぐ道　七八
磯越す風は聞くこゝちして　一二一
磯物　一一九
磯山松のたえ間　一三一
いたうほども經ず　一二四
いたづらに　一一九
いたづらに　一三六
板びさし　四三
一の宮　四九
いづことかいふ　九八
いつしかに　一〇三
いつゝの子ども　三〇
伊豆の國府　九二
いつよりも物悲し　六三
出で立たるめるを　二六
いでたち見む　二五
いと苦しくて臥しぬ　三六
いと苦しければ　八一
いとゞ　七二
いとゞしく　一六六
いとゞなほ　一七四
岩起す浪　三五
いひこしらへ　八三
家々の打聞　一六
家をたすけむ　一一〇
今更　九
今の世の人の子　一六
今は三位入道とか　一二一
今もかはらざりける　四三
入りて侍りし　一七八
入り侍るとやらむ　一七七
色かへる　六一

う

浮橋　四九
うき橋にして　四九
うき身こがるゝ藻刈舟　一四五
うき身はなれぬ有明のかげ　六三
うき世に渡るほど　七一
うき世の夢やさめが井の水　四一
愛くらむ　五三
歌の口なれば　一五八
歌のことゆゑ　一〇七
歌のさうし　一九
歌のさま　一五六

うち出づ　九〇
打屈したる樣　一六
うち過ぎましや　四〇
うちしぐれふるさと　三三
うちしほたれぬ　二〇
うちそゝぐ　三三
うつゝともなし宇都の山　七八
宇都の山　七八
卯月　一三九
うまや　四五
海ちかき里　八三
海面　九八
海面を　一〇〇
梅が香は　一三〇
裏書　一七六
うらかぜ冴えて　一〇八
浦路　一〇〇
浦近き山もと　一〇〇
浦人　一〇三
　　八三
うらみ　一一六

え

永仁六年　一七八
えだにこもりてうめのはな　一七〇
えらぶ人　八
えりしたゝめて　一九

お

おきたりける人々の文　一五一
息津の濱　八〇
奥　二九
奥　一五六
奥書　一九
送り奉らむ　二五
おくれぬかたみ　一〇四
おこせ給へり　一四一
行ひ居たる　一二一
おしはからる　七六
おしはかり　一一六
落ちたる　一三六
おとうとの尼上　一一八
おとうとの君　一二一
おとづれ聞ゆ　一一一
おとづれきこゆる　七八
おとづれてまし　一三一
おとゞひ　一二一
おとなしく　二八
おとなしければ　二〇
おなじこゝろに　五三
おなしさまに　一〇八
おなじさまにて　一一八
おなじ時雨のめぐりあふ世を　六一
おなじ旅の匿にて　一五六
おなじながめを　一三二
おなじはりまのさかひとて　一七三
同じ人　一三九
おなじ世ながら遠ざかりは　二一一
おなじ世ならば　一〇〇
おにがみまでもあはれとて　一六七
おのづから傳へし跡　九二
おはしたり　二五
おほかた　一五六
大方の名　六八
おぼしくて　一〇四
おぼつかなき程にしも　一〇四
おぼつかなさ　一〇七
大宮院の權中納言　一五一
おぼろなる月は都の空なが　一〇七
　　一二四
大井川　七六
面影にたつ　一三二
おもはましかば　一七二
おもひ　一五九
思ひ出で聞ゆるまゝに　一六一
思ひおきつる露をたづれて　一五〇
思ひおく　二九
思ひ知りて　二二
思ひ知りながら　四
思ひ捨つれども　一〇
思ひ絶えたり　一四二
思ひつゞくれば　五
思ひつゞけ　四九
思ひつゞけける　四二
思ひつられて　一二二
思ひつる　一五六
思ひなりぬる　一〇
思ひなれにし春の空　一二四
おもひ寢　一四九
おもひやるさへ　一三二
思ひやるにも　一五六
思ふばかりもいかゞと　一一五
おもへばいやし　一六九
親のいさめ　三
親のまもりは　二六
おりたつ　九〇
下戸　五二
御うへ　一一五
御方　一一〇
御返　二九
御尋れ候はざりし　一一五
御旅明日とて　一一五
御名　一〇七
御名もかくれなくこそ　一一〇
御まゐりありける日しも　一一五

か

鏡　三五
かゝる事こそなど　一三六
かゝる事ども　一一五
書きあつめたるあとおほく　一六八
書きあつめて　一一四
書きおく跡　三

かきくらしつる雨　四四
かきくらし　一一六
かきくれて　一一四
書きさすやうなりしを　一三一
かき留めたる　一九
斯くて住むらむ　六一
かくとだに聞えあへず　一一〇
斯くとも　一一五
神樂のことば　六
かけ留めたる　四九
かけとゞめて　一三六
かげをだに見し　一七八
かこちて　一七七
笠縫　四五
かしこきためし　一六七
敏ならぬ　四
かすみたゞよふはるの夜の月　一三一
かすみ晴れゐる心地　一三一
風に消えなば　一三六
風につれなき　六〇
方違　一一五
かたはらいたくなむ　一五九
かたはら去らず　二二
かたはらに　一六
かたひくしほ　五二
片淵の　四九
かたみにたのむ　二六
かたれば近きいにしへの夢　一五〇
かちびと　四〇
かぢを絶えたるふれのごと　一六九
且は　三〇
川音　七五
河原幾里とかや　七六
かひある涙の立ちかへる世を　一三一
かひなきものは　三
かへすがへす　一五九
かへすがへすも　三
かへすがへすも　一七二
壁のなかよりゐとめ出でたり　二
けむ書　五三
神のこゝろに任すらむ　五二
神のまに〳〵　五二
神やあはれとみるめたづれて　五三
通ふべくもあられば　四五
かよふらし　一六一
かりそめの草の枕のよるよるを　一五六
かりの世　四九

き

消えかへり　一一四
消えもせじ　一三六
消なあらそふ　九
聞きしには遠ひて　七六
聞きふるす　一四一
菊川　七五
聞くからに　七二
きこえあげてし言の葉　一七〇
聞え候ひしか　一一五
聞えしに　一四五
聞えたれば　二九
聞ゆる　四六
きこゆる　一〇四
北白河殿　一一〇
君　二九
きみ〳〵　一六八
君ひとり　一七七
行幸　一一五
京極の中納言　一四五
清見が關　八三
霧のまよひ　三八
きんだち　一七九

く

くがにあがれるいなのごと　一六九
草の枕ながら　一一四
草の枕にも立ち添ひて　一四九
くだされたり　一五五
下りしほどの日記　一五九
くだり給ひし後は　一六一
朽葉　六〇
朽ち果てし長柄の橋　八八
朽ち果てば　一七一
組み合せたる舟　七一
汲むめり　四〇
くもであやふき　五八
くもらぬ影　一一
くゆりかゝる　八三
暗くて　九八
くらべ見よ　一三二
車はかへしつ　三一
暮れ果てて　一四〇
暮れ果てれど　四五
皇太后宮の大夫　一七七
和德門院の新中納言　一四五

け

下向　一七九
けぢめ　三八
今日ぞのべつる　一七四
賢王　四

こ

越えくらす　七五
久我の太政大臣　一〇九
古今の序の詞　八七
心から　九〇
心から　一一六
心ぐるし　一六
心づかひ　一八
心づくし　一四三
心つくして　一四〇

こゝろとゞめば　二九
心にかゝりて　一一一
心のまゝの逢のみして　一七七
心のみ隔てずとても　一五五
心の闇　一五九
心の闇のひがめこそあるらめ　一五五
こゝろのゆきて　二五
心細さ　一五九
心やすく　二〇
心より外に　四五
心を一つにして　一三五
心をやりて　一五五
こし方　三三
こぞの春夏の戀しさ　一三九
言忌　二五
こと問はむ　五五
こと問はむ　八三
ことなる訴訟にはあらで　一七七
殊に　一一八
事にふれて　一四
ことの葉に　一六七
ことのまゝ　七四
詞　一五六
ことやま　七五
ことわりをたゞすのもり　一七二
ことわれ　一七七
こなたを思ひて　一五九
故入道大納言　一四九
このうれへ　四
この返事　一〇四
此のたびの　二五
この度は　一一六
この近きほど　二八
この手習にまたまじらざら　二六
やむは　一四五
この女院　
この人ばかりやあはれとも　一四九
おぼさむとて　一三一
この文に　一二九
このほど　六
この道のひじり　六一
この山までは昔見し心地するに　一五六
戀ひしのぶ心やたぐふ　三七
駒うちわたす　二九
こまかに　三七
駒の足の音　一六一
こまやかに　一一〇
今宵ばかりの出立　一六一
これも　一五六
これを見ば　六一
ころさへ變られば　八九
ころもで　一四七
子を思ふかた　一〇
子をおもふ心の闇　一四六
子をはぐくめ　九
權中納言の君　一二九

さ

四行が昔　七〇
齋宮の御子にしたてまつり給へりしかは　一四五
さえわびぬ　八九
さかしき　九六
酒匂　九八
さき立ちて行く　五四
前の右兵衛督　一〇七
さゝがにの　一七〇
さしかへるひまもなし　七一
さしも忍び給へりしも　一五〇
さすが　一三六
さすがに　七九
さそはれ出でなむ　一二
さだかに　八七
定めつれど　三五
定めなき命は知らぬたび　三二
さだめなき空　一三
さつき　一四〇
さて　一四〇
さてしもあらで　一七一
さても　四
さてもさは　八
さてもそれより　一七三
さてもなほ　一一六
さながら　一一
さながら　一六
定方の中納言　四五
さのみ　一四〇
さはりあらすな　三〇
さはりなく　五三
さぶらひ給ふ　五四
候ふなる　二八
さま〳〵あはれなるを　一四一
さま〳〵に書きやる程　二五
さまたげ　一一八
醒が井　一七七
さやかにて　四〇
さやの中山　三七
更に　七四
更に　八八
さりとて　五
さる人の子　一三
さわがしくて　一四六
さをもやすめず　一一〇
　　し　七一
志賀の浦浪たち　一五一
式乾門院のみくしげ殿　一〇九
しきしまの道　九三
しきしまや　一六七
時雨　一三

時雨さへ　三三
時雨なほしたひ來にけり　三五
時雨に過ぎて　四四
しぐれに立ちし旅衣　一〇八
しぐれぬひまもさぞしぐる
　ちむ
しぐれのもる山　一〇四
侍從　三六
侍從の宰相の君　一六
親しと言ひしばかりの人々　一五五
墓はしげなる人々　六九
しなのなる　一六
忍びがたく　一六九
しのび音　一二四
忍ぶ　一四二
忍ぶなみだに　一五〇
しはす　一六一
集　一一五
十六ぞかし　八
　一五八

しほ木　九七
潮干にひろふつせ貝　一三一
潮干のほど　五四
しまつ鳥　六六
しも　三六
障子　八一
俊成の卿の御女　一七七
續後撰よりうちつゞき　一〇九
知らざりけりな　三
知らざりし浦山風も　一三〇
知らずがほ　一一六
白浪の色もひとつに散る花　一三二
しるべ　九三
しるべ顔　五五
しなれ果てたる心地　一三五
新勅撰　一七七

洲崎　六五

す

すきびにも　一一九
すきびばかり　六
すゝぎなば　四一
鈴蟲の音を　一五六
裾野　六一
すてらるゝ　四
洲俣　四八
須磨とあかしのつゞきなる　一六九
住み來し人の面影　六九
墨田川　五六
すみわびて　六三
住むべき國もとむるにもあ
　らず　一三
末　一〇四
するたどる　五六
末つ方　一三五
するの世　一七二

せ

せうと　一〇八
せうと　一四六
せかる　四九
關　四四
せきとめられしかば　九
關のこなた　一四一
關の藤川　四一
關屋　四三
せめて思ひあまりて　一一

そ

僧正　七九
息　一七九
そこはかとなき事ども　一二四
袖ぞつゆけき　一五六
袖になみはかけじを　一二二
袖ぬらせとや宿りけむ　三五
袖のしづく　一六
袖のしづく　一〇八
袖のみなとの浪はやすまで　六五
その跡　八
そなたの雲をそばだてて　九四
そなたの空　二三
その里の名も白浪の　九八
そのしるし　一三五
その例と思ひ出でられて　一四一
そのついでに　一四九
そのまこと　一六八
その世に　六九
その世を聞けば　一七三
そのわたり　八三
空おそろし　七二
空なながめそ　二三
空にうかれいしざよひの月　一〇五
そら吹くかぜもやはらかに　一六八
　云々　一六八
それがなかにも　二〇
それとも　二五
それも　一四七
それゆゑに

た

大夫　一六
誰が方になびきはててか　八七
高師の山　六五
類　八
田子　九〇
田子の浦　九〇
たしかなる便につけて　一〇四
たしかなる所より傳りて　一二四
只今あるまゝの事　一一八
たゞこゝにしもめぐり來に
　けり　九二
立たずなりなば　八八
たゞ一人　二八
たちかへて　一四〇
立ちかへり　一一四

立ちかへるほど　二五
立ち添ふ　二六
立ちそふ　一〇〇
立ち離れ　一〇〇
立ちわかれ　一五九
たづさはりて　八
たつ日　一一六
立つ日をだに　一一六
たてまつる　一一八
たど〳〵しさ　一二四
たどり渡る　九八
だに　八七
谷の戸は隣なれども　一二四
たれを蒔きたるとがとてや　一六九
たのみかはしたる　一一八
頼む　一〇五
頼むぞよ　一三一
たのむぞよ　一七三
たのめてぞ行く　三二
頼もしな　一三七
旅衣　一五五
旅衣涙をそへて　一〇四
旅寢の夢に迷ひ來て　一五〇
旅の空を思ひおこせて　一五五
旅人のおなじ道　六四
他腹　一七九
妙なる法のはな　一三七
玉くしげ　九四
玉章　一二一
爲兼　一〇八
ためしおほかれど　八
たよりあらばと　一一五
誰か來て見付の里　七二

ち

ちぎり　一三七
ちぎり置く　一六九
ちぎりむすぶの神ならば　四六
ちしほ　六〇
地頭　一七七
忠臣　四
陳狀　一七九

つ

使待ち得　一五一
月影の谷　一〇三
月の都　六三
月も出でにけり　七五
つくづくと　二三
黄楊の小枕　八一
つけられず　一七九
蔦楓しぐれぬひまも　七九
傳りてさぶらひ給ふ　一四五
つたひしみづ　一六九
つたへしられけるを　一七七
つゝましくする事　一二二
包みあつめて　一二九
つゝみ給ひしかど　一四六
堤の方は云々　四九
つひに　二〇
露も時雨もひとつにて　一〇七
つらきためし　一七一
つるがをかべのあさひかげ　
八千代のひかりさし添へて　一七四
つれなく　九
つれなく振り捨てつ　三〇

て

手越　七九
手習　二二
手習にしたる　一二九
點あひて　一五八
點あひぬるも　一五五
天龍のわたりといふ　七〇
とかやいふ程　四五

と

疾く　二〇
とく　一三六
解けぬうらみ　四六
年さへ暮れぬる　一一四
年月を經て　九
年ふる岩　八三
年經たまひにける　一四五
とぞ覺ゆる　四一
とゞこほりなき　一七四
とゞまりぬ　三五
止る　一四
とゞめ置く　一六
とゞめられ　一七七
飛び別れ　一四六
とほつあふみ　七二
遠きむかし　七九
ども　一九
ともなる人　六四
とり集めて　一五一
とりわき　一六八

な

ながかれと朝夕いのる君が代　一七四
なかぞらのかぜにまかする　一七〇
なか〳〵　一二二
中にも　一六
中院の中將ときこえし人のうへ　一二一
ながむる空も　一一四
眺めあかして　一六一
ながめてわたる　一三〇
ながめむ　二三
ながらふらむ　九
鳴く　一四六
名草の濱ならば　一三〇

慰めかれたる　一六
泣く泣く　一七〇
なく〳〵出でし跡の月影　八〇
名殘もなく　一三六
名さへなつかし　四九
夏のほど　一五一
なでしこ　二九
なに恨むらむ　一一六
何として　九
何となく　一四
何のたよりに　六一
なのらむ　一四二
なほ　四
なほ　八
なほ　一一
なほ　四〇
なほ　五六
なほ　六一
なほ　一〇〇
なほざりならず覺ゆ　一四六
なほざりにみるめばかりを　八一
かり枕　一三〇
なほなき心地　一七四
なほもさかえむ
なみだしぐるゝほどやいか　一〇七
にと
涙たゞ枕のうへに立ちさわ　八三
ぐ
涙もともに亂れ散りつゝ　一四
なみだに袖の色ぞこがるゝ　七九
涙のかゝる　一二一
涙はかけじ　二五
涙も文もかきあへず　一一八
波の上　八八
涙のかけ越す　六七
涙のぬれぎぬ　八三
涙のひまなく　一三〇
なみもしづかに　一六八
涙もたかしの濱　六五
ならはずよ　八四
ならはぬ旅　一四六
なるみ潟　五二
馴れ來つるを　二二
なれし里　一一九
名をとめて　一六八

に

濁るこゝろ　四一
にやあらむ　四九
女院　二八

ぬ

ぬしやたれ　六一

ね

れこそ泣かるれ　一五七
閨　一六

寢られじな　一二五

の

のき端も荒れて　一七〇
のころよもぎの數　一七七
のころよもぎとかこちてし　一七三
野路　三三
後の世をとへ　九
のどかにすごくて　一〇三
野なかのしみづよどむとも　一七三

は

はかなしや　四九
はかなしや　一五〇
はぐくみおほすべきよし　二九
箱根路　九三
はしばし　一一九
はじめて　六
はて　六一
花曇　一三〇
はゝき木のそのはら　一六九
濱路　一〇〇
濱千鳥　二〇
濱松のかはらぬかげ　六九
はや　二三
早川　九六
早瀬の小舟　七一
はるかなり　七六
はるかなる旅の空おぼつか　一四六
なさに
春にもなりにけり　一二四
はるゞゞと　二二
春より夏にうつるこずゑ　一四〇
はれぬこゝろ　一三二

ひ

日いとうらゝかにて　九〇
干潟　五四
光を添ふるあまのもしほ火　一三六
比企の谷なる　一四二
引馬の宿　六八
日頃のおぼつかなさ　一三一
ひじりの御代　一六七
ひとかたならぬあとをおも　二〇
はば
ひとかたに袖やぬれまし　一一六
人戀ふる涙の海　一二一
人しげし　七九
ひとすぢに又鳴かずはよし　一四三
人づて　一四二
ひとつながれを波みしかば　一七三
一つ見ゆる　六一
一所うまれ給ふばかりにて　二八
人には聞かれじ　一四六
ひとのこゝろをたれとして　一六七
人のなき　七九
ひとのなさけもかゝりけり　一七三

人々 一五九
人目つつみに 四九
人も見えず 三三
人やりならぬ道 一四
人よりは 一四六
人わき 一四三
人をすて給はぬ政 四
非法 一七七
ひまおほき 四三
日まぢ 一三五
評定にも及ばず 一七七
平野 四五
費つ方 四六
費つ方 六〇
ひろになりて 七四

ふ

ふかきこゝろ 四九
深き契 九
深草の前の齋宮 一四五
富士川 八九
富士の烟とぞ見し 一五九
富士の烟を見てもなほ 一五九
二たび勅をうけて云々 八
二度三度の 一〇九
二つなく三つなき法 五〇
二村山 五六
筆にまかせて思ふまゝに 一三一
ふでのあと 一七二
筆もおよばば 六六
舟に乘るに 七〇
不破 四三
文の詞につゞけて 一四六
文待ちえて 一一五
ふもとの里に菊川といふ所に 七五
降りくらせば 四四
ふり捨てて來し 一五六
ふり捨てられなむ名殘 二二
降りそふ 一〇八
降りみ降らずみ 一三
ふるさと思ふ袖ぬれて 三三
故郷には戀ひしのぶ 一一八
文屋康秀がさそふにもあらず 一三

ほ

本意なうこそ 一一五
法華經 一三五
ほさぬうらみ 九一
細川のながれ 九
ほそかはやまのやまがはの 一六九
ほど 一一五
ほど 六一
ほど 六五
ほとゝぎすの御たづれこそ 一四〇
時鳥まれなる習 一四三
ほどにしも 七八
ほどにしも 一二四
ほどはくもゐ 一一四
ほどはくもゐのあはれ 一一六
ほど經て 一二一
ほのかにも 一四二

ま

まがき 一六
まかりまうしの由に 一一〇
まぎるゝ事なく 一二九
まぎるゝ程 一一五
まことしき 二八
まこと少く 六
まさきのつな 四八
まして 一六
またあふ坂 三二
又書きつくべし 一六一
まだ聞かざりし涙のよるよる 一二四
またたれか引きなほすべきと 一七二
ばかりに 六一
待ちけりな 一二五
待ち見たてまつる 一一五
まづ 六五
松のひゞき 七八
問なく 三六
まねびたらむ 四六
まもれたゞ 二〇
まよはまし 一四五

み

見えさせ給はざりしかば 一一〇
見えずなりぬ 五七
見えずなるらむ 八七
みことのまゝにしたがひて 一六八
見し人なみに 六九
三島の明神 九二
見し世 一四〇
三度になるべき曉 一三五
みだりがはしき 一七二
三人の男子ども 八
みちしるく 一六七
道しるべに 二五
みちのおく 一四三
みちのくに 一四〇
道のほど 一〇七
道をかへりみる恨 一一
道をたすけよ 八
道をまもり 九
みづぐきの 三
みづぐきのあと 一七四
見付の國府 七二
満つしほの 五三
水の泡の 七一
水の田でたらむ面影 七六
水の井 七二

みなかみも堰きとめられて　一六九
みなれて　六七
身にそふ友　一三七
峯つゞき　七五
峯殿　一一五
蓑うちはらふ　四五
身の上の事　三
御法のしるしにや　一三六
身はかすならず　一七〇
身ひとつなりけり　四
み冬立つ　一三
見まはされて　一六
都島といふ島のはしと足と　五五
赤き　七五
みやこに　一二一
都にも枕の下に滋へて　一〇三
都のおとづれ　七六
都のことは大井川　一二五
都の月を身にそへて　一三二
みやこの花を人や問はまし　一一八
都の文ども　一四九
都まで語るも遠し　一三〇
都をわすれ貝　六〇
宮路山　二八
宮の御かたの戀しさもかれて　九二
申し置くついでに　六一
宮柱　八三
見ゆ　二〇
見ゆる　一六八
三代の跡　一一
三代まで斷ぎしひとの子　一七三
身をえうなきものになし果　一六九
てて　一四六
身をかへりみず　一二二
身をたすけよ　一〇〇
民部卿の典待　一五六
昔　一二二
昔のかたみ　二〇
昔の人　二〇
むかしの人　一〇〇
昔の人　一五六
むかしの枕さへ　一六
むかしをぞ問ふ　六九
武藏の前司　一七七
むすびおきつ　八一
むすぶ手に　四〇
むすぶの神　四六
むつかしきにほひ　八三
めかりしほ燒く　一一九
めかりせざりつる程だに　一五
めぐりあひて見つる命のほど　六九
めづらかに　七八
珍しくうれしさ　一一五
目に立つ　四六
目もあはず　八八

も

藻鹽草　一九
もとのこゝろにまかせつゝ　一七三
物のあやめも分かぬ　六一
ものより殊に　二三
物をやはらぐる　六
百千のうたの古反故　八
もや　一一
守山　三五
もれ　四
もろともに　九
もろともにめかり鹽燒く浦ならば　一二二

や

やさしく　一四一
やさしくあはれにて　一〇四
やさしく髢ゆ　一五九
やさしくも　七八
やしま　一六八
野洲川　三七
やすく　一〇
八橋　五七
宿借りかれ　七九
山路かさなる　一五五
山路わけ來し　一〇八
山寺　一〇三
やまとうたの道　六
やまとことば　一七四
やまとなでしこ　二九
やまとのくに　一六七
山とほき原野　六〇
山のかひある　九三
山伏　二五
山ほとゝぎす　一四〇
山も野もいと遠くて　五六
やむごとなき所　七八
彌生　一三五
やよや　一七二
やらむかたなく　一一
やるかたなく　五

ゆ

ゆかしさよ　九四
ゆがめることを　一七三
ゆきき　四九
ゆきき　七一
行きてはかへる　一五六
雪さへたかき山　八八
雪になりゆく　一一六
雪にやいとゞ冴えまさるら　一〇八
雪のひまなさ　一一四

雪よりおろす　八九
ゆくさき　三三
行くさきかけて　一七二
行さき遠き野路のしの原　三三
ゆくへも知らぬ　一七〇
ゆくりなく　一〇四
ゆくりなくも　一二
湯坂　九六
ゆふぐれかけて　五八
ゆふして　一七二
ゆふやみ　五六
ゆめにも　七八
夢にも人を　七八
夢のなごり　一五〇
夢ばかりにも　二
故なく　九

よ

よきぬ道　五二
よこ雲のそら　九四
横浪かくな　二〇
よしなど　一四九
よそならず　六七
よそに聞き來し　八四
よそになしぬるあしがらの山　九五
よつのうみ　一六八
四とせのはるになりにけり　一七〇
世にもつかへよ　一六九
世のためも　一七一
世のまつりごとしげければ　一七〇
夜ぶかき　三八
夜ぶかく　六三
詠まれたりけるなめり　一五九
よも　二〇
よもうき浪はかけもせじ　一〇〇
夜もすがら　四五
よもすがら　一一八
よもの神たち　六
代々に　一九
世々のあとあるたまづさ　一七一
寄るかたもなく　一六九
よるのつる　一七〇
夜の宿なまぐさし　八三
よろづのはゞかりを忘れ　一一
よろづのわざ　一六七
世をおもふ情　四

り

律師　二五

れ

例の　一一八
例のところどころ　一二四

わ

我が住むかたのみやこ鳥　五五
わがためや　六五
和歌の浦　一九
和歌のうら風へだてずば　五二
和歌の浦路に年を經て　一三六
和歌のうら路のもしほぐさ　一六八
我が行くさきの　五三
わか〳〵しき　一三五
分け行く　六〇
忘られぬもとの心のありが　一七七
ほに　一七三
わすれずば　六一
わたうど　一七一
わたくしのなげきのみかは　四二
わたらましやは　七五
渡らむと思ひやかけし　五五
わたり　一六九
わづかにいのちかけ樋とて　七六
わづらひ　一六九
侘び果つる　八〇
藁科川　一三五
わらはやみ　一三〇
われぞくだくる　四六
われ迷はさで　一五八
わろからむ事

ゐ

繪に書きてまし　六六

を

をかし　八三
をかしくなりにけり　一五五
をかしくも　七八
岡の葛葉　三
をこがまし　三〇
をさなき人々のこと　一一八
惜しからぬ身ひとつ　一〇
數へざりせば　二〇
をちこち　七五
をちのしら雲　一五五
小野の宿　三八
かりからなりけり　一五〇

語句索引終

解題

一　作者阿佛尼

本書の作者阿佛尼は、はじめ順德院の皇后安嘉門院に仕へて、右衛門佐とも四條とも呼ばれた。後、當時歌壇の大御所たりし藤原爲家に嫁して、慶融阿闍梨、源承律師、爲相・爲守の四男を擧げた。外に紀内侍といふ女子があつて、それが五人中の最年長者であつた事は、本書の記事にも見えてゐるが、殘月抄にはその父は爲家でないと斷つてゐる。その說の當否を斷ずべき史料は無い。爲家の歿後、剃髪して法名を阿佛と稱し、世に北林禪尼と呼んでゐた。阿佛尼の歿したのは弘安六年九月であつて、時に年七十五才であつたといふ傳へもあるが、さうすると末子爲守を生んだのは五十八才といふ事になつて、頗る疑はしい。明確に斷ずべき資料は無いが、常識上から考へて、少くもその傳へより十年位若くて死んだものと臆測される。續古今集羇旅部に、

思ふこと侍りける頃、父平度繁朝臣とほたふみの國にまかれりけるに、心ならずともなひて、安嘉門院右衛門佐

鳴海の浦を過ぐとてよみ侍りける

さてもわれいかに鳴海の浦なれば思ふ方には遠ざかるらむ

とあるに徵すれば、父が平度繁といふ人であつた事は明かであるが、その如何なる人物であつたかは知

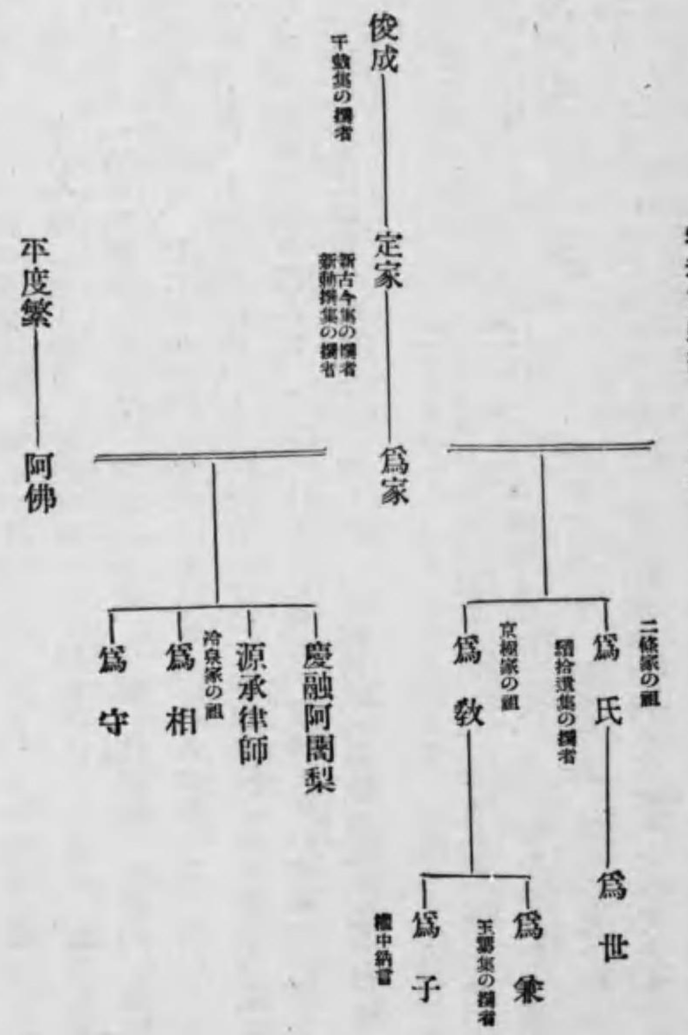
るに由がない。而もその歌は、同じく阿佛尼の所作と傳へられる「うたゝねの記」にも、第一句が「これやさは」となつてゐるだけの相違で載せられてゐる。そして遠江に下るについては、

その頃、後の親とかたのむべきことわりも淺からぬ人しも、遠つあふみとかや、聞くもはるけき道を分け、都の物語せんとて上りきたるに、何となく細やかなる物語などする序に、「かくてつくづくとおはせんよりは、ゐなかの住ひもみつゝなぐさみ給へかし。かしこも物騒しくもあらず。心すまさむ人は住みぬべきさまなる」など、なほざりなく誘へど、さすがひたみちにふり離れなむ都のなごりも、いづくを忍ぶ心にか、心細く思ひ煩はるれど、あらぬ住ひに身をかへたると思ひなしてとだに、憂きを忘るゝたよりもやと、あやなく思ひ立ちぬ」

とある。これに從へば、母が田舍へ再緣でもして、その夫に當る人が都見物に上つて來て、その序でに相伴つて遠江へ下つたといふ事になる。吉川氏は「うたゝねの記」の僞書であらう事を高調してゐるが、それも所詮は臆斷に過ぎない。何れにしても阿佛尼の生家と生年と共に明かでないといふ事に歸着する。

二　亡夫爲家

本書述作の抑もの動機は、筆者の子爲相と繼子爲氏との領地相續爭である。從つて本書の內容を述べるに先立ち、一通りその眞相を考へて見る必要があるが、その順序として先づ亡夫爲家との交涉を考察して見なければならぬ。



この表に於て見る通り、爲家は俊成の孫、定家の子である。俊成は平安末期から鎌倉初期に掛けての歌道の大家で、後鳥羽院の殊遇を得、後白河上皇の院宣によつて千載集の撰者となつた。その歌は千載集に三十餘首、新古今集に七十餘首、續後撰集に二十餘首等入つてゐる。家集を長秋詠藻といひ、他に歌學の書として「古來風體抄」がある。定家は高倉、安德、後鳥羽、土御門、順德、後堀河の諸朝に仕へ、官權中納言に至り、世に京極黄門と稱せられてゐる。代々和歌を以て仕へてゐたが、殊に後鳥羽院の寵遇を忝うした。土御門帝の時、上皇の院宣によつて藤原家隆と共に新古今集を撰び、更に後堀河帝の勅命によつて新勅撰集を撰んだ。定家の才は父に優り、家隆と共に歌道の巨匠として世に並び稱せられてゐる。殊に定家は歌學の權威として知られ、「近代秀歌」「詠歌大概」「毎月抄」等歌學に關する數種の述作がある。

爲家は所詮父祖の名跡を繼ぐに足るだけの才ではなかつた。而も父祖二代に依つて形成された門閥の力は、當時世に優れた歌人の現はれなかつた事實と相俟つて、遂に彼を一代の大歌匠たらしめてしまつた。斯くして彼は斯道の大御所として、勅命を受けて、續後撰集、續古今集を撰進し、歌道の門閥全く玆に確立して、子孫その才にあらずして永く斯道の覇權を握るに至つたのである。

爲家が京極中納言藤原定家卿の長子として呱々の聲を擧げたのは土御門の建久九年(一八五八)の事であつた。嘉祿の初め二十八歳の頃既に藏人頭に任ぜられ左近衛佐を兼ねてゐた。尋いで從三位參議に進み、嘉禎年中中納言に任じ、民部卿を兼ね、仁治二年四十四歳にして權大納言に上つた。彼の官歴も亦頗る惠まれたものであつた。

爲家は最初宇都宮頼綱の女を娶つて、爲氏、爲教を生ませた。爲氏の生れたのは彼が二十五才の貞應元年、爲教の生れたのは二十九才の嘉祿二年であつた。その後、妻を亡つて、更に本書の著者阿佛尼を娶つて、慶融阿闍梨、源承律師、爲相、爲守の四子を生ませた。先妻の父頼綱は東國源氏の重鎭で、鎌倉幕府に對してもかなり勢力があつたが、幕府から常に猜疑の目を以て監視されて居り、たま〳〵幕府親近の者の讒に遇ふといふやうな事もあつて、快々として樂まず、法然上人の教化を受け、實信坊蓮生と號した。親鸞上人とも親しい間柄であつたと傳へられてゐる。その出家の際には、郎黨六十餘人も同時に出家したといふ程の德望家で、一面又和歌を善くし、爲家の高弟であつたので、自然その女を爲家に納れたのであらう。その女の死んだ年は明かでないが、長子爲氏と次子爲教とが四つ違ひである所から見て、その死が爲教の生後數年の内に在つたものの如く考へられる。

爲家が阿佛尼を後妻に迎へたのは何歳の頃であつたか、それも史實の徵すべきものは無いが、溫厚の爲家は子供の愛にも引かれたらうし、父定家の手前に氣兼ねもしたらうし、かたがた身分も違ひ年も違ふ阿佛尼と結婚したのは、少くも定家の死卽ち仁治二年(一九〇一)彼が四十四歳恰も任大納言の年以後の事であつたと考へられる。玉葉集に

曉の時雨にぬれて女のもとより歸りて、あしたに遣しける　前大納言爲家

歸るさの東雲くらき村雲も我が袖よりやしぐれそめつる

返し　安嘉門院四條

きぬ〴〵の東雲くらき別路に添へし涙はさぞしぐれけむ

歎く事ありて籠り居て侍りける人のもとに遣しける　前大納言爲家

大方のさらぬならひの悲しさもある同じ世の別れにぞ知る

返し　安嘉門院四條

はかなさはある同じ世も頼まれずたゞ目の前のさらぬ別れに

抔あるのは、蓋し二人の戀仲時代の贈答であらう事が推測される。爲家は康元元年(一九一六)五十九歳を以て出家し、その時、一切の家督を長子爲氏に讓り渡したらしく考へられる。爲相が生れたのは弘長三年彼が六十六歳の時であるが、その以前既に慶融、源承の二子を擧げてゐる。これ等各種の事情を綜合して見ると、その結婚は爲家の任大納言後、入道以前の間にあつたものの如く推測せられる。何れにしても阿佛尼が當時四條と呼ばれて安嘉門院に仕へ、女流歌人として錚々の名があつて、孤閨寂寞たりし當時の歌匠爲家のお目に止り、遂に戀愛から結婚へと極めて自然の進行を見たものと考へられる。「うたゝねの記」を阿佛尼の所作と認めるとすれば、當年の阿佛尼も亦破れた戀の心の痛手を爲家の溫い愛情に依つて醫したのであらう。

三　領地相續の爭

俊成の時代から、和歌所の采邑として、御子左家で管領してゐた土地に、播磨國三木郡細川の莊と、近江國阪田郡小野の莊とがあつた。これはもと和歌所の所領であつたのだらうが、定家の頃からは、いつとなく一家の私領となつて、そのまゝ爲家に傳へられた。爲家は康元元年五十九歳を以て出家し、それ等一切の家督を長子爲氏に讓り渡したやうである。然るに爲家は、文永十年七月と同十一年六月との兩度に遺言狀二通を作つて、一旦爲氏に與へた細川の莊を取り戻して、幼子爲相に與へる事にした。かくて爲家は建治元年五月(一九三五)七十八歳を以て歿した。ところが爲氏は父の遺言に從はず、細川の莊を爲相に渡さなかつた。これが二條家(爲氏)と冷泉家(爲相)との紛爭の發端である。

爲家が一旦爲氏に讓つた領地を取返して爲相に讓るに至つた理由として、爲氏が屢々父の意に反する不孝の行爲があつたからだと傳へられてゐる。然し吉川氏などが推論してゐる通り、若い後妻を迎へ、老年に及んで愛子を擧げた爲家が、その愛に溺れて細川の莊を爲相に讓らんとするに至つたものだらうと想像する事は、最もよく事實の核心を摑んだものではあるまいか。由來爲家は溫厚の君子人であつた。その晩年が所謂好々爺であつた事は想像するに難くない。それに反して阿佛尼がきかぬ氣の女、男優りといふタイプの女であつたらう事、これ亦老尼の身として遙々鎌倉迄訴訟に行つた一事に徵しても推し得らるゝ事と思ふ。お人よしの夫は既に老いて居り、繼子爲氏が世を張つて居る。而も我が子爲相は幼

少である。其の間に處して男まさりの彼女が、愛兒の將來の爲めに領地讓渡を夫に慫慂したと考へる事も、亦決して不當の想像ではないと思ふ。この想像が事實に合ふものとすれば、父爲家の死歿の當時既に五十四歳に達して、それまで既に二十ケ年もその地を領有支配して來た爲氏が、頑としてその遺言に抗し、細川の莊を僅か十三の小童爲相に渡さうとしなかつたのも、亦人情然るべき所だとも考へられる。この間の消息を間接に物語る資料としては群書類從第十輯所載の「延慶兩卿訴陳狀」を擧げる事が出來る。これは主として和歌の傳統や勅撰集の撰者の件について、爲敎の子爲兼の申條に對し、爲氏の子爲世の辯疏した奏狀の抄錄であつて、爲兼が爲氏の不孝をほのめかしたのに對し、爲世は、爲家爲氏父子の不和を繼母阿佛の讒言に歸してゐる。同母の出でありながら爲敎は兄爲氏と快からず、寧ろ異母弟爲相に同情してゐた事は、その子の爲子が、權中納言の名に於て本書贈答中に最も重い立場に在る事でも察せられる。爲氏爲敎兄弟の反目は家產相續上の俗爭に過ぎなかつたやうであるが、爲氏の子二條爲世と爲敎の子毘沙門堂爲兼とに至つては、歌道流派上の爭として互に相拮抗したのであつた。だから「延慶兩卿訴陳狀」中の記事にしても、何れか一方の言ひ狀を以てのみ斷じ去るわけには行かないのである。

原山の如何は想像に止まる。兎に角爲家の遺言は爲氏に依つて蹂躙し去られ、細川の莊は爲相の有に歸しなかつた。阿佛は老尼の身を以て、愛子爲相の爲めに敢然として之に抗し、まづ第一の手段として爲氏の無法を朝廷に訴へ出たが、更に埒の明かなかつた事は、本書卷頭の文に

また賢王の人をすて給はぬまつりごとにも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、……

など愚痴を述べてゐる事に依つて推測される。そこで阿佛は最後の手段として、建治三年十月十六日、愛兒を都に殘して自ら鎌倉に下り、幕府に訴へ出た。所が當時元寇の將に起らうとしてゐた時で、國事多端であつた爲めでもあらう、訴訟の判決は容易に下らず、阿佛は極樂寺の境內なる月影の谷の寓居で歿した。それが弘安六年(一九四三)の事で、行年七十五才の說もあるが、その疑はしい事は既に述べた通りである。爲氏も亦訴訟のために鎌倉に下つたが、これも弘安九年六十五才を以て鎌倉の旅寓で歿した。

斯うした多年の係爭も、遂に爲相の勝訴に歸して一旦落着したが、爲氏の子爲世の代になつて、更に再審の訴訟を提起した。然しそれも正和二年(一九七三)爲相五十一才の時、再びその勝訴に歸し、阿佛尼の遺志も完全に果されたのであつた。爲相はこの事件の爲めに鎌倉に下り、彼の地に住して、遂に嘉曆三年(一九八八)鎌倉で死んだ。隨分根氣のいゝ訴訟事件であつたと謂へよう。

四　本書の內容

「十六夜日記」といふ表題は作者自らの附けたものではない。書中に、

ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。
今日は十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。
ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの月やおくれぬかたみなるべき。
都を出でしことは、神無月十六日なりしかば、いざよふ月をおぼしめし忘れざりけるにやと、いとやさしくあはれにて……。
めぐりあふ末をぞたのむゆくりなくそらにうかれしいざよひの月

など屢々十六夜の月の事が出てゐるので、自然それが本書の題名に定まつたのであらう。古寫本には、「十六夜日記」とある外、「阿佛尼海道記」「阿佛坊道の記」「阿佛尼東下り」等と題したのもある。

十六夜日記の内容は、四段に分けて見る事が出來る。第一段は鎌倉への旅を思ひ立つまで、第二段は愛兒等との悲しい別れ、第三段は道中の記事、第四段は鎌倉寓居に於ける京都との贈答で、卷末別に長歌一篇を添へてゐる。第四段の記事は弘安元年（一九三八）八月二日を以て終り、長歌は同三年（一九四〇）の春に成つたものである。蓋し十六夜日記一卷は、鎌倉の寓居に於て、出發の際や旅中に筆錄して置いた和歌を辿つてその思ひ出を綴り、都との贈答を追錄して一旦筆を擱き、更に長歌一篇を追記したものであらう。

第一段「東への首途」は凡そ六節に分けられる。即ち（一）繼子爲氏の不孝を罵り、（二）訴訟の朝廷に取上げられざるを嘆じ、（三）和歌の效驗を述べ、（四）家系から細川の莊の件に論及し、（五）鎌倉へ訴へ出でんとする心事を擧げ、（六）旅立の心細さを敍してゐる。こゝ迄は文章ばかりで、和歌は一首もない。

第二段は五人の子との哀別のさまで、その一人々々の悲しい別れの歌を錄するのが眼目のやうに見られる。

第三段は「東路のたび」である。都を出發したのが建治三年十月十六日で、鎌倉についたのが同月二十九日、丁度十四日掛りである。而も建久元年頼朝が京都から鎌倉に下つた際、十六日を要したのに比すれば、正に二日早いのであるから、かなり心急ぎの旅であつたものと考へられる。當時京都から鎌倉までの道程がどれだけあつたか判明しないが、大體百二十里前後と見ると、一日平均八里餘の行程になる。恐らくその大部分は馬などに乘つて歩いたものであらうが、それにしてもかなり難儀な旅行であつたらう事は、想像するに難くない。今本文の記事に從つてその順路日程を辿つて、之を表示して見ると、凡そ次のやうな事になる。

日	出發地	宿泊地	經過地
十六日	京都	近江の守山	逢坂の關、野路
十七日	守山	近江の小野	野洲川

十八日	小野	美濃の笠縫	醒が井、關の藤川、不破の關
十九日	笠縫	尾張の一宮(下戸カ)	平野、結神、洲俣川、一宮
二十日	一宮(下戸カ)	三河の八橋	下戸、熱田、鳴海潟、二村山
二十一日	八橋	三河の渡津	宮路山
二十二日	渡津	遠江の引馬	高師山、濱名橋
二十三日	引馬	遠江の見付の國府	天龍川
二十四日	見付の國府	遠江の菊川	佐夜の中山
二十五日	菊川	駿河の手越	大井川、宇都山
二十六日	手越	駿河の波の上	藁科川、息津の濱、清見が關
二十七日	波の上	伊豆の國府	富士川、田子の浦
二十八日	伊豆の國府	相模の酒匂	箱根山、早川、湯坂、鞠子川
二十九日	酒匂	鎌倉	

第四段は鎌倉の寓居に於ける京都との贈答の歌が中心になつてゐる。その贈答の相手を本文の順序に擧げて見ると、

(一)宇都山で山伏に手紙を託して差上げた人
(二)權中納言(爲教の女)とその兄爲兼
(三)式乾門院の御匣殿(久我の太政大臣源通光の女)
(四)姉君と妹尼
(五)宇都山で山伏に手紙を託して差上げた人
(六)權中納言
(七)權中納言
(八)權中納言
(九)和德門院の新中納言(定家の女)
(一〇)爲相
(一一)爲守
(一二)權中納言

斯ういふわけで、權中納言との交渉が一番多い。文末に、都の歌ども、この後おほくつもりたり。又書きつくべし。ともあり、またそれまでの贈答にしてもその全部を錄したものとは考へられぬが、兎に角これに依つて

大體阿佛尼の交際の範圍は推測される。

長歌はそのはじめの部分に、

子をおもふとて　夜の鶴　泣く泣く都　出でしかど　身は數ならず　鎌倉の　世のまつりごと　繁ければ
聞えあげてし　言の葉も　枝にこもりて　梅の花　四年の春に　なりにけり

とある事に依つて、弘安三年の春に作つて、日記の後に追記したものと推定する事が出來る。その内容は、(一)和歌の效驗と勅撰集の由來、(二)領地横領の歎きとその訴訟、(三)家庭の慘狀と歌道の衰頽、(四)主張貫徹の期待と古人の類例、といふやうなもので、恰も卷頭の一節を韻文で繰返したといふ形である。

五　本書の歌文

本書の文章は純國文體のもので、海道記や東關紀行に見る如き漢文系の修辭は少しも無いが、而もその筆致は簡潔勁逸で情理兼ね備つた觀がある。殊に複雜な事情を要領よく而も滋味の豐かな筆で敍し去つて行くあたり、推服に値するものがある。尤もそれは主として第二節以下に對していふ事である。卷頭の第一節「東への首途」を敍した文は、潤飾に過ぎて却てわざとらしい感じがする。莊重絢爛の極としてひどく推賞してゐる人もあるが自分はさほど感心しない。

この筆者は助詞の用法に於てかなり特殊の好みを持つてゐたものの如く考へられる。例へば

都のおとづれいつしかにおぼつかなき程にしも、

は「いつしかと」といふ方が普通だらうし、

續後撰よりうちつゞき、二たび三たびの、家々の打聞にも歌あまた入り給へる人なれば、

は「の」の字の無い方が自然だらう。これ等は或は轉寫の際の誤かとも思ふが、それを立證すべき古寫本でも出ない限り、やはり原文に順應して特殊の用例と見る外あるまい。

記述がなげやりに過ぎて解釋上に疑義を生ずべき所もかなり澤山にある。例へば、

女の子はあまたもなし。たゞ一人にて、この近きほどの女院にさぶらひ給ふ。院の姫宮一ところうまれ給ふばかりにて、心づかひもまことしきさまにて、おとなしくおはすれば、宮の御かたの戀しさも、かれて申し置くついでに、侍從、大夫などのこと、はぐくみおほすべきよしも、こまかに書きつけて、

の如き、隨分分りにくい書き方である。「たゞ一人」といふのに「あまたもなし」も變だし、「院の姫宮一ところうまれ給ふばかりにて」の文句に依つて、御奉公向も大して忙しくないと考へさせるのもかなり無理だし、「宮の御かたの戀しさも、かねて申し置く」なども一寸了解に苦しむ文句だと思ふ。

よもすがら降りける雨に、平野とかやいふ程、道いとわろくて、人通ふべくもあられば、水田の面をぞ、さながら渡り行く。

も常識的に見て甚だわかりにくい。それから、

二十三日、天龍のわたりといふ。舟に乘るに……

に至つては文句が唐突に過ぎるために、「……いふ舟」と續けなければならぬと主張する人もある始末である。それから二十六日の條には、

ほどなく暮れて、そのわはりの海ちかき里にとゞまりぬ。

とありながら、更に二十七日の記事の前に、

今宵は、波の上といふ所に宿りて、荒れたる音、更に目もあはず。

とあつて、古來疑義の種となつてゐる。更に、

この姉君は、中院の中將ときこえし人のうへなり。今は三位入道とか。おなじ世ながら、遠ざかりはてて、おこなひ居たる人なり。

に至つては、文の不備の甚しいが爲めに、「三位入道」は姉君の呼び名かそれとも夫中院の中將の呼び名か、「おなじ世ながら遠ざかりはてて」とは誰が誰と遠ざかつたといふのか、その邊について全然反對の意見が世に行はれてゐるやうな有樣である。

文に敍上の不備はあつても、兎に角それが簡潔勁遒な文として、我が古典文學中にかなり鮮かな一つの存在であり得る事は確實である。所が書中の歌に至つては、大部分全く言葉の遊技、理窟の技巧で、殆ど些の藝術味も認められぬ代物である。

片淵のふかき心はありながら人目づつみにさぞせかるらむ

一の宮名さへなつかし二つなく三つなき法をまもるなるべし

こと問はむ背と足とはあかざりし我が住むかたの都鳥かと

誰か來てみつけの里と聞くからにいとゞ旅寢の空恐しき

思ひ出づるみやこの事は大井川いくせの石の數も及ばじ

など如何にも馬鹿々々しい。當時の歌道が全く言葉の遊技に墮しきつてゐた事は明かであるが、それにしても歌人として人も許し我も許した阿佛尼の歌としては、あまりひど過ぎるやうに思ふ。而も都との贈答中には往々にして割合にいゝ歌が發見される。

花曇ながめて渡る浦風にかすみたゞよふ春の夜の月

あづま路の磯山風のたえ間より波さへ花の面影に立つ

都人思ひも出でばあづま路の花やいかにとおとづれてまし

の如きがそれである。殘月抄に從へば、阿佛尼の歌の勅撰集に載つたものは、續古今三、續拾遺六、新後撰一、玉葉十一、續千載一、續後拾遺一、風雅十一、新千載一、新拾遺三、新後拾遺一、新續古今五である。今一例を續古今に求めて見ると、「さてもわれ如何に鳴海の浦なれば」といふ歌の外に、

人知れずこそ泣かるれ空蟬の身をなきものと思ひなせども
さらでだに有りしにもあらぬ同じ世をそむくと聞くぞいとゞ悲しき

の二首があつて、大體前記三首と同程度の作品である。續群書類從三百九十八卷に「安嘉門院四條百首」といふのがある。後人の撰集したものだらうが、その歌が果して阿佛尼の所作とすれば、こゝにも本書以上の良歌が數々發見される。例へば、

關路早春
關守もまたおどろかぬ逢坂の山路夜ぶかく春やこゆらむ

田家若菜
とぢこむる氷の下の小山田にいかで若菜の春をしるらむ

野夕夏草
思ふ事あまりにしげき夏草の下に亂るゝ小野のゆふ露

行路夕立
ゆくさきも家路も遠きなかぞらに宿るかげなき夕立の雨

初秋朝風
今朝かはる風につけてや荻の葉も露おきあへぬ秋を知るらむ

田家擣衣
夜寒なる山田のおしれかりそめの庵もるしづも衣うつなり

の如き、同じく言葉の遊技にしても、これなら幾分か藝術らしい趣があるが、前記の如き本書中の駄歌に至つては何とも致し方がない。蓋し當時の人並に、阿佛尼も亦「歌を拵へる」事がうまくて、「心の聲としての歌」などはてんでアタマの中に無かつたのだらう。從つて旅中の屬目寓感の、深き考案を經ずに三十一文字となつて現れたものが、せい〳〵地名を掛けて綾なした程度に止つてゐるのは、寧ろ當然過ぎる程當然の事であらう。

要するに本書は、文に於て優れ歌に於て劣つてゐる。而も第一段を除くの外、例へば伊勢物語に見るが如く、歌が主材で文は殆どその前書の觀がある。これだけの筆に惠まれた阿佛尼が、東路の紀行文にもつともつと澤山の文句を費さなかつた事をかへすがへすも遺憾に思ふ。

六　他の述作

阿佛尼の述作として傳へられるものは、本書の外に、群書類從卷三百三十一所載の「うたゝねの記」、同二百九十二所載の「夜の鶴」、同四百七十七所載の「乳母(めのと)の文」があり、又後人の撰に係る「安嘉門院四條百首」がある。

「うたゝねの記」は、戀人との交渉が絶えた所から無常を觀じて太秦に詣で、後髪をそつて居をぬけ出

し、嵐山を越えて嵯峨に着き、そこで佛道の修行をしてゐたが、病氣になつて結局又故郷に歸り、やがて「後の親とかたのむべきことわりも淺からぬ人」に伴はれて遠江に行き、更に「いとをさなくよりはぐくみし人」の危篤の報で都へ歸つたといふやうな筋である。文の趣は源氏物語などを摸したといふ風で、物語といふに近い文體である。從つて十六夜日記の文と較べると、所詮同一の筆者とは思へぬほど違つてゐる。これあるが爲めに、吉川秀雄氏の如きは、夫木抄に阿佛尼の歌が五十一首載つてゐて、十六夜日記中東下りの部にある歌の約三分の一はその中に含まれてゐるのに、「うたゝねの記」中の歌は一首も出てゐないといふ事實と相俟つて、「うたゝねの記」の僞撰である事を主張してゐる。然し、本書の

富士の山を見れば煙も立たず。むかし父の朝臣にさそはれて、「いかになるみの浦なれば」など詠みしころ、遠江の國までは見しかば、「富士の煙の末も、朝夕たしかに見えしものを、いつの年よりか絶えし」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

といふ記事が、「うたゝねの記」の

不二の山はたゞこゝもとにぞ見ゆる。雪いと白くて心細し。風になびく烟の末も、夢の前に哀なれど、うへなきものはと思ひけつ心のたけぞ物おそろしかりける。

と符節を合はしてゐるし、「いかに鳴海の浦なれば」の歌もちやんと載つてゐる。而もその筆法が、「うたねの記」一卷の他の部分としつくり調和してゐて、殊更に後人が攙入したものとは見られぬ。十六夜日記に「父の朝臣」とあり、續古今に「父平度繁朝臣」とあるのが、「うたゝねの記」に後の父のやうにあるのが一つの矛盾であるが、後の父も父には相違ないし、文の趣も概して「うたゝねの記」の方が委曲を盡してゐるから、それも敢て不思議はないと思ふ。扶木抄に十六夜日記の歌はあるが「うたゝねの記」の歌が無いといふのは寧ろ當然の事である。なぜなれば、十六夜日記は前にもいうた通り歌が主材であるに反し、「うたゝねの記」には歌が僅かに十九首あるだけで、どこ迄も物語本位である。又その製作の年代も大分違つてゐる。かたがた私は「うたゝねの記」の僞撰といふ說には贊成しにくい。

「夜の鶴」は一名を「阿佛口傳」ともいつて、歌學に關する書である。これについても十六夜日記との文體の相違から、僞作說を主張する人があるが、私は姑く佐々木博士などの說く所に從つて、阿佛尼が爲家の說を祖述したものと認めて置く。

「乳母の文」は「庭の訓」ともいつて、紀內侍に與へた敎訓の消息書である。その中には歌道をはじめ、女子として心得べき事などいろ〳〵書かれてゐる。

七　異本と註書

「幾月抄」に揭げた所の本書の異本は次の通りである。

一岡本　岡山少將（光政朝臣）自筆本
一金本　金吾中納言（秀秋卿）自筆本
一伊本　西院伊村所藏の古寫本
一扶本　扶桑拾葉集卷十二に載せられた本
一群本　群書類從卷三百三十二に收載された本
一原本　萬治二己亥歲季夏中旬、洛陽今出川和泉板行といふ奥書のある流布本
一古本　松の舍所藏の古寫本

この中、扶桑拾葉本、群書類從本、原本には「いさよひの日記」と題し、伊村藏本には「阿佛道行」とあり、他には題名はない。異本の何れもが轉寫の際に生じた文字の相違といふ程度で、他書に見る如き甚しい違ひはない。

註釋書としては「十六夜日記殘月抄」といふのがある。國學者高田與清の起稿した未定稿を、門人北條時鄰の續成したものである。非常に精細なもので、後註も概ね皆この書を基礎としてゐる。而もその主力は地名その他の技葉的な考證に費されてゐて、文義解釋上には餘り多くの力が費されてゐない。明治以後の註釋書も十種から出てゐるやうであるが、直接私の參考したものは、吉川氏の「十六夜日記精解」、佐野氏の「十六夜日記新釋」、德木氏の「十六夜日記新解」、小松氏の「參考十六夜日記新釋」である。

通解十六夜日記

塚本哲三著

むかし、壁のなかよりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすがへすも、書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。

通解　昔、壁の中から掘り出したといふ書物の名――孝經の孝といふ事をば、今時の子は、夢ほども、自分の身に關する事とは思つて居らぬのだな。繰返し繰返し丁寧に書き殘して置かれた文面はたしかなものだが、さて一向にその甲斐のないものは親の戒めである。

文旨　筆者の亡夫爲家は、俊成の孫、定家の子で、當時歌道の大御所として和歌所の采邑たる播磨細川の莊と近江の小野の莊とを領してゐた。爲家は康元元年五十九歲で出家した。この時、家督はすべて長子爲氏に讓り渡したやうである。所がその後七年たつて、弘長三年六十六歲の時に、この書の筆者たる阿佛尼即ち爲家の後妻の腹から爲相が生れた。蓋し爲家は若い後妻の愛に迷ひ、晚年に出來た幼兒の愛に溺れた結果でもあらう、文永十年七月と同十一年六月との兩度に遺言狀二通を作つて、一旦爲氏に與へた細川の莊を取り戻して、爲相の方に與

へる事とした。さうして爲家は、その翌建治元年五月に、七十八歳を以て歿した。所が爲氏はその遺言に從はず、頑として細川の莊を爲相に渡さなかつた。筆者はこの事實をいたく憤慨して本文のやうな事から筆を起したのである。「孝」といふ代りに「むかし、壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名」といつたり、「かへすがへす」の序として「みづぐきの岡の葛葉」といつたり、隨分廻りくどい文句である。これは一つには、なるべく婉曲に書いて、繼母根性を露骨に現すまいとの作者の用意もあつたらうが、言葉の技巧を專らとした當時の和歌に深い親しみを持つた作者が、さうした事實に對する悲歎の感懷を漏す文句としては、斯う行くのが極めて自然であつたとも見られよう。

語義　○壁のなかよりもとめ出でたりけむ書　壁の中から求め出したといふ書物。孝經の事をいふ。古文孝經、孔安國の序に、「魯恭王使二人壞二夫子講堂一、於二壁中石函一、得二古文孝經二十二章一」とある。孝經は、孔子と曾子との孝に關する問答を曾子の門人が編述したものと考へられてゐる。孔子の講堂の壁から出たといふ孝經は、蝌斗（くわと）といふ古文で書かれてあつた所から特に古文孝經といふたのであつて、之に對して別に「今文孝經」といふものもある。それは秦の始皇帝が焚書の暴政を行つた時、河間の顏芝といふ人が、深く祕めて置いたのを、漢代のはじめに挾書の律が解かれた時、その子の顏貞が世に公にしたといふ事である。これは漢の隸書で書いてあつたから、古文に對して今文といふ。孝經としてはその今文の方がほんもので、古文の方は僞書だといふ說がかなり有力のやうであるが、こゝに謂ふ所は勿論古文孝經の事である。「孝經といふ書の中に說いてゐる孝行のことなば」と解した書もあるが、原文に明かに「書の名」とある以上、こゝの文句は「孝」といふ語の代りに用ひられたものと見るべきである。「もとめ出で」は他動詞、「けむ」は過去の推量。○今の世の人の子　當世の子供。「人の子」は單に「子」といふに同じい。こゝは文旨に述べた事情によつて、暗に爲氏を指してゐる事明かである。○夢ばかり　夢ほども、少しも、一寸も。今日の口語で「夢にも」といふのとは語の組成上に――從つて內容の感じに少しの相違がある。○身の上の事　自分の身に關係した事。○知らざりけりな　思つて居らぬ事だよ。こゝの「知る」はknowよりも寧ろmindの方に近いと思ふ。○水莖の　岡の枕詞。宣長の說によれば、「水莖」は草木のみづみづしい莖といふ意で「若」に掛け、「わ」と「な」とを通はして「岡」の枕詞にしたのだといふ。なほ「水莖」は轉じて「筆」の事にもいふので、「みづぐきの」は「岡」の枕詞であると同時に、「書きおく」の緣語ともなつてゐるのである。○岡の葛葉　岡に生えてゐる葛の葉の意で、「かへすがへす」の序詞である。葛の葉は秋風によく裏返つて、葉の裏が白く目立つて見えるものであるから、古來「恨みる」（裏見る）、「かへる」「かへす」等の語に掛けて用ひられる。○かへすがへすも　繰返し繰返しいとも丁寧に。こゝの「も」は感興の助詞。○書きおく跡　書き殘しておいた文面。「おく」はこゝは「おき給ひし」の心持で解すべきである。「跡」は筆の跡の義。爲家卿の細川の莊を爲相に讓るといふ遺言狀を指す。○かひなきもの　効の無いものは、役に立たぬものは。○親のいさめ　親のいましめ。「いさめ」は今では專ら、諫言、忠言の義にいふが、古くは上より下に對する禁戒、禁制の意にも用ひられたのである。

また賢王（けんわう）の人をすて給はぬ政（まつりごと）にももれ、忠臣（ちゆうしん）の世をおもふ情（なさけ）にもすてらるゝものは、數（かず）ならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲（かな）しけれ。

通解　又、賢明なる聖天子の、普く萬民をいつくしみ給ふ御仁政にも漏れ、忠義の心厚き輔弼の臣の、世の爲めを思ふ慈愛の心にも捨てられて、その助けを蒙らぬものは、人の數にも入らぬ樣な、つまらぬこの身一つであると、よく承知しては居ながらも、またそのまゝに諦めきつてもゐられないで、やはりこの心のうれへこそ、何

と慰めやうもなく、誠に悲しい事である。

文旨　蓋し筆者は、爲氏の不法な横領の一伍一什を朝廷に訴へ出た所が、一向お取上げにならぬ、それを恨んでこんな事を書いてゐるのである。不平を露骨にいはぬ所に女らしいつゝましさがあるとも見られるが、又見やうによつては、かなり愚痴ッぽい、しれくれした物の言ひぶりのやうにも取れる。要するに不平と悲愁との婉曲な技巧的表現と見ればそれでいゝ。

語義　○賢王　賢明な天子。○人をすて給はぬ政　何人をも捨てず、普く情を掛け給ふ仁政。○もれ　その仁政を蒙る人の數に入り得ぬといふ意。○忠臣　こゝは特に輔弼の任にある大臣をいふ。○世をおもふ情　世の中の爲めを思ふ慈愛の心。○すてらるゝ　見捨てられる、その慈愛にあづかる事が出來ぬ。○數ならぬ　人の數にも入らぬ、つまらぬ、誠に賤しい。○身ひとつなりけり　我が身一つである、自分だけである。この句の解として、わざ〳〵「世の中にかうした例が多いなら、大いに政道に就いて不平を述べればならぬが、それが自分一人だけだとしると、止むを得ない事である」と註記した本もあるが、そんな氣持でいうた言葉とは考へられぬ。「どうせ私共なんざ、數にも入らぬつまらぬ身の上、お上のおなさけにもあづかれるものぢや御座んせん」といふ愚痴ッぽい諦め――諦められぬ諦めから出た自然の文句と見なくては文としての趣がなからうではないか。こゝの「けり」は咏歎の助動詞。○思ひ知りながら　承知しながら、よく心得てはゐながら。○さてしもあらで　さうしてそのまゝにしてはゐられないで。分つてはゐながら、そのまゝ諦めきつてもゐられないでの意。「さて」はさうしての意。「しも」は強勢の助詞。「あらで」は「え在らで」の心持に見てよい。○なほ　やはり。○このうれへ　細川莊を横領された悲愁なほふ。「うれへ」には憂愁と愁訴との兩意があるが、さればといつて、或人のやうに、

「憂愁の意と、愁訴の意とを兼ねて、この爲氏が横領の一件は何處へ訴へようか、やるべき方のないのが悲しいといふ意も含めてある」と見るのは、こゝの場合としては、立入り過ぎて寧ろ語義を蹂躙した事になる。○やるかたなく　心を慰める方もなく、心の愁への晴しやうもなく、遣る瀬なく。

更に思ひつゞくれば、やまとうたの道は、たゞまことと少く、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世ををさめ、物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは記し置かれたりける。

通解　更に思ひめぐらして見ると、和歌の道は、只もう眞情が乏しく、浮薄な慰みごとに過ぎないと思ふ人もあるかもしれない。然し決してそんなものではない。我が日本の國に於て、太古天照大神の閉ぢこもり給うた天の岩戸の開いた時、四方の神々の歌はれた神樂の詞をはじめとして、世を治め人心を柔和にする媒介となつたのだと、歌道の聖者たちは書き記して置かれたのである。

文旨　和歌の大切な所以を高調したのである。筆者の亡夫は歌界の大御所で、その遺言狀に載せられた細川の莊は和歌所の采邑であるから、歌道そのものを尊重すれば、當然の歸結としてその遺言狀が尊重されねばならぬ。然るに爲氏の不法に對する訴へが朝廷に取上げられぬのは、抑も歌そのものに對する考へ方が間違つてゐるからだといふ筆者の考へから、筆がこんな風に進展して來たものと思ふ。

語義　○更に　その上に。○思ひつゞくれば　思ひ廻らして見れば、それからそれにと考へつゞけて見れば。

○やまとうたの道　和歌の道。○まこと少く　眞情が少い。言葉の美しさだけで內容の誠意が乏しいといふ意。○あだなる　浮薄な、實のない。○すさびばかり　慰みに過ぎない。こゝの「ばかり」は「のみ」の意。○天の岩戸ひらけし時　天照大神が御弟素盞嗚尊の無禮を怒つて天の岩戸にお籠りになつて、天下が常闇になつた時、八百萬の神が相圖つて大神を誘ひ出し奉つた、その時の事をいふ。○よもの神たち　四方から集つて來た神々、八百萬の神々。○神樂のことば　神前で奏する舞樂の文句。「神樂」は琴笛などの樂器にあはせて神前で奏する歌舞。この天の岩戸の開けた時の神樂の詞といふのは、古語拾遺に「阿波禮、阿那於茂志呂、阿那多能志、阿那佐夜懇、飫憩」とあるのを指したものだらう。○はじめて　はじめとして、第一として。「それが始まりだ」といふ意味ではない。「この日記の作者は、我が國の歌の始めを、この神樂歌にあるといふのであるが」など書いて歌の始源論を長々と書いた註釋書もあるが、筆者はそんな氣持で「はじめて」といつたのではあるまい。「さういふ重大な意味の歌詞を始めとして」の意味で書いたものと考へられる。○物をやはらぐる　人の心をやはらげやさしくする。「物」は「人心」の意。古今集の序に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和げ、猛き武夫の心をも慰むるは歌なり」とある。「とぞ」の掛るコーテーションは、「世ををさめ、物をやはらぐるなかだちとなりにける」だけである。○この道のひじり　和歌の道の聖者、歌聖。「ひじり」は聖人の義から轉じて、天子、高僧、法師等色々の義に用ひられる語で、こゝはその道に特にすぐれた人の義。

さてもまた集をえらぶ人は、ためしおほかれど、二たび勅をうけて、世々に聞えあげたるは、類なほありがたくやありけむ。その跡にしもたづさはりて、三人の男子ども、百千のうたの古反故どもを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、深き契をむすびおかれし細川のながれも、故なくせきとめられしかば、あととふ法の燈火も、道をまもり、家をたすけむ親子の命も、もろともに消をあらそふ年月を經て、あやふく心細きものから、何としてつれなく、今日まではながらふらむ。

通解　さてまた、勅撰歌集を撰ぶ人は、その先例が多くあるが、一生の內に二度まで勅命を受けて、その御代御代の帝に奏上したといふのは、やはり其の類があり得難い事であつたらう。私はさうした立派な家柄の跡を受けついで、三人の男の子と、澤山の歌の草稿とを、どうした因緣であつたらうか、預つて持つてゐるのであるが、亡夫が、「和歌の道に力を添へよ、子供を養育せよ、吾が亡き後のとひとむらひをせよ」といつて、堅い約束を結んで殘して置かれた細川の莊も、何の理由もなく橫領せられたので、自然收入の道も絕えて、亡夫の菩提を弔ふお燈明も、和歌の道を守り、家を立てて行く親子の命も、共々に消えを爭つて、どちらが先になくなる事かといふやうな、なさけない年月を送つて、誠に危く心細い有樣でありながら、どうしてまアさうした事にもならず、どうやら斯うやら持ちこたへて、今日までは斯うしてながらへてゐる事だらう、自分ながら誠に不思議に思はれる。

文旨　いよ〳〵細川の莊を橫領されたといふ事實を持出して、而も「深き契をむすびおかれし細川のながれも、故なくせきとめられしかば」といふやうな言葉の綾で表現してゐる。その細川の莊についても、それが單なる財產でなくて、歌道を守る爲め、子女を養育する爲め、亡夫の菩提を弔ふ爲めの資源として、堅い約束の爲めに亡夫から讓られたものだと主張してゐるのである。筆者が歌道大御所の後繼者を以て任じてゐた氣魄が窺はれると同時に、後家さんらしい愚痴ッぽさが、自然に文句の末ににじみ出てゐる。

語義　○さても　筆端を改めて次を起す調子の接續詞。○集　和歌集。こゝは勅撰和歌集をいふ。○えらぶ人　撰者。○ためしおほかれど　例が多くあるが。貫之等の撰した古今集から、爲家の撰にかゝる續古今集までに、十二の勅撰集が出て、その撰者が二十人もある、その事をいふ。○二たび勅をうけて云々　一生の内に二度までも勅命を蒙つて、その代々の帝に撰集を奏上したのは。「世々」は御代々々の意、「聞えあぐ」は歌集を撰して奏上したのをいふ。藤原定家は後鳥羽院の勅命による新古今集の撰者の一人であり、後に又單獨で新勅撰集を撰んで後堀河院に奏上した。その子の爲家即ち筆者の夫は、單獨で續後撰集を撰して後嵯峨院に奏上し、他の人々と共に續古今集を撰して同じく後嵯峨院に奏上した。さういふやうな事實を指していうたのである。○類　類例。○なほ　やはり。○ありがたくやありけむ　珍しい事であつたらう、滅多に有り得ない事だつたらう。「ありがたし」は有る事が難いといふ意、「けむ」は過去の推量。○その跡　さういふ家の跡。○たづさはりて　關係して。こゝはその跡を承け繼ぐやうな身となつての意。○三人の男子ども　爲顯、爲相、爲守といふ三人か。但、十六夜日記殘月抄に、「與清按に、みたりはふたりの寫誤にや。四條が腹の子五人あり、長女は紀ノ内侍にて父異なり。慶融、源承は僧なり。さればこゝは侍從の爲相と、大夫の爲守との二人なるべし。十四卷系圖の爲家卿の子に爲顯爲相爲守三人ならびたれど、爲顯は此の記にさたなき人なれば、四條が腹とも定め難し。下文に五つの子供の歌ども見えたれば、四條が子は五人なるべくぞ思はるゝ」とあつてこれが一般に信じられてゐる。四條は阿佛尼の事である。○百千のうたの古反故　歌に關する澤山の古い反故。「反故」はこゝは草稿の義で、爲家の遺して置いた多くの歌の草稿や歌傳の書をいふ。「百千の」は澤山のの意で、「歌の古反故」といふ語の全體、更に細かくいへば、「古反故」の方に掛つてゐる形容詞。○いかなるえにかありけむ　どういふ緣があつたものだらうか。「えに」は「緣」の音轉。この句は全體として「あづかりもたる」に掛る副詞を成してゐる。完全終止の「。」にしてはいけない。○あづかりもたることあれど　預つて持つてゐるのであるが。「もたる」は「もちたる」の略。○道をたすけよ　和歌の道に力を添へて隆盛にせよ。○子をはぐくめ　子供を養育せよ。○後の世をとへ　後世を弔へ。吾が死後の冥福を祈れといふ意。○深き契　固い約束。「細川」の川の緣語として特に「深き」というたのである。○細川のながれ　播磨國細川の莊。「川」の緣で「ながれ」というたのである。○故なく　理由なく、不法に。○せきとめられしかば　横領されたから。川の緣で「堰き止められ」というたのである。○あとをふ法の燈火　後世を弔ふために捧げる佛前のお燈明。○道をまもり　歌道を守護し。歌道の衰へぬやうによくその道を守り立てて行くといふ意。○家をたすけむ　家を立てて行く。「たすくる」の婉曲敍法。○もろともに　共々に。燈火も母子の命も兩方共に。○消をあらそふ　消えるのを競爭する。「法の燈火」がさきに消えるか、「親子の命」がさきに消えるかと、消える事を相競つてゐるやうな、困難な狀態のといふ意。○年月を經て　年月を過して。「もろともに消をあらそふ年月」とつゞけて、今にも家がつぶれて亡夫のとゞ弔ひも出來なくなるか、親子の者が饑ゑて死ぬかといふやうな悲慘な狀態の内に幾年月を過してといふ意を表はしてゐる。○あやふく心細きものから　危く心細くはありながら。「ものから」は反戻の意の慣用語。○何として　どうしてまアといふ調子の語。○つれなく　別段どうともならずにの意。卽ち情こわくといふ原義通りの用例で、下文の「風につれなき所々、朽葉に染めかへてけり」とあるのと原義に於て一致する。こゝは、さうしたあやふさ心細さにもめげずに命を持ちこたへてといふのである。變りなく、依然として、平氣でといふ解は解自體としては間違ではないが、こゝの文の情調にはしつくりしない。作者は「何としてつれなく」といふ文句に、かなり感傷的な氣分を盛り込んでゐるやうに思ふ。○ながらふらむ　生きながらへてゐる事だらう。

惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひ捨つれども、子をおもふ心の闇は、なほしのびがたく、道をかへりみる恨は、やらむかたなく、さてもなほ、あづまのかめの鑑にうつさば、くもらぬ影もやあらはるゝ

と、せめて思ひあまりて、よろづのはゞかりを忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりなくも、いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

通解　惜しくもない我が身一つは、どうならうとも、たやすく思ひきつて了ふのだが、子の事を思ふ心の迷はやはり堪へしのび難く、又歌道の事を考へる心の恨は、何とも晴しやうがなくて、それでもなほ、鎌倉幕府の正しい政道の鏡に掛けたら、自分のくもりの無い心も顯はれ、正しい主張が通らうもしれぬと、切に思ひ餘って、種々樣々の障害を顧みず、身を無用のものに爲しきつて了つて、思ひ掛けずも、急に十六夜の月に誘はれて都を立たうといふ氣になつたのであつた。

文旨　いよ〳〵關東鎌倉に訴へに行かうといふ段取である。どうせ自分の身一つはどうならうと何の未練も無いのだが、子の將來を思へば心配でたまらず、歌道の衰頽せん事を思へばくやしさにたへぬ、よし京の朝廷にはお取上げにならぬにしても、鎌倉幕府の正しい裁斷に訴へたら、理非曲直が明かにならぬ事もあるまいと、斯う思ひ立つては矢も楯もたまらず、急に東に向つて旅立つ氣になつた、それは十六夜の月が曉の空に殘つてゐる時の事だ、といふ文意である。

語義　○惜しからぬ身ひとつ　どうならうとも一向に惜しくない自分の身一つ。○やすく　たやすく、何の未練もなく。○思ひ捨つれども　どうなつても構はぬと思ひきつて了ふのだが。○子をおもふ心の闇　子を思ふ一念で物の道理も分らなくなるのをいふ。このまゝにして置いたら、我が子の將來はどうなるかと思へば、とてもむつとしてゐられぬといふ文意。後撰集、藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな」とある、それを背景とした文句。○なほ　それでもやはり。自分の身一つは思ひ捨ててゐるものの、それでもやはりといふのである。○道をかへりみる恨　歌道の事を思ふ心の恨。こんな事では折角亡夫から託された歌道を守つて盛にして行く事は出來ない、それを思ふとくやしくて堪らぬといふのである。○やらむかたなく慰めやうが無く。○さてもなほ　それでもやはり。上文に「賢王の人をすてたまはぬまつりごとにも漏れ」云々とある。暗にそれに呼應して、それでもやはりといつたのである。○あづまのかめの鑑　「亀鑑」といふ漢語の直譯で、正しい裁判に掛けたならば。「あづま」は關東即ち鎌倉幕府をいふ。「かめの鑑」は「亀鑑」　鎌倉幕府の正しい政道の鏡といふ意に轉用したのである。祖庭事苑に、「亀所ニ以決ニ猶豫ニ鑑所ニ以辨ニ妍蚩ニ」とある通り、「亀」は亀卜といつて、亀甲を燒いてその裂目によつて吉凶禍福を占ふといふのが原義だから、「亀鑑」は正しくは「亀と鑑」であつて、「亀の鑑」ではないが、こゝは「亀の」と直譯して、それを「正しい」の義に轉用してゐるやうに取れる文調である。○くもらぬ影　自分の理に叶つた、少しも邪曲のない、正しい主張、といふのを、鏡の緣語で斯う書いたのである。○もや　「かもしれぬ」といふやうに輕い疑問を含んだ推量の慣用語。○せめて思ひあまりて　一途に思ひ餘つて。「せめて」は强ひて、只一筋にの意。「思ひあまり」はこゝは思案に餘るといふよりも、思ひつめて、思ひ込んだ舉句といふ意のやうに取れる。○よろづのはゞかりを忘れ　樣々な障害を念頭に止めず。老いたる女の身として遙々鎌倉へ旅立つとなれば、何やかや面倒な障害が起る、さうした一切の障害を心に止めずといふのである。○身をえうなきものになし果て　自分の身を無用のものにしきつて了つて。「えうなき」は「益なき」の音轉。自分の身なんかどうなつたつてかまはぬ、どうせ役にも立たぬ身の上だといふやうに心を定めてといふ意。前に「惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひ捨つれども」とあるその「思ひ捨つる」と同じやうにも取れるが大分違ふ。前のは、領地を横領されたために自分の身が行き立たなくなつた所でそれも仕方がない、どうせ老殘の身だとたやすく思ひきるがといふ思想、

こゝのは、遠く知らぬ他郷に訴へに行くのだから中途でどんな目に遭はうやら、事の結果がどんな事にならうやら、それも分らぬが、どうせ老殘の身、何の役にも立たぬ老の身を、子の爲め道の爲めに捨てるのだ、何の惜しい事があらうと、斯う思ひ定めたといふのである。「身をえうなきものに」の一句は、下文に「住むべき國もとむるにもあらず」を引いてゐる以上、蓋し伊勢物語のその條の文句「昔男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、都には居らじ、住むべき所もとめむとてゆきけり。」を背景にして書いてゐるものと考へられる。○ゆくりなくも　ふと、突然、思ひ掛けずも。「思ひなりぬる」に掛る副詞で、今迄そんな氣もなかつたが、こんな風に考へて來ると矢も楯もたまらなくなつて、兼れて意圖もしなかつた斯うした旅を突然思ひ立つ事になつたといふ思想である。○いざよふ月　舊暦十六夜の月。「いざよふ」はためらふといふ義、十六夜の月はしばらく山の端にためらつてゐる風ですら〳〵と上つて來ないので「いざよふ月」とも「いざよひの月」ともいふ。古正は「いさよふ」で清音であるが、後世概れ「さ」を「ざ」と濁つてゐる。十六夜日記といふ書名も、この言葉から出たのだらう。○さそはれ出でなむ　誘はれて都を出る。筆者が出立の曉は十六夜の月が空に見えてゐる時であつたので、こんな風に書いたのである。思ふにこの筆錄は都を立つた後に書かれたもので、事實の記事をわざと豫測的の文調で書いた文飾だと思ふ。○思ひなりぬる　さういふ氣になつた。

さりとて、文屋康秀がさそふにもあらず、住むべき國もとむるにもあらず。頃はみ冬立つはじめの、さだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともに亂れ散りつゝ、事にふれて心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても止るべきにもあらで、何となくいそぎ立ちぬ。

通解　さればといつて、文屋康秀が小野小町を誘つたやうに、人から誘はれたといふわけでもなく、又在原業平のやうに、住むべき國を探し求めるといふでもない。時は冬になるはじめの、陰晴定めない空なので、降つたり止んだりして時雨も絶間がなく、それに又、嵐の中に競ひ散る木の葉までが、涙と共に亂れ散つて、何かにつけて心細く悲しいけれど、もと〳〵他人から無理やりに行かされるといふのでなくて、我が心から思ひ立つた旅の事なので、行くのがつらいと言つて、今更止まるべき筋でもなくて、何とはなしに急いで出立した。

文旨　いよ〳〵出發。「頃はみ冬立つはじめの」から以下は、如何にも旅立ちの老女らしい心細さが――それが傳統的な言葉の技巧で、創作としての新鮮味は乏しいにしても――かなりよく寫されてゐるが、「文屋康秀」や「住むべき國」に至つては、全く引喩尊重の常套手段に捉はれ過ぎた作文技巧といふの外あるまい。

語義　○さりとて　さればといつて。○文屋康秀がさそふにもあらず　人に誘はれたといふわけでもないといふ意。康秀が三河に下る時、小野小町を誘つたといふ故事をそのまゝ取つて書いたのである。古今集、雜下に、「文屋康秀が三河の掾になりて、あがた見にはえいで立たじやといひやれりける返事によめる」といふ詞書で、小野小町の「わびぬれば身をうき草の根をたえて、誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」といふ歌が出てゐる。文屋を坊間の註書に「ぶんや」と讀んでゐるが「ふみや」の音便で「ふんや」である。○住むべき國もとむるにもあらず　伊勢物語（新釋本による）に、「昔男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、都にはたらじ、住むべき所求めむとて行きけり。」とある。その文句によつて、自分は住むべき國を探しに行くのではないといつたのである。○み冬立つ　冬になる。こゝの「み」は單なる接頭語で、三の意――三冬（冬の三ケ月）の意の「み」ではない。○さだめなき空　陰晴定まりなき空合。「空」は空模樣、天候といふ意。○降りみ降らずみ　雨が降つた

り止んだり。副詞の句であるから、「降つたり止んだりする時雨」と形容詞風に通解すると、原句の氣分が傷けられるやうである。後撰集卷八、冬歌に、「神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける」とある。○時雨　秋の終りから冬の始めへ掛けてバラ〳〵と降つたり止んだりする雨。○嵐にきほふ木の葉さへ　嵐に吹かれて先を爭つて散る木の葉までも。「嵐に」の「に」は「の中に」の意。「きほふ」は互に相競ふ――こゝは散るのを相競ふ意である。「さへ」は、「時雨もたえず」に對して、「その上に木葉までも」といつたのである。○涙とともに亂れ散りつゝ　涙が亂れ散ると共に木の葉も盛に亂れ散つて。實際の氣分からいへば、木の葉の散るのを見ても涙がこぼれるといふのだらうが、只さへ涙が流れるのに木の葉まで一緒になつて亂れ散つてといふ氣持で斯う書いたのである。○事にふれて　何かにつけて、接する事毎に。○人やりならぬ道　人からやらされるのでない道、人が強ひて行かせるのでなくて自ら求めて行く旅の道。「人を代りにやれない道」などと誤解してはならぬ。古今集離別の歌に、「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ」とある、その歌を轉用したのである。○いきうし　行くのがつらい。「いき」は「ゆき」の音轉。○止る　そのまゝ行かずにゐる。○何となく　何とはなしに。悲しみの内に、何といふ事もなくつひ急いで旅に立つて了ふ、その間の氣分が如何にもよく出た言葉である。「確とした考もなしに」とか「悲しさのために、用意もそこ〳〵に、何といふ考もなく」とか解した書もあるが、さう立入つて限定的に考へては語としての情調が無くなつて了ふ。

めかれせざりつる程だに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと見まはされて、慕はしげなる人々の袖のしづくも、慰めかねたる中にも、侍從、大夫などの、あながちに打屈したる樣、いと心ぐるしければ、さま〴〵言ひこしらへ、閨のうちを見れば、むかしの枕さへ、さながら變らぬを見るにも、今更かなしくて、かたはらに書きつく。

とゞめ置くふるき枕のちりをだに、
我が立ち去らば、誰かはらはむ。

通解　朝夕目を離さずに見てゐた間でさへ、日ましに荒れて行つた庭も垣根も、自分が旅立つた後では、ましてどんなに荒れ果てる事だらうと、自然そこらあたりが見廻はされる、そして又、如何にも墓はしげに名殘を惜んで呉れる人々の袖の涙も慰め兼れた事であつたが、中にも侍從爲相、大夫爲守などの、只もう一途に悄氣返つてゐる樣子が、誠に不便なので、色々となだめすかし、さて又寢處のなかを見れば、昔亡夫の用ひられた枕までが、そのまゝ變らず殘つてゐるのを見るにつけても、今又更に悲しくて、傍に次のやうな歌を書きつけた。

とゞめ置くふるき枕のちりをだに、
我が立ち去らば、誰かはらはむ。

（殘して置いて行く、この思ひ出深い、故人の枕の塵をさへも、斯うして私が立ち去つたら、あとで誰が拂つて呉れよう。さこそこのなつかしい枕も塵にうもれて了はう。さて〳〵心殘りの事ではある。）

文旨　荒れ行く庭に名殘をなしみ、幼い子供等に名殘をなしみ、更に亡夫の枕に名殘をなしむ。三つの事が一つゞきに書かれてゐるのも、斯うした心情の自然のあらはれとして却て情趣深い思ひがする。

語義　○めかれせざりつる程だに　目を離さずにゐた間でさへ、朝夕いつも見てゐた間でさへ。「めかる」は目離るの義、それを名詞にしてサ變に活かしたのである。古今集上、紀貫之の歌「暮るとあくと目かれぬものを梅

の花いつの人まにうつろひぬらむ」や、同じく古今集、源宗于の歌、「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」の如きは動詞としての用例である。○荒れまさりつる　日増しに荒れて行つた。○まがきかきれ。○まして　下に「如何にあれまさるらむ」と補ひ解する。○見まはされて　自然そこらが見廻されて。この「されて」は受身でなくて自然の働きをあらはす。　この「て」は「そして又」といふやうに、一轉化する趣である。○墓はしげなる人々　墓はしさうにしてゐる人々。自分の旅立ちについて、如何にも墓はしさうに名殘を惜んでゐてくれる人々といふ意。○袖のしづく　涙でそでを濡したそのしづく。別を惜んで泣くのをいふ。○慰めかねたる　何といつて慰めてよいか、慰めようもないといふ意。○中にも　その中でも特に。○侍從　爲相をいふ。「侍從」は中務省の屬官で、天皇の御側に侍して御用をつとめ、規諫のことを司る役。○大夫　爲守をいふ。「大夫」は五位の人をいふ語で、爲守は當時蓋し十三歳で從五位であつた。○あながちに　只もう一途に。「甚しく、強く」などいふより今少し強い感じの言葉である。○打屈したる樣　しよげ込んでゐる樣子。「屈托する、意氣銷沈する、ふさぎこむ」などの解は、間違ではないが大分感じが違ふ、それより今一歩強い感じの言葉である。○心ぐるし　氣の毒に思ふ、不便に思ふ。「心につらく思ふ、氣づかはしい」と解した本もあるが、その方の意味に取つては、次の「さまゝくいひこしらへ」がしつくりしない。○いひこしらへ　いひ慰めて、なだめすかして。この句の下も一寸切れて、端を改めて次に續く趣である。○閨　寢處、寢間。○むかしの枕さへ　亡夫爲家の在世の當時使つた枕までが。「さへ」は原義通り、「それまでも」といふ氣持に用ひられてゐる。○さながらそつくりそのまゝ、昔のまゝに。○今更　今又事新しく。○かたはらに　座の傍の襖などに書いたといふのだらう。枕の傍側といふのではない。○とゞめ置く　あとに殘して置いて行く。「亡夫の枕が昔のまゝに變らず殘つてゐる。今迄は塵もつけぬやうに大切にして置いたが、それもあとに殘して私の立ち去つたあとでは、塵の拂ひ手もなくなるであらう。名殘をしい事だ。」といふ思想だらう。「とゞめ置く」と「我が立ち去らば」とが妙にかち合ふやうで一首としての諧調が不自然だといふ考へ方から、「とゞめ置く」は「亡夫が止め置きし」といふ心持ではないかとも思つたが、それにしては言葉が足りない。結局「とゞめ置きて我が立ち去らば」といふ副詞の思想を形容詞に轉形して使つたものと見る外なささうである。卽ちこゝの「とゞめ置く」は止むを得ずあとに殘し止め置くの意である。

代々に書きおかれける歌のさうしどもの奥書して、あだならぬかぎりをえりしたゝめて、侍從の方へ送るとて、書きそへたる歌、

和歌の浦にかき留めたる藻鹽草、
　これをむかしのかたみとも見よ。
あなかしこ、横浪かくな、濱千鳥、
　ひとかたならぬあとをおもはば。

これを見て、侍從の返事いと疾くあり。

つひによもあだにはならじ、藻鹽草、
　かたみを三代の跡にのこせば。
まよはまし、教へざりせば、濱千鳥、
　ひとかたならぬ跡をそれとも。

この返事いとおとなしければ、心安く、あはれなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、又うちしほたれぬ。

通解　俊成卿から定家卿、爲家卿と、代々に書いて置かれた數々の歌の稿本の奥書をして、むだでないものだけを全部選擇整理して、侍從爲相の所へ送つてやるとて、それに書き添へた歌、

和歌の浦にかき留めたる藻鹽草、
　これをむかしのかたみとも見よ。

（和歌に關して書き殘されたこの稿本、これを父祖の記念とも思つて、よく大切にしなさい。）

あなかしこ、横涙かくな、濱千鳥、
　ひとかたならぬあとをおもはば。

（我が家が、父祖以來、並一通りならぬ、立派な名跡である事を思うたならば、どうぞ我が子よ、どこ迄もおそれ憤んで、決してよこしまな歌風を學ぶやうな事があつてはなりませんぞ。）

これを見て、侍從爲相からの返事が早速あつた。

つひによもあだにはならじ、藻鹽草、
　かたみを三代の跡にのこせば。

（父祖のかたみを見よとて、斯うして三代の跡なるこの私に、そのありがたい三代の記念品たる歌稿をお殘し下された以上、この稿が遂にむだなものとなつて了ふやうな事はよもありますまい――私成人の後は、必ずこの稿をむだに致さぬ覺悟で御座ります。）

まよはまし、教へざりせば、濱千鳥、
　ひとかたならぬ跡をそれとも。

（母上の御教訓がなかつたら、私は父祖以來並一通りならぬ立派な名跡とも知らずに、邪道に迷ひ込みも致した事でせうに、御親切なお教へを受けて、ほんとに嬉しう御座います。決して迷はずにしつかりやつてまゐります。）

この返事が誠に大人びて居るので、氣やすく思ひ、しみ〴〵感に堪へぬ思ひがするにつけても、これを亡き夫にお聞かせ申したくて、又涙にくれて了つた。

文旨　父祖傳來の歌稿に添へた作者の二つの歌、それに對する侍從爲相の返歌、何れも言葉の綾ばかりで、歌としては情趣に乏しいものだが、歌道に對する意氣込は十分に窺はれる。子供の返歌が大人びてゐるにつけ、それを亡夫に聞かせたくて又涙にくれる、それは如何にも尤もの事で、短かい、飾氣ない文句の中に、却て眞情がにじみ出てゐると思ふ。

語義　○代々に　俊成、定家、爲家の父子三代をいふ。○歌のさうし　歌の稿本。「さうし」は「册子」の義で、綴ぢた書きもの、即ち帳面の如きものをいふ。○ども　複數をあらはす終尾詞。○奥書　書物の終に、その書の由緒などを書き認めたのをいふ。○あだならぬかぎり　むだでないものだけを全部。「あだ」はむだ、無用、無價値等の意。「かぎり」には、「だけ」の意と「殘らず」の意とあつて、こゝはその兩意に兼れ滲つた趣だと思ふ。○えりしたゝめて　選り出し整理して。○和歌の浦　紀伊國海草郡にある地名、それに「和歌の道」といふ意を寓したのである。○かき留めたる　書き殘した。父祖が書いてあとに殘したの意。藻鹽草の縁で、「書き」に「掻き」を掛けたのである。○藻鹽草　昔の製鹽法として、鹽分を含んだ海藻を取り、更に幾度も潮水をそゝぎ掛けて乾燥し、それを燒いて水に浸し、その上澄を煮つめて鹽にする、その海藻を藻鹽草といふのである。その藻鹽草は

掻き集めるものだから、古來「書き集める」意、「書き集めたもの」の意に慣用されてゐる。こゝは「和歌の浦」の縁として「和歌の草稿」の意にいうたのである。○昔のかたみ　昔の人即ち父祖の記念物。○あなかしこ　あおそれ慎むべしといふ意。○横浪かくな　邪曲の歌風を學ぶなといふ意を、濱千鳥の縁で、横浪をかくなといつたのである。○濱千鳥　我が子爲相を濱邊にゐる千鳥に喩へていうた語。○ひとかたならぬあとをおもはば並一通りならぬ跡である事を思つたら。「あと」といふ語は、立派な名跡、即ち歌道の名門といふ意に、千鳥の足跡の意を掛けて用ひたのである。○疾く　早く。○つひに　しまひには。私が成人の後にはの意を含めて見てよからう。○よも　よもや、恐らく決して。○あだにはならじ　むだなものにはなるまい。必ず努力して父祖の苦心をむだにせぬやうに致しますといふ意を寓した語。○三代の跡　俊成、定家、爲家二代の跡。それは爲相自身である。即ち「三代の跡」といふ語には、「見よとて三代の跡即ちこの私に」といふ意が寓せられてゐるものと解してよからう。「父祖三代の記念品として、この歌の稿本をあとに殘されてあるから」といふ風の解は、内容的には正しからうが、歌詞そのものにはぴッたり合つてゐない。○まよはまし　迷ふであらう。邪曲の道に迷ひ込むであらうの意。「教へざりせば」と相呼應して、假設――若しさうだつたら斯うなるだらうの意を現はしてゐる。○教へざりせば　假に若し教へなかつたとしたら。幸ひ御母上の御教訓があつたからよいやうなものの、若しそれがなかつたらといふ假設の思想。○それとも　この語は、倒置として、上の「教へざりせば」に掛ると同時に、下に「知らずして」の省略を含めて「迷はまし」の上に掛る趣、即ち兩意に渉つた寢雜な技巧のやうに思ふ。○おとなしければ　大人びてゐるから、年の割に大人ッぽくしつかりしてゐるから。○心やすく　安心で。これなら父祖のあとをついで名門を辱める事もあるまいと氣安く思つたといふのである。○あはれなるにも　あはれなるにつけても。こゝの「あはれ」はしみ〴〵感に堪へたといふ趣。「可愛い」といふ意に解した書もあるが、その方ではあるまい。「にも」は「につけても」の意。○昔の人　亡夫爲家を指す。○うちしほたれぬ　涙にくれた。「うち」は輕い接頭語。「しほたる」は涙で袖がぬれしほたれる事にもいひ、又單に泣き悲しむ事にもいふ。要するに悲しい思がこみ上げて涙にくれたといふのである。

大夫のかたはら去らず馴れ來つるを、ふり捨てられなむ名殘、あながちに思ひ知りて、手習したるを見ればば、

はる〴〵と、行くさき遠く慕はれて、
いかにそなたの空をながめむ。

と書きつけたる、ものより殊にあはれにて、おなじ紙に書き添へつ。

つくづくと空をながめそ、こひしくば、
道とほくとも、はやかへり來む。

とぞ慰むる。

通解　大夫爲守が、これまで私のそばを離れずに、馴れ睦んで來たのに、今度斯うして私にふり捨てられるその跡の悲しさを、特に深く思ひつめて、物に書き散したのを見ると、

はる〴〵と、行くさき遠く慕はれて、
いかにそなたの空をながめむ。

（遙々と、母さまのおいでになつたさきのさき迄遠く思ひ慕はれて、どんなにまア、そちらの空を眺めては悲

しい物思に沈む事でせう。）

と書きつけてある、それが何よりも特に可哀さうに思はれて、その同じ紙に次の歌を書き添へた。

つくづくと空ながめそ、こひしくば、
道とほくとも、はやかへり來む。

（私が旅に出たからといつて、そんなに深い物思に沈んで東の空をながめなさるな、お前がそんなにこの母の事を戀しく思ふならば、たとひ道のりはどんなに遠くとも、すぐに歸つて來ようから。）

文旨　今度は爲守の事を書いてゐる。爲相は十五で、朝廷に出仕してゐたやうであるが、爲守は十三で、づゝーッと筆者のそばにゐたのである。それが斯うした離別となつたのだから、その子の心細さは勿論、心細がる子を跡に殘して旅に出る筆者の心情も亦察するに餘りがある。

語義　○かたはら去らず　常に私のそばを離れずに。○馴れ來つるを　馴れ睦んで來たのに。こゝの「を」は反戻の意。○ふり捨てられなむ名殘　今私にふり捨てられようとしてゐる、さうされた跡の悲しさ。「あとにおき去りにされるであらう名殘惜しさ」といふ解が一般に行はれてゐるやうだ。それでも通じようが、こゝの「名殘」は、もつと語としての原義が働いてゐて、「ふり捨てられなむ」その後に殘る心のなげきといふ風に見た方がしつくりすると思ふ。○あながちに　切に、一途に。○思ひ知りて　心に感知して。深く思ひ込んでといふ氣分の語。○手習　歌などを書く前に手馴しに書くといふのが原義で、それから、何となく書きすさぶ——本式でなく書き散すのにいふ。こゝもそれである。所謂習字といふ意味にも使ふが、こゝはそれとは感じが違ふ。○はるゞゝと遠々と「墓はれて」に掛る副詞。「はるゞゝと行くゞさき」といふ文の筋ではない。從つて、「母上がはるゞゝと關東の方に旅立をされる、その行く先が遠く戀ひしたはしく思はれて」といふやうな解は、內容的には兎も角も、原歌の表現に忠實であるとは謂へない。○そなたの空　母の行つた方の空。○ながめむ　眺めて悲しい物思をする事だらう。「ながむ」はじつと見入つてゐるといふ意から、自然物思に沈むといふ意にもなる。こゝは語の原義通りその兩意に渉つて使はれてゐるのである。○ものより殊に　他の何ものよりも殊に。○あはれにて　あはれに感じて、可哀さうに思はれて。「可愛ゆくて」は一寸感じが違ふ。○つくづくと　じーッと。深く物を案じつゝ眺め入るさまをいふ語。○空ながめそ　空をながめるな。「な……そ」は打消命令の慣用形式。○はや　はやく、ぢきに、すぐと。

山より侍從の兄の律師も、いでたち見むとておはしたり。それもいと心ぼそしと思ひたるを、この手習どもを見て、また書きそへたり。

あだにのみ涙はかけじ、旅衣、
こゝろのゆきて立ちかへるほど。

とは言忌しながら、涙のこぼるゝを、荒らかに物いひまぎらはすも、さまゞゝあはれなるを、阿闍梨の君は山伏にて、この人々よりは兄なり、此のたびの道のしるべに送り奉らむとて、出で立たるめるを、この手習にまたまじらざらむやはとて、書きつく。

立ち添ふぞうれしかりける、旅衣、
かたみにたのむ親のまもりは。

通解　比叡山から、侍従爲相の兄の源承律師も、私の出立を見送らうとしてやつて來られた。その源承律師も私の旅立つのを誠に心細いと思つてゐるのであるが、この書きすさんだ歌を見て、自分も亦それに次のやうな歌を書き加へた。

あだにのみ涙はかけじ、旅衣、
こゝろのゆきて立ちかへるほど。

（只徒らに泣いて、母上の旅衣に涙は掛けますまい。母上が目出度く勝訴なされ、十分の御滿足を持つてお戻りになるそれ迄、ほんとに大事な旅ですもの。）

といふやうに、不吉な事は言ふまいと努めてはゐながら、自然涙のこぼれるのを、わざと荒々しく物をいつて紛らしてゐるのも、樣々に物哀れであるが、又、阿闍梨の君は山伏で、この人達よりは兄で、「今度の旅行の道案内に御送り申上げませう」といつて、私と一緒に出立される趣であるが、「私もこの書きすさびにお仲間入りをしないではゐられぬ」といつて、次のやうな歌を書きつけた。

立ち添ふぞうれしかりける、旅衣、
かたみにたのむ親のまもりは。

（兄弟がお互に頼みとしてゐる親の守護として、この私は、今母君の身に添つて一緒に旅に立つ、それは誠に嬉しい次第である。）

文旨　更に僧になつてゐた二人の子供の事を述べてゐる。律師については、「言忌しながら、涙のこぼるゝを、荒らかに物いひまぎらすも」といひ、阿闍梨の君については、「山伏にて、この人々よりは兄なり」といふやうな挿入句を隔てて、その人の言葉の形で直說敍法の筆を使つてゐる。迂餘曲折、なか〳〵面白い筆つきで、それだけに文脈もかなりこみ入つてゐる。歌は二つとも理窟ッぽくて情趣に乏しいやうである。

語義　○山　比叡山延曆寺。○律師　爲相の兄の源承律師。「律師」はリシともリッシとも讀む、僧正、僧都、律師といふ順序で、僧官の第三位。○いでたち見む　出立を見送らう。○おはしたり　來られた。我が子ではあるが、相當の年配でもあり、僧官に在る人でもあるので、特に敬語を使つたのだらう。○それも　その源承律師も。○あだにのみ　只徒らに、只空しく。○涙はかけじ　涙は掛けまい。大事な門出に涙は不吉だといふのである。○こゝろのゆきて　心に滿足を感じて、思ふ存分になつて。訴訟に勝つて歸るのをいふ。○立ちかへるほど　歸つて來る間。こゝの句意を概れば「歸られるその間の別であるから」と解してゐるが、さうすると、短い別といふ方が主になつて、「こゝろのゆきて」が從になる。原歌の趣はさうでなくて、「心のゆきて歸る」その間、大事な大事な旅だから、涙は不吉、決して旅衣に涙は掛けますまいといふのであらう。○言忌　不吉を忌んで口にしないこと。「涙はかけじ」といつたそのことを指すのである。○荒らかに物いひまぎらはすも　荒々しく强さうに物をいつて、こぼれる涙を紛らかす、それも。こゝの「も」は上文の侍從の如何にも弱々しげな態度に對して、これも亦あはれで、あれやこれや色々とあはれだといふ風に下文に續いてゐる趣である。○さま〴〵あはれなる色々あはれであるのに又。こゝの「あはれ」はあはれに感ずる、卽ち、さうした人々も可哀さうだし、それにつまされて自分も悲しいといふ心持だらう。「それ〴〵いろ〳〵と可愛ゆくあります」などいふ解は當らぬ。「を」は「これ〳〵だのに又こんな事もあつた」といふ趣で下文につゞいてゐる。○阿闍梨の君　源承の兄の慶融阿闍梨。「阿闍梨」はアザリともアジャリとも讀む、天台眞言兩宗の高僧の稱號。「君」は敬語。○山伏　修驗者。山野に起臥して修行するよりの稱呼。○兄なり　兄なるがの意、完全終止ではない。○此のたびの　今度の。「此の旅の」とした本もあるがさうではあるまい。○道のしるべに　道案内として。○送り奉らむ　鎌倉までお送り申し上げ

よう。○出で立たるめるを　出立されるやうであるが。「める」はそのやうな樣子だといふ婉曲敍法。○この手習にまたまじらざらむやは　この手習に私も仲間入りをしなからうや。「やは」は反語。私も皆樣のお仲間入りをして歌をよまうといふのである。○立ち添ふ　母の身につき添つて行く。「旅衣」の縁で「裁ち添ふ」の意をも含めてゐる。○かたみにたのむ　兄弟がお互にたよりにする。○親のまもりは　親の守護たる私は。

女の子はあまたもなし。たゞ一人にて、この近きほどの女院にさぶらひ給ふ。院の姫宮一所うまれ給ふばかりにて、心づかひもまことしき樣にて、おとなしくおはすれば、宮の御かたの戀しさも、かねて申し置くついでに、侍從、大夫などのこと、はぐくみおほすべきよしも、こまかに書きつけて、奥に、

君をこそ朝日とたのめ、ふるさとに、
　のこるなでしこ、霜にからすな。

と聞えたれば、御返もこまやかに、いとあはれに書きて、歌のかへしには、

思ひおくこゝろとゞめば、故郷の
　しもにも枯れじ、やまとなでしこ。

とぞある。

通解　私には女の子は深山もない。たつた一人で、この近邊の女院にお仕へ申してゐられる。院の姫宮がお一方お生れ遊ばしただけだし、それに何かの氣配りも實直な風で、こくしつかりした人であられたので、姫宮の御事が戀しいといふ事をも、旅だちに先立つて前以て申して置く序手に、侍從爲相や、大夫爲守などの事を、よく面倒を見て育て上げて下さるやうにといふ事も、細々と書きつけて、その手紙の末に、

君をこそ朝日とたのめ、ふるさとに、
　のこるなでしこ、霜にからすな。

（あなたをこそ、朝日のやうにたよりに思つてゐるのですから、どうか故郷に殘つてゐる撫子を、霜に枯さないで下さい。――私は只もうあなたを力に思つてゐるのです。どうか故郷に殘つてゐる二人の子の面倒を見て、無事に成人さして下さい。）

というて上げたら、手紙についての返事も、細々と眞情を籠めて書いてあつて、歌の返しには、

思ひおくこゝろとゞめば、故郷の
　しもにも枯れじ、やまとなでしこ。

（あと〳〵の事を深く思つて置かれるその御心を止めたなら、大和撫子は故郷の霜にも決して枯れは致しますまい。――母上が二人の上を深くお思ひになるそのお心が故郷に殘つて居りますからは、その一念でも二人の子供は必ず無事に成人致す事で御座いませう。）

とあつた。

文旨　今度は女の子の事を書いてゐる。この女の子については特に丁寧に敬語が使つてある。女院にお仕へしてゐたからでもあらうが、そればかりでなくて、筆者もこの娘には日頃から一目置いてかなり畏敬してゐたもののやうに考へられる。但、敬語の使ひ方は、今日とは餘程違つてゐて、夫から妻へ、親から子へ、兄から弟へ、

君から臣へ――さういふ關係にあつても、殆ど丁寧な言葉遣といふ位の程度で、盛に使はれてゐたのである。なほ挿入句が多くて、文脈がこみ入つてゐる事も、この筆者の一つの特長で、こゝの文にはそれがかなり極端にあらはれてゐる。

【語義】　○たゞ一人　名は紀ノ內侍といふ。父は爲家でないともいふ、五人の兄弟中のかしら。○この近きほどこの近いあたり、この近邊。○女院　天皇の御母や准母、は內親王の、佛門に入らせられた方に授けられる尊號。こゝは新陽明門院の御事、御名は藤原位子（たかこ）、關白基平の女、龜山院の妃で、後に尼となつて覺隆と申し、永仁四年一月、御年三十五で薨ぜられた。○さぶらひ給ふ　奉仕してゐられる。○院の姫宮　新陽明門院の御腹の姫宮、即ち龜山院の皇女であらせられる。○一所うまれ給ふばかりにて　お一方お生れになつたばかりで。こゝの「ばかり」は「のみ」「だけ」の意で、その句の中に、その御一方の世話をするだけで、お勤め向も格別忙しくないといふ意を含めてゐるものと考へられる。お勤め向が忙しくては自分の子供の事などは頼めないが、幸ひ大して忙しくもないから頼んだといふ氣持で、下文に掛つてゐると見られる筆致だからである。○心づかひ　心をつかふこと、何かの事に氣を配る事。氣だて、心だてといふやうに見ても通ずる。○まことしき　實直な、眞面目な。○おとなしく　「老練で、大人びて」といふよりも、こゝは重々しくしつかりしての意に見るがよい。「溫厚一といふ意でもない。次の「おはすれば」は「侍從、大夫などのこと」云々に掛る。○宮の御かたの戀しさもかれて申し置くついでに　姫宮樣が戀しいといふ事も、前以て申して置く序手に。自分の娘がお世話申してゐる姫宮だから殊更戀しく思ふ、その事も旅立つ前から申して置くその序手にといふのだらう。「私は旅立を致しますが、お名殘惜しく存じますと、あなたから申し上げて下さいと頼む序に」と解する說もある。事實にあてはめて考へれば如何にもしつくりするやうだが、原文の字面だけではさうは取りにくい文句のやうに思ふ。娘に對して前後凡て敬語づくめであるから「申し」もその娘に向つて申したと解するのが、文句そのものからは至當の事だらう。○はぐくみおほすべきよし　養育して成人させてくれといふ旨。「べきよし」は「べしとの旨」の義で、こゝの「べき」は命令の用法を間說敍法に轉じた趣である。○こまかに　事細かに、詳細に。○奥　手紙の文句のすんだ後。○君紀ノ內侍を指す。○朝日とたのめ　朝日としてたよる。朝日は撫子のために霜を消して呉れるもの、その撫子に對する朝日の如く、我が子の保護としてあなたをおたよりするといふのである。○なでしこ　瞿麥。「なでしこ」といふことばの語義については、和名抄釋に、「瞿麥撫愛而養似二母撫二育幼兒一故」とある。その說の當否は疑はしいが、この語は往々「撫でし子」（撫育する子）の意に掛けて用ひられる。こゝもその一例で、爲相、爲守二人の愛兒を指したのである。○聞えたれば　申上げた所が、申してやると。○御返　御返事。「侍從、大夫などのこと、はぐくみおほすべきよしも、こまかに書きつけ」てやつた手紙の文句に對しての返事をいふ。○こまかに　こまごまと、くはしく。○あはれに　情愛深く。○思ひおく　色々と心配して考へて置かれる。阿佛尼の故郷の事を色々と心配して思ひ殘すその心をいふ。○こゝろとゞめば　心をあとに殘して置くならば。○やまとなでしこ　唐なでしこに對して石竹の事をいふ。これもやはり愛兒の意に用ひたのである。

いつゝの子どもの歌、のこりなく書きつゞけぬるも、且はいとをこがましけれど、親の心には、あはれに覺ゆるまゝに、書き集めたり。さのみ心よわくてはいかゞとて、つれなく振り捨てつ。

【通解】　五人の子供の歌を殘らず書きつけたのも、一方から考へると誠に馬鹿げたやうであるが、然し親の心としては、それが誠に可憐に思はれるので、斯うして殘らず書き集めたのである。然しさう〳〵氣がよわくてはどうもならんと思つて、思ひ切つて、戀ひ慕ふ子供等を振捨てて出立した。

文旨　いよ〳〵出立の最後の場面で、以下は東路の旅日記になるのである。五人の子供の歌を列記しておいて、それも子ないとしく思ふ親心では、さうした子供の歌がそれ〴〵に皆可憐に思はれるので書き集めたのだと輕く言ひわけをして、さていよ〳〵の出立の所は、「さのみ心よわくてはいかゞとて、つれなく振り捨てつ」と簡單に述べ去つてゐる。而もその簡潔さに於て――特に「つれなく振り捨てつ」といふ敷語に於て千鈞の力强さを示してゐる。この一句の意味情調は語義に於て詳悉する。とにかくこの一節は、無條件に推服すべき文であると思ふ。

語義　○いつゝの子ども　五人の子ども。爲相、爲守、源承、慶融、紀ノ内侍の五人。○且は　一方からいへば、一面から考へると、見やうによつては。○なこがまし　馬鹿らしい、笑ふべき事だ。「出過ぎて居る」といふ解もあるが、それはずつと後世の語意でもあり、又前後の文義からいつてもこゝにはまらない。こゝの文意は五人の子供の歌を麗々しく並べ立てる、それは見やうによつては隨分馬鹿々々しい話だがといふのである。○あはれに覺ゆるまゝに　可憐に思はれるまゝに。こゝの「あはれ」は子供の歌そのものが感じが深くいとしいものに自分に思はれるといふのである。「子供は可愛く思はれるものでありますから」とか「ふびんに思はれるので」とかいふやうに解するのは、「歌」を問題にしてゐるこの文の場合にはしつくりしないと思ふ。○さのみ　さう〳〵、さう一概に。「それほど」「そんなに」「そのやうに」など解するのが普通だが、それでは「のみ」に依つて强められた語感が出ない。○いかゞ　「いかゞはせむ」の略と見てよからう。どうもならん、駄目だの意。○つれなく振り捨てつ　心强く振り捨てた、戀ひ慕ふ子供等を思ひ切つて振り捨てて出立した。「つれなく」は情こはく、心を鬼にしてといふ思想。いつ迄めそ〳〵いつてゐてもきりはない、さア〳〵もうお別れですよと慕ふ子供等を振り切つて出立する、その間の消息がこの一語の中にまざ〳〵と味はれる。「振り捨てつ」の「つ」は唐突に事の完了する趣をあらはす語で、この一語によつて、思ひきつて出立する――芝居でやれば、花道の七三で一寸立ち止つて、涙に咽ぶ思入れがあつて、それから涙をふるつてッゝと引込んで行くあの心持である。これが「ぬ」――自然完了の趣の「ぬ」でない所、そこに文としての自然の妙味がある。

粟田口（あはだぐち）といふ所より、車（くるま）はかへしつ。ほどなく逢坂（あふさか）の關越（せきこ）ゆるほどに、

さだめなき命（いのち）は知らぬたびなれど、
またあふ坂とたのめてぞ行く。

通解　粟田口といふ所から、今迄乘つて來た車はかへした。それから程なく逢坂の關を越える時分に、次のやうな歌を詠んだ。

さだめなき命は知らぬたびなれど、
またあふ坂とたのめてぞ行く。

（老少不定の命、再びこゝに歸る日があるかどうかは分らぬ旅であるが、然しこゝは逢坂、その名の通り、またいつかは歸つて來て再び逢ひませうよと、それをせめてもの心だのみにして、立つて行くのであります。）

文旨　東路の旅の第一歩。逢坂の關は京都から東海道への第一歩の關で、最も人口に膾炙してゐる。そこに殘した一首の歌は、歌として固よりすぐれたものではないが、とぼ〳〵と遠い旅に立たうとする筆者の氣持はかなりに出てゐる。

語義　○粟田口　山城國愛宕郡、京都の三條通の東方で、京都から東海道へ出る口である。○車はかへしつ

京の住居から乘つて來た牛車をこゝで歸したといふ意。筆者はこゝからは徒歩か馬かで行つたのだらう。下文の醍醐が非の所に「かち人はなほ立ちよりて汲むめり」とある。その邊の文句では筆者は馬に乘つてゐた樣に取れる。

○逢坂の關　近江國滋賀郡。山城の國境で、大津市の南に當る。○定めなき命は知らぬたび　老少不定の命で、果して生きながらへ再び歸る日があるかどうか分らぬ旅。○またあふ坂　「再び逢ふ」の「逢ふ」を「逢坂」の「逢」に掛けた言葉の綾。○たのめてぞ行く　「たのめ」はマ行下二段の他動詞で、たのみに思はせる、あてにさせるの意、更に突込んでいへば、氣休めをいふの心持である。枕草子に「何の心ありてあすはひのきとつけけむ、あぢきなきかれごとなりや、誰にたのめたるにかあらむと思ふに、知らまほしうおかし」とある、その「あぢきなきかれごと」がこの語の內容をよく說明してゐる。こゝもその原義通りで、我と我が心に「また逢坂とたのめて」さうした「あぢきなきかれごと」をいうて行くといふ趣である。諸家の註解が、「再びかへつて來て逢ふ事が出來るやうにと、たのみに思つて行く——たよりとして出發して行く」といふに一致してゐる。內容的には別段變りはないやうだが、それでは「たのみてぞ行く」の趣で、わざ〳〵「たのめて」といふ他動詞を使つた自己慰安の氣分がにじみ出して來ない。吾々は斯ういふデリケートな言葉の感じに、もつともつと敏感でありたいと思ふ。

野路といふ所は、こし方ゆくさき、人も見えず、日は暮れかゝりて、いと物かなしと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれて、
行くさき遠き野路のしの原。

通解　野路といふ所は、今通つて來た方をふりかへつても、これから行く先の方を見ても、人の姿も見えず、誠に淋しい、それに日は段々暮れかけて來て、誠に物悲しいと思ふのに、その上時雨までばら〳〵と降つて來た。

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれて、
行くさき遠き野路のしの原。

（時雨が降つて來て、故郷を思ふ涙の爲めにぬれた袖が、一入ぬれまさる、さうした悲しい思ひの中に、斯うして、行くさき遠い、遙かな野路のしの原を、とぼ〳〵と辿つて行く事である。）

文旨　野路といふ所の光景——廣々として通行人もない野中を、雨の夕暮にとぼ〳〵と行く淋しい光景である。

語義　○野路　近江國栗太郡老上村。○こし方　今迄自分があるいて來た方。○ゆくさき　これから自分の歩いて行かうとする方。○人も見えず　人の姿も見えない、通行してゐる人もない。こゝの「ず」は完全終止でなくて、「日は暮れかゝりて」と共に「いと物かなし」に掛つてゐる趣と見てよからう。○時雨さへ　その上に時雨までも。○うちそゝぐ　ばら〳〵と降る。○うちしぐれ、ふるさと　「うちしぐれ」は時雨が降るといふ動詞であるが言葉の綾としては「時雨降る」の「降る」と「ふるさと」の「ふる」とを掛けた趣のやうである。○ふるさと思ふ袖ぬれて　ふるさとを思つて涙に濡れる袖が、更に時雨の爲めに一層ぬれての意。○行くさき遠き野路のしの原　悲しい物思ひをしつゝ、行く先遙かな野路のしの原を行く。この一句を「こゝ野路の篠原から行くさきながめて見るとまことに遠いことですから、それを思ふと心淋しいことです」と解した書もあるが、「野路の篠原」の遙々とつゞいた道そのものを「行くさき遠き」といつたものである事は、「こし方行くさき人も見えず」といふ文で明かだし、又斯うして下の句が上の句から引き離れたもののやうに解くのも、少なからず原歌の趣に反

すると思ふ。「野路」と「篠原」とは別個の地名で、大日本地名辭書に、「野路は往時東國道路の衝に當り、諸書に散見す。而して別に野洲郡篠原驛あり。往々混同の看あるを免れず。頗る商量を要す。野路の篠原と云ふは、大略此を略す。」とある。東關紀行では篠原の地で、「行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の篠原」と詠んでゐるが、本文は「野路」の方をさう呼んだのである。歌の口調上、その何れをも古來「野路の篠原」と一つゞけに呼んでゐたものであらう。

今宵は鏡といふ所につくべしと定めつれど、暮れ果てて行きつかず。守山といふ所にとゞまりぬ。こゝにも時雨なほしたひ來にけり。

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけむ、
間なくしぐれのもる山にしも。

今日は十六日の夜なりけり。いとくるしくて臥しぬ。

通解　今夜は鏡といふ所に着いて泊らうと豫定を立ててゐたが、途中で日が暮れて了つて、そこまで行きつく事が出來ないで、守山といふ所に泊つた。こゝへも時雨がやはり私共のあとをしたつて降つて來たのであつた。

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけむ、
間なくしぐれのもる山にしも。

（涙や雨でさん〳〵に濡れた袖を、なほ一層ぬらせといふ氣で、絶間なく時雨のもれて來るこの守山には泊つた事であらうか。さて〳〵旅愁の思堪へ難い事である。）

今日は十六日の夜であつた。ひどく寢苦しい思ひをして寢た。

文旨　鏡に着いて泊るといふ豫定が狂つて、守山といふ所に泊つた。そこでもやはり時雨が降つてゐた。といふのである。歌の「間なくしぐれのもる山」は、古今集、貫之の歌に、「白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色付きにけり」などあつて、常套的な言葉の綾だか、「いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけむ」の句には、旅愁の感傷が相當にじみ出てゐる。最後の「今日は十六日の夜なりけり」は諸註漫然と見遁してゐるが、折角の十六夜に時雨が降つてゐる――朝立つ時は月があつた、それは上文に、「いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる」とあり、下文に、「都を出でしことは、神無月十六日なりしかば、いざよふ月をおぼしめし忘れざりけるにやと」云云などある事で推せられる。そこで作者は、雨の中に宿について、あゝさう〳〵、さういへば今日は十六日の夜だつたなと思つた。その感じがそのまゝ斯う書かれたのであらう。從つて又次の「いと苦しくて臥しぬ」といふ感じがしつくりする。慣れぬ旅の第一夜、而も月のよい筈の晩時雨に涙を催される、さてこそ「苦しくて臥しぬ」である。

語義　○鏡　近江國蒲生郡鏡山村。○定めつれど　豫めきめておいたが、豫定をしてゐたが。○守山　近江國野洲郡、野洲川の西岸。○とゞまりぬ　泊つた。足を止めたといふ思想の語。○時雨なほしたひ來にけり　時雨がやはりあとを慕つて來た。こゝでもやはり時雨が降つて來たといふのを活喩的に書いたのである。○いとゞなほ　いよ〳〵益々、散々濡れてゐる上に更に又。「いとゞ」はいと〳〵の約でいよ〳〵の意、「なほ」もこの場合はやはり「更に」「益々」の意で、同義語重用である。○袖ぬらせとや宿りけむ　袖をぬらせといつて宿つたのであらうか。守山の宿に泊ると時雨が絶えず降つて涙のかわく間もない、して見ると私は散々濡れた袖を更に又濡らせといふ氣でこゝへ泊つたのかなアといふ自己懷疑で、その意味に於て「袖ぬらせとや」といふ命令の形がよく

利いてゐる。その氣持が分らぬのであらうか、「時雨が宿る」といふやうに解いた書も少なくないし、又、自分が宿るといふ向に解しながら、「袖ぬらせといふ語は、自分が宿つたといふ語に對して、少し具合が惡い。これは袖ぬらせとて時雨が降つて來たなどいふべき句法がまぎれて、こんなになつたのである。」といつたり、「間なく時雨の洩る守山の宿に、時雨が宿るとしては、そこに矛盾がある。やはり自分が時雨の洩る宿に宿つて袖を濡らすの意に取つた方がよいかとおもふ。但し、袖濡らせを自身に對する語としては無理であるが、上述の矛盾あるよりはまだしもであらう。よつて余はこゝを作者の語法の不備と見たいと思ふ。」といつたりした書もあるが、上述する通り「袖ぬらせとや」と自己に疑ひ掛けた所が、この一首の生命で――それが歌として上乘か否かは勿論別問題だが――斯うした所をそんなに理窟ッぽい見方をしたのでは、この種の歌の氣持は分らぬのではないかと思ふ。

○間なく　絶間なく。○しぐれのもる山　「もりやま」を「もるやま」と呼んだ例もあつて、前掲の古今集の歌のやうに、古來「漏る」に「守る」を掛けていふのは一つの常套修辭になつてゐたのである。古今集の歌や、太平記の「時雨もいたく守山の木の下露に袖濡れて」の例は、木の間から漏るといふ思想、こゝは宿屋の屋根の隙から漏るといふ氣持の方だらうが、さうした事實よりも寧ろ、守山で時雨の降るなかに宿に泊つて寂しく悲しかつたといふその主觀を言葉の技巧で表現した歌と見る方が自然だらう。○しも　强勢の助詞。○いと苦しくて臥しぬ　大抵の註書が、こゝの「て」を「ので」の意に取つて、「旅の勞れで苦しくて」「非常に苦しいので」などあるが、さうでなく、苦しい思ひで寢たといふ意だらう。さういふ趣の「て」もいくらも類例がある。つまり寢苦しい思ひで一夜を明したといふ氣分で、それについては、文旨の條にも書いて置いた。

いまだ月の光はかすかに殘りたるあけぼのに、守山を出でて行く。野洲川わたるほど、さきだちて行く旅人の駒の足の音ばかりさやかにて、霧いとふかし。

旅人はみなもろともに朝立ちて、
　こまうちわたす野洲のかはぎり。

通解　まだ月の光はかすかに殘つてゐる明け方に、守山を出發して行つた。野洲川を渡る頃、吾々の先に立つて行く旅人の馬の足音だけがはつきり聞えて、姿は一向に見えず、霧が深く立ちこめてゐる。

旅人はみなもろともに朝立ちて、
　こまうちわたす野洲のかはぎり。

（旅人は皆一緒に朝早く宿を立つて、川霧の深く立ちこめた中を、馬に乘つて野洲川を渡つて行く。さて〳〵面白い朝景色だ。）

文旨　夜分は時雨が降つてゐたが、朝になると雨は止んで月光が幽かに殘つてゐる。そして野洲川を渡る頃には、一面の霧で、前に行く旅人の姿は見えず、只馬の足音が聞えるだけだといふので、歌もさうした趣を咏じていやみがない。簡單ながらさうした所の朝戸出の光景がよく寫されてゐる。

語義　○あけぼの　夜明け方、ほの〴〵と夜の明ける頃。○野洲川　近江國野洲郡にあつて、三上山の麓を過ぎて琵琶湖に入る川。○駒の足の音　馬の足音。蓋し野洲川は相當の大河で、平時は河原の間に水が流れてゐたもので、その間を駒で行くために、特に足音がさやかに聞えたのであらう。○さやかにて　はつきりと聞えて。○駒うちわたす　馬に乘つて渡るといふのを「駒」を客語にして他動詞にした一種の慣用語法。

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとゞまる。月出でて、山の峯に立ちつゞきたる松の木の間、けぢめ

見えて、いとおもしろし。こゝは夜ぶかき霧のまよひにたどり出でつ。

通解　十七日の夜は、小野の宿といふ所に泊つた。月が出て、山の峯にづうーッと立ち並んでゐる松の木と木の間が、一つ一つ境目が立つて見えて、誠に面白い。こゝはまだ夜が容易に明けきらぬ頃の、深く立ちこめた霧の中を、とぼ〳〵と出發した。

文旨　小野の宿の一泊、簡單ながら松山に月の出た光景、霧の中を出發する光景が、如何にも面白く書かれてゐる。

語義　○小野の宿　近江國彦根の東方約半里の所。　○けぢめ　區別、差別、境目。　こゝの文意は、向ふの山にずうーッと松が並んで生えてゐる、月がその向ふに出て來ると、光線の爲めに、松の木と木の間が一つ一つ境目が立つて見えて、如何にも面白いといふのである。○夜ぶかき　夜の深い、まだ容易に夜の明けぬ。夜がふけたといふよりも寧ろ朝暗い内といふ方の感じの語。○霧のまよひ　霧の立ちこめたなか。註書の殆ど凡てが、「霧がこめて道の迷ひ易いこと」と解し、從つてこの前後を、「こゝは、まだ夜が深く、霧立ちこめて、迷ひ易いのに、道をさがしもとめるやうにして立ち出でた。」といふ風に通解してゐる。斯う解すると、「まよひ」といふ語の中に「道に迷ふ」といふ意味があるやうに考へられ、從つて「霧にまよひて」といふ文であるかのやうにも取れる。「霧のまよひ」は霧自體の立ちまよひである。源氏物語野分の卷に、「童おろさせ給ひて、蟲の籠ども露侮はせ給ふなりけり。紫苑瞿麥の濃き薄き袙どもに、女郎花の汗衫などやうの、時に逸ひたるさまにて、四五人ばかりつれて、こゝかしこの叢によりて、いろ〳〵の籠どもをもてさまよひ、瞿麥などの、いと哀げなる枝ども取りもて參る、霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。」とある。この文で「霧のまよひ」といふ實感が分る筈である。源氏の場合は寧ろ薄霧の漂ふ中を歩いてゐる樣子と考へられるが、こゝの文は、「夜ぶかき霧」とつゞいた語路の感じ、「たどり出でつ」といふ言葉の感じから、深い霧のやうに考へられる。それにしても、「霧のまよひ」は霧の立ちこめたさま、霧の漂ふさまであつて、その中に「道に迷ふ」などいふ感じは無いのである。一本には「霧のまがひ」とある。「まがひ」は屢々「散りのまがひ」と熟語して、木の葉や花などの散り亂れることにいふ。「霧のまがひ」といふ語は餘り類例はないが、恐らく、あたりの見分けがつかぬやうに霧が漂つてゐるといふ意に解してよからう。○たどり出でつ　とぼ〳〵と出發した。「たどる」は、古今集の「天の川淺瀬白浪たどりつゝ、渡りはてればあけぞしにける」の例のやうに、路に迷つて探し求めると、あまり語義に即し過ぎて却て文の實感に反すると思ふ。さういふ解は、前の「霧のまよひ」といふ語を、「霧が深くしてどこへ行つてよいか迷ふときに」など解する所に由來するのだと思ふ。

醒が井といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かちびとは、なほ立ち寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁るこゝろをすゝぎなば、
うき世の夢やさめが井の水。

とぞ覺ゆる。

通解　醒が井といふ水、これは有名な清水なので、若し夏だつたら、このまゝ通り過ぎようや、必ず下りて飲まうにと思つてゐると、徒歩の旅人たちは、この初冬の寒い今でもやはり清水のほとりに立ち寄つて、汲み上げ

て飲んでゐる樣子である。

むすぶ手に濁るこゝろをすゝぎなば、
うき世の夢やさめが井の水。

（この醒が井の水を手に掬つて、汚れた心を洗ひ清めたら、浮世の夢もさめて了ふだらう――つまらぬ名利煩惱の雜念も洗ひ去られる事であらう。）

といふ感じがした。

文旨　古來人口に膾炙してゐる醒が井の記事である。特に「かち人は」と斷つてゐる所から見て、筆者は馬に乘つて歩いてゐたもののやうに考へられる。前に野洲川の條にも旅人が馬で川を渡る趣が出てゐる。蓋し馬で旅行するのは當時一般の風習であつたのだらう。

語義　○醒が井　近江國醒井村。米原の東北約一里、今東海道線の驛のある地の有名な清水。藤川の記に「醒が井といふ所、清水岩根より流る。一筋は上より、一筋は下より流れて、末にて一つに流れあふ。」とあり、東關紀行にも、「音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の下の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄みわたりて、げに身にしむばかりなり。」とある。○うち過ぎましや　清水を汲んで飲まずにそのまゝ通り過ぎようや、決してそんな事は出來ぬ。「ならば……まし」は假設の呼應。○かちびと　徒歩の人、足であるいてゐる旅人。○なほ　やはり。夏ならぬ初冬の今でもやはり。○汲むめり　水を汲み上げて飲んでゐるやうである。「めり」は見えるの意、馬上から見ての感じである。○むすぶ手に　水を掬ひ上げた手で。但、歌意を明かにする爲めには、醒が井の水（チ）手にむすび（テ）濁る心をすゝぎなば浮世の夢や（サメン）と轉位して見ればよい。○濁るこゝろ　汚れた心、浮世の名利に捉はれたきたない心。○すゝぎなば　洗ひ清めたならば。○うき世の夢やさめむ　「うき世の夢やさめが井の水」「うき世の夢やさめむ」といふのを、すぐ「醒が井」に掛けた言葉の綾。「うき世の夢」は世の人の見てゐる夢、即ち浮世の名利を欲する雜念。○とぞ覺ゆる　といふ感じがした。更に一歩突込んでいへば、そんな風に感じてこんな歌を作つたの意。

十八日、美濃國關の藤川わたる程に、まづ思ひつゞけける。

わが子ども君につかへむためならで、
わたらましやは、關のふぢ川。

通解　十八日、美濃國の關の藤川を渡る時分に、まづ次のやうな歌を考へたのであつた。

わが子ども君につかへむためならで、
わたらましやは、關のふぢ川。

（我が子供が君にお仕へ申さうためでなくて、どうして關の藤川を渡らう、私が斯うしてつらい旅をしてこの名高い關の藤川を渡るのも、只我が子どもが歌道を以て君にお仕へするやうにとの心願からである。）

文旨　有名な關の藤川を渡るにつけて、古今集大御所の歌の、「美濃の國關の藤川絶えずして、君に仕へむよるづ世までに」を想起して、之を自分の主觀の上に移してこんな歌を作つてゐるのである。

語義　○十八日　この三字は殘月抄本には無いが、他の例に倣つて一般に補つて行はれてゐる。○關の藤川

美濃國不破郡藤川。不破の關の傍を流れるから「關の藤川」といふ。今は藤子川と稱してゐる。○思ひつゞけるは」は反語。次のやうな歌を心の内に考へたといふ意、結局はたゞ詠んだといふ事である。○わたらましやは　渡らうや。「や

不破の關屋の板びさしは、今もかはらざりけり。
ひまおほき不破の關屋は、このほどの
時雨も月もいかにもるらむ。

通解　不破の關所の番小屋の板庇は、今も昔と變らず荒れはてたまゝ殘つてゐるのであつた。
ひまおほき不破の關屋は、このほどの
時雨も月もいかにもるらむ。
（不破の關所の番小屋はひどく荒れはてて、すき間だらけだから、この頃の時雨も月もどんなにか洩れて入り込む事であらう。）

文旨　不破の關に來た。蓋し關所はとうに廢せられたが、その遺跡として荒廢に歸した番小屋だけは殘つてゐたのだらう。それは東關紀行にも「かしは原といふ所を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影もみえぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてゐれば不破の關屋なり。萱屋の板庇、年へにけりとみゆるにも、後京極攝政殿の、荒れにし後はたゞ秋の風とよませ給へる歌、思ひいでられて、この上は風情もめぐらしがたければ、幾しき言の葉なのこさむもなか〳〵におぼえて、こゝをば空しく

うち過ぎぬ。」とあり、二條良基の「小島の口ずさみ」にも、「不破の關屋は昔だにあれにければ、かたのやうなる板庇、竹の編戸ばかりぞ殘りける。げに秋風もたまるまじうみえたり。」とあるのでも推せられる。そこで筆者は眼前にさうした光景を見て、後京極攝政の「人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし後はたゞ秋の風」といふ歌を想起して、簡單に「今もかはらざりけり」と述べて一首の歌を詠じたのである。

語義　○不破　國史大辭典に、「美濃國不破郡關ノ藤川の東岸、今關ヶ原大字杉尾の大木戸坂の地にして、關址の在る處を大關といひ、北方十二三町許に、小關といへる字殘れり、蓋し大關は中山道の取締にて、小關は北國街道の取締として、之をおかれしものなるべし」と見え、又同書にその起原沿革として、「天武天皇が、近江朝廷の軍を遮ぎる爲めに、不破道を塞ぎし事書紀に見え、一代要記には、白鳳元年初置ニ不破關一と見えたり、されど此時は、一時關を構へたるに過ぎざりしか、又は引きつゞきて之をおきたるものなるか詳かならず、而して軍防令には、其名見えて、三關の一に數へたり、其頃に及びては、常置せられしこと明かなり、桓武天皇延曆八年七月に至りて之を廢す、然れども事あるに際しては、故關を固めしめし事、國史に往々見えたるが、平安朝時代の末より、雨月漏る板屋と化し、歌に詠ずる一の名所とはなれり」とある。○關屋　關守の住む家。○板びさし　板で葺いた庇。○今もかはらざりけり　今も昔と變らなかつた。昔の通り荒れたまゝ殘つてゐたの意。文旨に引いた「人住まぬ」の歌などを想起していつた文句である。○ひまおほき　隙間の多い。板庇が破れて隙間だらけだといふのである。○いかにもるらむ　どんなにもれる事であらう。時雨や月光が板庇の隙間から漏れて入り込むといふ意の「漏る」に、關を守るの「守る」を掛けた言葉の綾である。

關よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎて降りくらせば、道もいとあしくて、心より外に、笠縫のうまや

といふ所に、暮れ果てねどとゞまる。

旅人は蓑うちはらふゆふぐれの
　　雨にやどかるかさぬひの里。

通解　不破の關を通る頃から、空がかき曇つて降つて來た雨は、時雨といふよりづつとひどい降りで、終日降り通したので、道も非常に惡くて、そんな氣では無かつたが、つひ豫定を變更して、笠縫の驛といふ所に、日はまだ暮れ切らなかつたが、宿を取つた。

旅人は蓑うちはらふゆふぐれの
　　雨にやどかるかさぬひの里。

（旅人は蓑を打ち拂ふほどの强い夕暮の雨の爲めに、自分は困りはてて、とう〳〵笠縫の里にやどを取る事にした。）

文旨　雨の爲めに豫定を變更して笠縫の驛に泊つたといふその記述は仲々面白い。「時雨に過ぎて」だの「暮れ果てれど」などいふ句が殊に面白く讀める。「暮れ果てれど」の一句の無い本もあるやうだが、文調上是非ほしい句である。歌に至つては只言葉の遊技で愚にもつかぬものである。

語義　○關　不破の關。○かきくらしつる雨　空も眞暗になつて降つて來た雨。「かき」は接頭語、「くらし」は暗くし（空を）の意の動詞。○時雨に過ぎて　時雨にまさつて、時雨以上に。時雨は降つたり止んだりしてばらばら降るものであるが、今日の雨は非常に大降りで、時雨などといへぬ程だといふのである。○降りくらせば　終日降り暮したので、朝から晩まで降り通したので。○心より外に　自分の考へに反して。こゝは仕方なしに豫定を變へてといふ趣。○笠縫　美濃國大垣附近北杭瀨村の古稱。○うまや　宿場。街道の往來に便ずる爲め、馬や人夫などをおいて旅人の求めに應じた所。○暮れ果てれど　日が暮れて了つたわけではないが。○蓑うちはらふ　蓑を拂つて雨のしづくをふりおとす。「蓑」に地名の「美濃」をも掛けた技巧らしい。○雨にやどかる　雨が降る爲めに宿をとる。「蓑」も笠縫の「笠」も凡て雨の緣語。

十九日、又こゝを出でて行く。夜もすがら降りける雨に、平野とかやいふ程、道いとわろくて、人通ふべくもあらねば、水田の面をぞさながら渡り行く。明くるまゝに、雨は降らずなりぬ。

通解　十九日、又この笠縫の驛を出立して行つた。夜通し降つた雨の爲めに、平野とかいふ邊は、道が非常に惡くて、到底人が通れさうもないので、水田の上をそのまゝ渡つて行つた。夜が明けるにつれて、雨は降らなくなつた。

文旨　よほどひどい雨だつたらしい。道が惡くて人が通れさうもないから、水田の上をそのまゝ渡つて行つたといふのが一寸分りにくいやうな氣がする。文面からいへば、道がひどく惡い爲めに、まだ〳〵この方がましだといふので、委細構はず水田の上をざぶ〳〵渡つて行つたといふのらしい。勿論馬上で渡つたのだらう。

語義　○こゝ　笠縫の驛をいふ。○夜もすがら　夜通し、終夜。○平野　美濃國安八郡にある。○とかやいふ程　とかいふ所の邊。○通ふべくもあらねば　通つて行けさうにもないから。こゝの「べく」は可能の意。○さながら　そのまゝ。○明くるまゝに　夜が明けるにつれて。夜明けになるに從つて漸くといふ思想。

畫つ方、過ぎ行く道に、目に立つ社あり。人に問へば、むすぶの神とぞ聞ゆるといへば、

まもれ、たゞ、ちぎりむすぶの神ならば、
　解けぬうらみにわれ迷はさで。

通解　畫頃、通つて行く道に、特に目につく社があつた。人に尋れたら、結ぶの神と申しまするといつたので、まもれ、たゞ、ちぎりむすぶの神ならば、
　解けぬうらみにわれ迷はさで。
（約束を結ぶといふ御名を持つた神樣でいらせられるならば、どうぞ深く心に結ぼれて解けない恨の爲めに私を迷はさないで、早く約束通りになるやう、この身をお守り下さいまし。）

文旨　結ぶの神といふ社の所を通つて、感懷を咏じたのであるが、所詮は、「ちぎりむすぶ」と「解けぬうらみ」との言葉の綾に過ぎない。

語義　○畫つ方　畫の頃。○目に立つ　特別に目立つ。○むすぶの神　美濃國安八郡平野庄にあつて、結大明神と號し、猿田彦大神を祭る。○聞ゆる　申します。「いふ」の敬語。○まもれたゞ　たゞ我を守らせ給へ。兼ねての約束――亡夫爲家が爲相に領地を讓ると約したその約束が果される樣我が身を守つてくれといふ意だらう。○ちぎりむすぶの神ならば　「結の神」の名を「ちぎり結ぶ」として、約束を結ぶといふ名の神ならばといつたのである。○解けぬうらみ　結ぼれて解け難い恨。領地を横領せられた恨のいつ迄も解けないのをいふ。○われ迷はさで　私を迷はさないで。「まもれたゞ」に掛る。私を解けぬ恨の爲めに途方に暮れさせないで守つて下さいといふのである。歌を卒讀した感じからいへば、兼ねての約束通り私を守つてこの恨を晴して下さいといふやうにも取れるが、作者の胸中に抱いてゐる事實問題と歌詞の技巧とを兩々對比して考へると、「契りを結ぶといふ神樣なら、私の身にかゝつた契――領地讓渡の亡夫の契も叶ひまするやう、只々お守り下され、その契の實現されぬ恨みの爲めに、いつ迄も私が途方に暮れさせないで」と解した方が順當らしく思はれる。

洲俣とかやいふ川には、舟を並べて、まさきのつなにやあらむ、かけ留めたる浮橋あり。いとあやふけれど渡る。この川、堤の方はいと深くて、片方は淺ければ、

　片淵のふかきこゝろはありながら、
　　人目づつみにさぞせかるらむ。
かりの世のゆききと見るもはかなしや、
　　身をうき舟をうき橋にして。

とぞ思ひつゞけける。また一の宮といふ社を過ぐるとて、

　一の宮、名さへなつかし、二つなく、
　　三つなき法をまもるなるべし。

通解　洲俣とかいふ川には、舟を幾艘も並べて、直桥の綱だらうか、何でもそんな風の綱でつなぎ止めた船橋

がある。非常にあぶなつかしいが仕方なしに渡つた。この川は、土堤の方は非常に深くて、片方は淺いので、

片淵のふかきこゝろはありながら、
　人目づつみにさぞせかるらむ。

（私もこの川の片淵のやうに、深い心は持つてゐながら、この片淵の水が堤に堰き止められてゐるやうに、私も人目の堤に堰かれて、人の思はくを憚るために、さぞ何事も思ふやうにならぬ事でせう。）

かりの世のゆききと見るもはかなしや、
　身をうき舟をうき橋にして。

（浮舟をつないで浮橋にして、その上を危い思をしつゝ渡つて行く、これこそ假の世の往來だ――はかない人世を渡つて行く姿だと思ふにつけても、誠にはかない思のする事である。）

といふやうな歌を考へた。又一の宮といふ神社の所を通り過ぎるといつて、

一の宮、名さへなつかし、二つなく、
　三つなき法をまもるなるべし。

（一の宮といふ名前さへなつかしい、一の宮といふからは、二つなく、三つなき、唯一乘の佛の妙法を守り給ふのであらう。）

文旨　洲俣川の記事として、「まさきのつなにやあらむ、かけ留めたる浮橋あり。」といふ文句は簡潔の妙を極めてゐるが、二つの歌は相變らずの言葉の遊技、一の宮の歌も全く言葉の理窟で、何の藝術味もない、つまらぬ歌だと思ふ。

語義　○洲俣　美濃と尾張の間を流れる川。墨股とも書く。○まさきのつな　眞柝の葛で作つた綱。「まさき」は「まさきのかづら」の略。衞矛科の蔓性常綠植物で、莖は細小なる氣根を以て上昇し、葉は楕圓形で鋸齒を有し對生する。その蔓が丈夫なので綱に使ふのである。後撰集に、「照る月をまさきの綱によりかけて、あかず別るる人を繫がむ」などある。○にやあらむ　であらうか。はつきりそれと知れぬので疑問を含めていうたのである。○かけ留めたる　つなぎとめた。○浮橋　舟橋。舟をつないで並べ架して橋のやうにしたもの。○あやふけれど　あぶないが。一寸足を掛けて見ると、ゆら〳〵して如何にもあぶなつかしい、その感じをそのまゝ書いた語。「あぶないやうであるが」と解すると一寸感じが違つて來る。○堤の方は云々　一方は土堤でそこは水が深く、一方は川原か何かで、その方は水が淺いといふ趣である。○片淵の　「かたふち」は片方だけ水の深い淵、「の」は「の如く」の意。「ふかき」といふための序。○ふかきこゝろ　深い考。○人目づつみに　人目をつゝむために、他人を憚るために。「片淵」の緣で「堤」といふ語を用ひたので、この一句からは忍戀といふやうな感じも受取れるが、「ふかきこゝろ」（「ふかきおもひ」でなく）といふ言葉から見て、やはり、自分には深い考へがあつても、他人の手前、思ふやうにはならぬといふ心持を咏じた歌と見るべきだらう。○せかる　堰き止められる、さへぎられる、邪魔をされる。片淵の水が堤に堰かれるといふのと、人目にさまたげられて思ふやうにならぬといふのとの兩意。○かりの世　假に住む世、無常なる世、この現世。○ゆきき　往來。こゝは世を渡る意。○はかなしや　はかなき事よ、はかなくなさけなく感ずる事だ。○身をうき舟を　「身を憂き」と「浮き舟」と掛けたのである。「うき舟を」が夫木抄には「うき舟の」とある、その方がこの種の歌調として自然らしい。○うき橋にして　「うき舟をうき橋にして」といふと、舟を浮橋にしてその上を渡るといふやうに解せられ、「うき舟のうき橋にして」といふと、うき舟の浮橋の上で、即ち浮橋を渡りながらと解せられる。結局同じだが「を」と「の」とでそこに間接と直接の少しの違ひが起つて來る。○思ひつゞけ　心の中にさういふ歌を考へたといふ意。○一の宮　その國の第一の宮といふ意。こゝのは尾張國一の宮にある眞墨田神社。○名さへなつかし　一の宮といふ名前までがなつか

しい。「名を聞いただけでもなつかしい」といふ解があるが、それでは「名だに」の趣になる。「さへ」は往々「だに」と混用されるが、こゝは「さへ」（ソノ上ニ、何々マデモ）の義に解して差支ない。○二つなく三つなき法佛法をいふ。法華經方便品に、「十方世界中、尚無二二乘一、何況有レ三、……十方佛土中唯有二一乘法一、無レ二亦無レ三」とある。即ち二つとなくまして三つと無い唯一乘の妙法といふ思想。新後拾遺集、釋教に尊圓の歌に、「方便品、唯有二一乘法一無レ二亦無レ三といふ心を。春は唯花をぞ思ふ、二つなく三つなきものは心なりけり」とある。

二十日、尾張國下戸（をはりのくにおりど）といふうまやを行く。よきぬ道なれば、熱田（あつた）の宮（みや）へまゐりて、硯（すゞり）とり出でて、書きつけて奉る歌、

いのるぞよ、我（わ）がおもふ事（こと）なるみ潟（がた）、
かたひくしほも神（かん）のまに〳〵。

鳴海（なるみ）がた和歌のうら風へだてずば、
おなじこゝろに神（かん）も受くらむ。

滿（み）つしほのさしてぞ來（き）つる、鳴海潟（なるみがた）、
神やあはれとみるめたづねて。

雨かぜも神のこゝろに任（まか）すらむ、
我が行くさきのさはりあらすな。

通解　二十日、尾張國の下戸といふ宿場を通つて行く。どうしても通らねばならぬ道筋なので、熱田の宮へ參詣して、硯を取り出して、書きつけて奉納した歌、

いのるぞよ、我がおもふ事なるみ潟、
かたひくしほも神のまに〳〵。

（この鳴海潟の干潟をあらはして退く潮も、神樣の御心のまゝである位だから、どゝかその御力に依つて、我が心願の成就致しまするやう、切に御祈り申します。）

鳴海がた和歌のうら風へだてずば、
おなじこゝろに神も受くらむ。

（この鳴海がたが、和歌の浦から吹いて來る風を遠くへだてぬやうに、この鳴海潟のあたりにあらせられる神樣も、和歌を疎じへだて給ふ事がないなら、深く歌道の爲めを思ふ私と同じ心持を以て、私に御同情下されて、我がこの願を受けいれて下さる事だらう。）

滿つしほのさしてぞ來つる、鳴海潟、
神やあはれとみるめたづねて。

（滿潮がこの鳴海潟にさして來るやうに、私もこの熱田神宮をめざしてやつて來ました、神樣も私をあはれと思召してお守り下さる事もあらうかと、それをたよりに致しまして。）

雨かぜも神のこゝろに任すらむ、
我が行くさきのさはりあらすな。

（雨風も神樣の御心任せで、自由になる事でありませうから、どうか私の行くさきに、雨風のさはりのないやう、御守護下さいまし。）

文旨　「下戸といふ驛を行く」といふのが、夫木抄の雜七には「下戸といふ驛をいでて行く」とある。さうすると十九日は下戸に泊つて二十日の朝そこを出立して行つたといふ事になる。原文のまゝでは十九日はどこへ泊つたかがはつきりせぬから、その方がよささうに思ふ。熱田の宮へ奉納した歌は、何れも手前勝手の祈願だが、斯うした心願を持つて寂しく心細い旅を重れてゐる老婆として如何にも無理ならぬ事である。但、歌自體は例の言葉の技巧、理窟の羅列で、少しもしんみりした主觀は出てゐない。

語義　○下戸　一宮驛の南で、今下津村といふ。大日本地名辭書には下津とあつて、「按に下津は古訓オリツなるべし、……津と戸は古言相通じたる例證多し」といつて、本書本文が引用してある。○よきぬ道　避けぬ道の義で、是非通るべき道筋に當つてゐるのをいふ。殘月抄に「傍に枉入らぬ道といふ義也」とあるのに從つて、「本街道からわざ〳〵横道へ入つた道でないのをいふ」と解した書もある、結局は同じやうな事になるが、それでは語としての感じが違ふ。○熱田の宮　熱田神宮。○なるみ潟　尾張國愛知郡鳴海町附近の海上。今は海が埋つてずつと遠くなつてゐるが、昔は鳴海潟と熱田神宮とすぐ接近してゐたのである。こゝは我が思ふ事が成るの「成る」に鳴海潟の「鳴」を掛けてゐる。○かたひくしほ　潟をあらはして引く潮。潮が引き去つてあとに干潟のあらはれるのをいふ。餘り用例の見えぬ語である。恐らく、「なるみがたかた」といふ疊語修辭で、又「かたひく」といふ語の中に「片引く」＝ひいきするといふ思想の慣用語をも兼ねさせてゐるのだらう。その心持を入れて歌意を解くと、「鳴海潟の潟引く潮も神の御心のまゝだから、どうか私に片引いて、我が思ふ事を成就させて下さるやう、お祈り申します」といふ事になる、勿論それほど露骨ではないが、多少そんな氣持も含んでゐるやうに響く歌調である。○神のまに〳〵　神の御心のまゝに。潮のひくのも神の御心のまゝだといふ意。○和歌のうら風へだてずば　和歌の浦から吹いて來る風を遠ざけ隔てないならといふのに、神が和歌の道を疎んじ遠ざけぬならばの意を含めたのである。○おなじこゝろに　和歌の道を大切に思ふ私と同じ心で、即ち和歌の道を思ふ私に同情しての意。○受くらむ　我が祈願を受け納れ給ふ事だらう。○滿つしほの　「の」は「の如く」の意。潮の滿ちる事を「さす」といふ、それで「目指して來た」といふ意の「さす」の序として、「みつ潮の」と言つたのである。○神やあはれとみるめたづれて　「神や哀と見る」の「見る」を「みるめ」（海草の名）の「みる」に掛けた言葉の綾で、神が我をあはれと思ひ給ふ事もあらうかと、私はこの地を指して來たのだといふ意を、潮がみるめを尋れて鳴海潟にさして來るといふ言葉の技巧に結びつけたのである。○神のこゝろに任すらむ　神の御心任せでせう。神樣の御心のまゝにどうでもなりませうからの意。○我が行くさきの　これから行く先々の旅の。「自己の將來の意をもかけてゐる」と解した書もある、さうなると「雨風」の中に世の中の艱難辛苦の意も含む事になつて歌の解としてやゝ立入り過ぎるやうに思ふ。○さはりあらすな　さしさはりのないやうにして下さい。雨風が烈しくて行きなやむ事の無いやうに御願ひするといふ意。

鳴海の潟を過ぐるに、潮干のほどなれば、さはりなく干潟を行く。折しも濱千鳥いと多くさき立ちて行くも、しるべ顏なる心地して、

濱千鳥鳴きてぞさそふ、世の中に
　　あととめむとはおもはざりしを。

墨田川のわたりにこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、はしと足と赤きは、この浦にもありけり。

　　こと問はむ、はしと足とはあかざりし

我が住むかたのみやこ鳥かと。

通解　鳴海潟を通るのに、丁度潮の干てゐる時なので、安々と干潟の上をやつて行つた。恰もその折、濱千鳥が非常に澤山私共のさきに立つて行く、それも何だか我々の道案内をしてゐるといつた風に思はれて、

濱千鳥鳴きてぞさそふ、世の中に
あととめむとはおもはざりしを。

（自分は世の中に跡を止め生きながらへて、斯うした旅をしようとは思はなかつたのに、濱千鳥が鳴いて私を誘ひ、道しるべをしてくれる事である。）

墨田川の邊にこそゐると聞いてゐたが、都鳥というて、嘴と口の赤い鳥は、この海邊にもゐるのであつた。

こと問はむ、はしと足とはあかざりし
我が住むかたのみやこ鳥かと。

（一つものを尋ねよう、あの嘴と足との赤い鳥に。そなたは、飽かで別れて來た我が故郷の都――その都というふ名を持つた都鳥であるのかと。）

文旨　千鳥の歌もつまらぬ言葉の綾で實感に乏しいし、都鳥の歌に至つては、伊勢物語から脱化した愚なる技巧に過ぎない。文の部分にも格別特色はない。

語義　○潮干のほど　潮の干てゐる時。○さはりなく　さしさはりなく、安々と。涙が寄せて來ないからである。○干潟　潮の干てゐる潟。○さき立ちて行く　さきに立つて行く。「飛んで行く」といふのが普通の解だが、「しるべ顔なる心地して」といふ文調からいへば、干潟の上を歩いてゐるといふつもりで書いた文のやうにも思へる。○しるべ顔　道案内をしてゐるやうな樣子。○あととむ　生きながらへる。但、生きながらへて斯うして旅行するといふ心持も含んでゐるやうに思ふ。そして濱千鳥が足跡を止めるの意を掛けた言葉の綾である。○墨田川　東京市の東北を貫流する川。○わたり　あたり、邊。「渡場」といふ解はこゝには當らぬ。○都鳥といふ鳥のはしと足と赤き　嘴と足との赤い都鳥といふ鳥。伊勢物語に、「武藏の國と下總の國との中に、いと大なる川あり。それを墨田川といふ。……白き鳥のはしとあしと赤き、しぎの大きさなる、水の上にあそびつゝ、いをなくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、これなむ都鳥といふを聞きて、名にしおはばいざこと問はむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやと。」云々とある。それに依つて書いたのである。「都鳥」について日本百科大辭典には、「海濱若しくは河邊に棲む。涉禽の一種。みやこしぎともいふ。體軀は鳩よりも稍々大なり。頭・頸より上部一體に純黑、但し腰は胸・腹と共に白し。翼にも大なる白色部あり。嘴長く、その色紅なり。脚も長く、色は淡肉色なり。介類及び蟲類を食とす。四時我國に稀ならず。……東京にて隅田川に浮べる一種の鴎をみやこどりと呼ぶことあるも誤なり。」とある。○こと問はむ　尋ねよう。鳥に向つてお前は我が故郷の都といふ名を持つたその都鳥かどうか尋ねようといふのである。○あかざりし　嘴と足とが「赤」といひかけて、「飽かざりし」と續けた言葉の綾。飽かで立ちわかれたといふ意である。○我が住むかたのみやこ鳥　我が住む方即ち故郷の都といふ意と「都鳥」とを掛けた言葉の綾。

二村山を越えて行くに、山も野もいと遠くて、日も暮れ果てぬ。

はるゞと、二村山を行き過ぎて、
なほするたどる野邊のゆふやみ。

通解　二村山を越えて行くと、山は遠く野は廣々としてゐて、日もとつぷりと暮れて了つた。

はるゝ〳〵と、二村山を行き過ぎて、
なほすゑたどる野邊のゆふやみ。

（長い〳〵二村山の山路を遙々と通り過ぎて、なほ宿にも着かず、野邊の夕闇の中を、更に行く手の道をとぼとぼと辿り行く事である。）

文旨　「山も野もいと遠くて、日も暮れ果てぬ」――夕闇の中を廣々とした野路を辿り行くさまが、簡潔によく現はれてゐる。歌もさらッとして割合すなほにさうした實感が咏出されてゐる。

語義　○二村山　尾張國愛知郡、沓掛邊の岡山の稱。○山も野もいと遠くて　野が廣々と續いてゐて山は遙か向ふの方に見えるさまをいふ。○なほ　なほその上に。○すゑたどる　行く手の道をとぼ〳〵と辿つて行く。「さがしながら行く」といふ解は語義に即し過ぎて却て實感から離れるやうだ。○ゆふやみ　夕方の暗い時。陰暦十五日以後、夕方まだ月の上らない間の暗い時をいふ。

八橋にとゞまらむといふ。暗きに橋も見えずなりぬ。

さゝがにのくもであやふき八橋を、
ゆふぐれかけて渡りぬるかな。

通解　今夜は八橋に泊らうといふ事になつた。八橋についた時は、もう日が暮れて暗いので、名高い橋も見えずにしまつた。

さゝがにのくもであやふき八橋を、
ゆふぐれかけて渡りぬるかな。

（如何にもあぶなげな八橋を、而も夕暮になつて、一入心細い思ひで渡つた事である。）

文旨　八橋は伊勢物語の文句――「三河の國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふ事は、水の蜘蛛手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる」云々といふ文句によつて人口に膾炙してゐる。但し、同じ作者の若い頃の作「うたゝねの記」には、「三河の國八橋といふ所を見れば、これも昔にはあらずなりぬるにや、橋も只一つぞ見ゆる」とあり、更級日記には、「八橋は名のみにして、橋のかたもなく何の見處もなし」とある。こゝの文句にしても、「暗きに橋も見えずなりぬ」とあるのだから、或は事實橋を渡つたのでなくて、歌は、この有名な八橋へ夕方になつて着いたといふのを、伊勢物語の背景で綾なしたのではないかとも思はれる。殘月抄には、八橋に二所あつて、伊勢、古今、古今六帖に見えた八橋と、更級日記、舊本の今昔物語より後のものに見えてゐるのとは所が違ふ。更級以後のは、碧海郡池鯉鮒の宿の東の村里のつゞきにあり、伊勢、古今のは今の矢矧川の川上で、今の所のやうな僅かなせゝらぎではなかつたらしく思へるといふやうな詳細な考證がある。勿論筆者にはそんな事の考はなく、そこを昔の八橋と思つてこんな文句を書いたに違ひない。

語義　○八橋　三河國碧海郡知立町の大字。大日本地名辭書には、「今知立町の東に牛田・八橋の二村あり。今合せて牛橋と改む。八橋と駒場村との間、遇妻川の邊に昔橋ありしと傳へ、土人は駒場の一堆丘の側なる芝生をさして、古の杜若の茂りし跡と說く」とある。○見えずなりぬ　直解すれば「見えなくなつた」であるが、さうすると今迄見えたものが見えなくなつたやうに取れる。こゝは、見えずになつた、即ち見えずに了つたといふ意だ

らう。まして「よくけ見えなくなりました」などいふ解は、歌の方を實義にするために解き曲げたものだといへよう。○くもであやふき　橋の桁や梁を受けるために材木を交叉したものを「くもで」といふ、それを伊勢物語の「水の蜘蛛手に流れ分れて」云々といふ文句に結びつけて、「八橋」の序として殆ど無意義に置かれた潤飾の文義と見てよからう。又殘月抄に引いた和歌童蒙抄五の「くもでとは柱にちがへてゆるがさじと打ちたる木を云ふ也、されど此の八橋はたゞ板を打ちたるやうにてあるなれば、蜘蛛の手はやつあれば、やつといへる心につきてよめるなり」といふ説に從つてもよいと思ふ。但、「板を打ちたるやうにてある」かどうか、そこは又別問題である。○ゆふぐれかけて　夕暮に及んで。「かけて」は橋の緣語のやうに考へられる。

廿一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山とほき原野を分け行く。畫つ方になりて、紅葉いとおほき山に向ひて行く。風につれなき所々、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、青地の錦を見る心地す。人に問へば、宮路山といふ。

しぐれけり、染むるちしほのはてはまた、
紅葉のにしきいろかへるまで。

この山までは、昔見し心地するに、ころさへ變らねば、

待ちけりな、むかしも越えし宮路山、
おなじ時雨のめぐりあふ世を。

山の裾野に、竹のある所に、萱屋の一つ見ゆる、如何にして、何のたよりに、斯くて住むらむと見ゆ。

ぬしやたれ、山のすそ野に宿しめて、
あたりさびしき竹のひとむら。

日は入りはてて、なほ物のあやめも分かぬほどに、わたうどとかやいふ所にとゞまりぬ。

通解　廿一日、八橋を立つて行つた所が、空が實によく晴れてゐる。山の遙かに遠い原の中を踏分けて歩いて行く。晝頃になつて、紅葉の非常に澤山ある山に向つて行く。風が吹いても平氣で散らずにゐる所々は、紅葉の色が變つてもう朽葉色に染まつてゐる。その中に常磐木もまじつてゐて、恰も青地の錦を見るやうな氣がする。人に尋ねたら、宮路山だといふ。

しぐれけり、染むるちしほのはてはまた、
紅葉のにしきいろかへるまで。

（降つては染め、降つては染め、幾度となく染めた擧句は、斯うして紅葉の錦が色を變へて朽葉色になるまで、よくもまア時雨が降つた事だなア。）

この宮路山までは、昔見た氣がする、それに、時節までが同じ頃であるので、次のやうな歌を詠んだ。

待ちけりな、むかしも越えし宮路山、
おなじ時雨のめぐりあふ世を。

（昔時雨の降る頃この宮路山を越えた事があるが、同じ時雨のめぐつて來る頃、斯うして又私が越える、その時節にめぐり逢ふのを、この宮路山も待つてゐてくれたのだな。）

その山の裾野に、竹藪があつて、そこに萱葺の家が一軒見える、それを見て、まアどんなにして、何をたのみに、斯うしてこんな淋しい所に住んでゐる事だらうと思はれる。

ぬしやたれ、山のすそ野に宿しめて、
　　あたりさびしき竹のひとむら。

（山の裾野の、あたり淋しい一むらの竹やぶの側に、居を構へて住んでゐる、あの庵の主は、一體どんな人だらうか、誠にゆかしい思のされる事だ。）

日はとつぷりと暮れてしまつて、いよ〳〵あたりが暗く、物の見分けもつかぬ頃に、渡津とかいふ所に着いて、そこに一泊した。

文旨　宮路山の紅葉を中心とし、裾野の一軒屋を添景とした一日の紀行。文も歌も格別取り立てていふ程の事もないが、さらりとしてゐて眼味はない。昔一度來た事を想起するあたり、もう少ししんみりしてもよささうだが、下手な繰言よりまだこの方がましかもしれぬ。

語義　○山とほき原野　山がずつと遠い――近まはりには山もない、廣々とした野原。○分け行く　踏み分けて行く。但、「草などの間を分けながら行く」といふ實義を伴ふ事は寧ろ稀で、只野や山を歩いて行くといふ場合の常套語になつてゐる。○畫つ方　畫頃。「つ」は「の」の意。○風につれなき　風が吹いても平氣で散らずにゐる。「つれなき」は情こはく、平氣でといふ意で、語の原義通りの用例である。○朽葉　朽葉色。朽ちた落葉の色の意で、赤に黄のまじつた色をいふ。○常磐木ども　「ども」は複數をあらはす終尾詞。○青地の錦　青い地色の中に色々の模樣を織り出した錦。○宮路山　三河國寶飯郡長澤村と赤坂町との間の山。○ちしほ　「しほ」は「入」の字を書いて、色を染めるのに、浸す度數を數へるときの語。從つて「ちしほ」は、幾度も幾度も染めるといふ意。○はて　最後、あげく。○色がへる　色がかはる、色がさめる。雅言集覽に、「下染めする物なれば本の色にかへるこゝろなるべし、轉じてたゞかはる事にもいへるか」とある。○この山までは昔見し心地するに　こゝの「に」は「その上更に」の意。續古今集羇旅の部に、父平度繁朝臣と遠江迄下つた時鳴海の浦で詠んだ歌が出てゐる。その歌は後文「富士の山を見れば」の條に引いてある。その時の旅行の事である。作者は明かに遠江まで來てゐるのに、なぜ「この山までは」といつたか、妙に思はれる。○ころさへ變らねば　季節まで變らぬので。父と共にこゝを通つた時も、丁度今と同じく時雨の降る季節だつたのでといふ意。○待ちけりな　待つてゐた事だな。「な」は咏歎の助詞。○おなじ時雨のめぐりあふ世を　時雨が再びめぐつて來る時節をといふ意と、自分が再びこの山を越える時のめぐつて來る時節をといふ意と、その兩意を兼ねたのである。詞花集に「諸共に山めぐりする時雨かな、ふるにかひなき身とは知らずや」とあり、千載集に「木の葉散るとばかり聞きてやみなまし、もらで時雨の山めぐりせば」とある如く、時雨には「山めぐり」といふ語がよく使はれる、こゝの「めぐりあふ」にも幾分さうした言葉の綾が働いてゐるものと見られる。○裾野　麓の野。○一つ見ゆる　「見ゆるが」（見エルソレガ……ト見エル）の意の連體假止。○如何にして　どうして、どのやうにして。「何故に」の意でなく、どんな風の暮し方をしての意だらう。○何のたよりに　何をたよりにしての意。○斯くて住むらむ　こんなにして――こんな淋しい有樣で住んでゐるのだらう。○見ゆ　見える。見て思はれるの意。○ぬしやたれ　主人はどういふ人か。ゆかしく思ふ心を含めていうた語。○なほ　いよ〳〵、益々。夕方になるとあたりがぼーッとして來る、まして「日は入りはてて」なほ一層、「物のあやめも分かぬほど」といふのである。「日が入つたばかりでなく、その上暗くなつてから」など解しては「なほ」の語感がしつくり出ない。○物のあやめも分かぬ　物の文目（ウマヤ）も分らぬ、物の見分けもつかぬ。○ほど　頃、時分。○わたうど　渡津。三河國寶飯郡。大日本地名辭書驛家鄕の條に、「今下

地町、然菅村にあたるごとし、渡津篠東の東にして、即延喜式の渡津の驛とす」とあつて、本書本文を引用してゐる。

廿二日のあかつき、夜ぶかく、有明のかげに出でて行く。何時よりもものかなし。

すみわびて、月のみやこを出でしかど、
うき身はなれぬ有明のかげ。

とぞ思ひつゞくる。供なる人、「有明の月さへ笠きたり」といふを聞きて、

旅人のおなじ道にや出でつらむ、
笠うちきたるありあけの月。

通解　廿二日の早朝、まだ暗い中に、有明の月の光をたよりに宿を立つて行つた。何時よりも殊に物悲しい感じがする。

すみわびて、月のみやこを出でしかど、
うき身はなれぬ有明のかげ。

（住み憂く思つて、月の都――京都を跡にして旅に出たのであるが、有明の月の光は、やはり憂き我が身を離れずに慕つて來て、悲しい思をさせる事だ。）

といふ風に思ひつゞけた。供につれた男が、「私共ばかりではない、有明の月まで笠を被つてゐる」といふのを聞いて、

旅人のおなじ道にや出でつらむ、
笠うちきたるありあけの月。

（あゝして有明の月が笠を被つてゐるのを見ると、あの有明の月も、我々旅人と同じやうに、旅路に出たものと見える。）

文旨　「住みわびて」の歌は、筆者の主觀として尤もではあるが、しみ〴〵した實感は乏しい。「たび人の」の歌は遊技に過ぎぬ。それより「有明の月さへ笠きたり」といふ直說敍法の文句の方が遙かにいゝ。何でもないやうで、節勁の妙があると思ふ。

語義　○あかつき　明け方。但、こゝは次に「夜ぶかく」とあるから、普通にいふ「あけ方」より更に早い時刻をいうたものと考へられる。○夜ぶかく　夜がまだなか〳〵明けぬ頃、朝暗い內。○有明のかげに　有明の月の光をたよりにして。「有明の月」は、月が空に殘つてゐながら夜の明ける頃の月で、即ち陰曆十六日以後の月である。○いつよりも物悲し　今迄も隨分悲しい思をしたが、今朝は特別に悲しい感じがするといふ意。「物悲し」の「物」は「何となく」といふ思想。○すみわびて　住みづらく困つて、住むのがつらくなつて。「すみ」は「住み」であるが、月の緣で「澄み」にも掛けてゐるのだらう。○月の都　月の世界にある宮殿即ち月宮殿の稱であるが、こゝは京都の事を斯ういうたのである。○うき身はなれぬ有明のかげ　有明の月影が憂き我が身を離れずに旅路まで慕つて來るといふ意。旅に出ても有明の月は我が身につきまとつて悲しい思ひをさせるといふのである。「心悲しいこの身にはやはり故郷京都を慕ふ情がどこ迄もつきそうて來る」とか、「この世の憂さは、何處のはてにゆきましても、この身から離れる事はありませぬ」とかいふ解は、餘り立入り過ぎて原歌の感じから離れると思

ふ。○ともなる人　お供をしてゐる召使の者。○有明の月さへ笠きたり　明方の月まで笠を被つてゐる。「さへ」は原義通りの用法で、「私共は旅の者ゆゑ、笠を被つてゐるに不思議はないが、あれあゝして、お月さんまでお笠を召してゐやしやんす」といつた風の氣持がよく出てゐる。月が笠をきるといふのは、月暈といつて、月のまはりに輪のやうにあらはれる影をいふ。○旅人のおなじ道　旅人の行くのと同じ道。「旅人の」をいきなり「旅人と」と考へて了つても通ずる。

高師の山も越えつ。海見ゆるほど、いとおもしろし。浦風あれて、松のひゞきすごく、浪いとたかし。

わがためや浪もたかしの濱ならむ、
袖のみなとの浪はやすまで。

いと白き洲崎に、黒き鳥のむれ居たるは、鵜といふ鳥なりけり。

しら濱にすみの色なるしまつどり、
筆もおよばば、繪に書きてまし。

通解　高師の山も越えた。海の見える頃、實に面白い景色だ。海邊を吹く風が荒くて、松風の響は物すごく身にしみ入るやうで、涙が非常に高い。

わがためや浪もたかしの濱ならむ、
袖のみなとの浪はやすまで。

（私の袖には、涙の浪の絶えるひまがないので、さうしたわたしのせいで、この高師の濱は、その名の通り浪も高いのであらう。）

眞ッ白い洲崎に、黒い鳥の群つて居るのは、なにかと思つたら、鵜といふ鳥であつた。

しら濱にすみの色なるしまつどり、
筆もおよばば、繪に書きてまし。

（白い濱に、眞ッ黒い鵜がゐるのは、黒白の對照が實に面白い、若し筆が思ふやうになるなら、繪に書いて見たいやうな思ひがする。）

文旨　高師の山を越える所である。概していへば、歌より文の方がすらりとしてゐていゝ。尤も「しら濱に」の方は、凡々たる子供のやうな詠み口の所が、下手な技巧澤山より却ていゝやうに思ふ。

語義　○高師の山　三河國豐橋市の南方に當る一帶の丘陵の稱。大日本地名辭書に、「高蘆鄕の岡嶺にして、大岩山の邊、東海道の古路に專ら此名あり。また遠州白須賀、濱名湖の邊までも及ぼして、廣く高師山と呼ばるゝことあり。」とある。○ほど　ころ。「あたり、附近」といふ解が普通で、內容的にはそれで結構だが、「海見ゆるほど」といふやうに動詞に接した「ほど」といふ語の感じはさうではないと思ふ。○松のひゞき　松風の音。○すごく　物すごく。但、この語は、しん〳〵と身にしみ込むやうな感じを伴ふ場合に使はれる事があつて、こゝにも幾らかさうした氣分が働いてゐるやうである。○わがためや　私のせいだらうか。「私の爲めに同情して」といふ解はこゝには當らぬ。○涙もたかしの濱　「浪も高く」を直ちに「高師の濱」と續けたのである。「高師の濱」は高師の山から見える濱邊を漠然とさう呼んだ言葉だらう。續拾遺集にも、「潮風の音もたかしの濱松に霞みてかゝる春の夕波」といふ歌が見えてゐる。○袖のみなとの涙はやすまで　「袖の湊」は筑前博多の浦。こゝは袖に涙の絶えずかゝるのを、波のさわぐに喩へ、波や袖の緣で、袖の事を「袖の湊」といつたのである。○洲崎　洲が長く

水中に突出してゐる所。○しまつ鳥　鵜の異名。○筆もおよばば　筆が及んだら。これが私の筆で書けるものならの意。○繪に書きてまし　繪に書いて見たいと思ふほど面白い光景だといふ心持と、繪にも書いて見ようにそれが出來なくて殘念だといふ心持と、その二つの漠然と結びついた氣分と見てよからう。「まし」は假設の助動詞で、「む」を強めたやうな趣から、自然願望の心持も含まれるのである。

濱名の橋より見渡せば、鷗といふ鳥、いとおほく飛びちがひて、水の底へも入る。岩のうへにも居たり。

かもめ居る洲崎の岩もよそならず、
浪のかけ越すそでにみなれて。

通解　濱名の橋から見渡すと、鷗といふ鳥が、非常に澤山とびちがつて、水の底へも入るし、又、岩の上にもとまつて居る。

かもめ居る洲崎の岩もよそならず、
浪のかけ越すそでにみなれて。

（鷗の居る洲崎の岩もよそ事でなく、誠に親しみ深く思はれる、丁度浪の打越す岩のやうに、絶えず涙が掛つて濡れてゐる自分の袖を見馴れて居るので。）

文旨　濱名の橋――今日の濱名湖の光景とは違つて、一筋の川で海に通じてゐた、その川の上に架した橋の所の描寫であるが、歌は例の通りの主觀技巧で格別の事もない。

語義　○濱名の橋　濱名湖が今日の如く所謂今切となつて海と通ずるやうになつたのは明應七年――この紀行より二百二十年の後の事で、當時は濱名川を以て海に通じた淡水湖であつた。その川に架した橋が「濱名の橋」で、三代實錄には五十六丈とある。その後屢々造りかへたが、兎に角かなり大きな橋だつたに違ひない。○よそならず　疎くはない、親しみを感ずる。○浪のかけ越すそで　浪がかゝつて上をうちこす袖の意。涙に袖のぬれるのを、浪が岩の上に掛つて越すのに喩へたのである。○みなれて　「水馴れて」（水に浸つて馴れる意）に「見馴れて」を掛けた言葉の綾。

今宵は、引馬の宿といふ所にとゞまる。この所の大力の名をば、濱松とぞいひし。親しと言ひしばかりの人々なども住む所なり。住み來し人の面影も、さまざまに思ひ出でられて、又めぐり逢ひて見つる命のほども、かへすがへす哀なり。

濱松のかはらぬかげをたづね來て、
見し人なみにむかしをぞ問ふ。

その世に見し人の子孫などよび出でて、あひしらふ。

通解　今晩は、引馬の宿といふ所に泊つた。この所の總括的の名をば、濱松といふのであつた。こゝは以前一寸親しくおつき合ひしたといふ程度の人々なども住んでゐる所である。すうーッとこゝに住み來つた人々の樣子も、いろ〳〵と思ひ出されて、斯うして又再びめぐり逢つて見る事の出來た自分の命の程も、思へば實に感慨無量である。

濱松のかはらぬかげをたづね來て、

見し人なみにむかしをぞ問ふ。

（私は今、この濱松の地に、濱邊の松の昔と變らぬ蔭――昔ながらのその面影を尋れて來たのであるが、昔見た親しい人は故人となつて、こゝにゐないので、止むを得ず、濱邊に打寄せる波に向つて、昔の事を尋れる次第である。）

その當時見た人の子や孫などを呼び出して、さまざまもてなしてやつた。

文旨　引馬の宿に泊つた記事で、こゝは懷舊の情が主調になつてゐる。多くの註書は「濱松とぞいひし」「したしと言ひしばかりの人々」に於ける「し」を全然看過して、「總名を濱松といふ」「親しいといへばいふ程の人々」といふやうな解に一致してゐるやうだが、さうなるとこゝの文は「し」といふ過去の助動詞――往事を追想するのを基調とするこの助動詞についての異例といふ事になる。明かに異例だと斷りもせずにこの助動詞を現在扱ひにするのは不用意ではあるまいか。自分はこの文に於ける以上二つの「し」は、後の「住み來し人」「見し人」の「し」と同じく、過去意識が作者のアタマに働いて出て來たものと思ふ。即ち「濱松とぞいひし」も「したしといひしばかりの人々」も、共に恐らく其の昔父と來た時の事を想起して、「さう〳〵、こゝの總名は濱松といつたッけ」「特別にどう斯うではありませんが、その頃一寸親しくおつき合ひしたといふ程度の方々」といふ氣持で書いた文だと思ふ。さう考へる事によつて、全文が懷舊情調として仲々用意深い文――或は自然にその情調のにじみ出た文となると思ふのである。

語義　○引馬の宿　遠江濱名郡引馬村引馬坂の地。大日本地名辭書に、「太平記には、延元三年、北條時行匹馬驛に於て、今川範氏と合戰の事見ゆ。天正中德川氏が此に修築したるより、專ら庄名の濱松を以て呼び、引馬の名遂に亡ぶ。蓋し引退の語は兵家の忌みて不祥と爲す所なれば、濱松を以て之に易へしなり。」とある。○大方の名大體の名、總名。○親しと言ひしばかりの人々　親しいといつた程度の人々。こゝの「ばかり」は「だけ」の意でなくて、「程」の意。○住み來し人の面影　あれ以來ずつとこゝに住んで來た人の樣子。一別以來自分は久しぶりで再びこゝに來たのだが、その人々はずうーッとこの地に住んでゐた、その人々の樣子といふ意。次の歌や文句ではそれ等の人々は今は亡き人になつた趣であるが、然し中には生存してゐた人もあつたらう、兎に角この文句だけで、いきなり「年來住み來つた人の中で、今は故人となつた人の面影」と解する如きは、どうしても文義の辭躅と考へられる。○めぐりあひて見つる命のほど　自分がこんなに長生をして、嘗て分れたこの土地に再び來て相見る事が出來たといふ事。「めぐり逢ひ」は分れたものにめぐりめぐつて再び逢ふ意。「見つる」は昔來たこの土地、親しかつた人々、その子孫などを漠然と含めていうたのだらう。「命のほど」は命の程度――長生しなければそんな事は出來ぬ、斯んな年になるまで斯うして生きてゐればこそ、又逢ひ見る事も出來たのだといふ、さうした考を現はした言葉である。○哀なり　感慨が深い。○濱松のかはらぬかげ　濱邊の松の昔のまゝの蔭。表面上「かげ」は「蔭」であるが、裏面には、濱松の地の昔ながらの面影の意も含まれてゐる。即ち「曾遊の地に來て見れば、風光は昔と變りはないが、その當時見た人はゐない、いつも變らず打寄せる波に向つて、昔の感懷を訴へるのみだ。」といふのが、この歌の眞趣であらう。○見し人なみに　昔見知つた人が居ないので。「なみに」は「無み」（ないので）から「波に」をつゞけた言葉の綾。○むかしをぞ問ふ　昔の事を尋れる。歌としての眞意は上述の方だらう。○その世に　その時分に。父と來遊したその頃の事をいふ。○あひしらふ　もてなす、款待する。

廿三日、天龍のわたりといふ。舟に乘るに、西行が昔も思ひ出でられて、いと心ぼそし。組み合せたる舟たゞひとつにて、多くの人のゆききに、さしかへるひまもなし。

水の泡のうき世に渡るほどを見よ、

早瀬の小舟さをもやすめず。

通解　二十三日、天龍の渡といふ渡場に掛つた。舟に乘るにつけて、自然と西行が昔この渡場で武士から無體な目に逢つたといふ事も思ひ出されて、實に心細い。二艘を組み合はせた舟たゞ一つあるだけで、多くの人の往來に、棹さして往復する間も無いほど忙しい。

水の泡のうき世に渡るほどを見よ、
早瀬の小舟さをもやすめず。

（水の泡のやうな、はかない浮世に人が渡つて行くその有樣を御覽なさい、例へばこの川の早瀬の小舟の、棹を休めてゐるひまもないやうに、それは實に歸齪として、情ないものである。）

文旨　天龍の渡で西行の昔を思ひ出したといふだけで格別の情味もない。歌は例によつて單なる理窟技巧に過ぎない。

語義　○天龍のわたりといふ　天龍は天龍川。遠江國濱名磐田二郡の境を流れてゐる大きな川。「わたり」は渡し場。藪から棒に「天龍のわたりといふ」とあるのは少し變だが、さればというて、「天龍のわたりといふ舟」とつづけて、「天龍の渡といふ所の舟」の義に解するといふ說も無理だらう。「廿三日、今日は天龍の渡といふにさし掛つた。」といふ氣持と見てよいと思ふ。○舟に乘るに　「乘るに」の「に」は「時に・場合に」の「に」と見るよりも、「につけて」の「に」と見た方がこの場面にしつくりすると思ふ。○西行が昔　西行物語に、「遠江の國天の中川（天龍川のこと）のわたりといふ所にて、武士の乘りたりける船に便船をしけるに、人多く乘りて、船危くやありけむ、あの法師おりよおりよといひけれども、渡のならひと思ひて、聞入れぬ樣してありけるに、情なく鞭をもて四行を打ちけり。血など頭より出で、世にあへなく見えけれども、西行少しも怨みたるけしきなくして、手を合せ、船よりおりにけり。」云々とあるのをいふ。○組み合せたる舟　二艘の舟を組み合せたといふのだらう。蓋し多數の人を一度に運ぶために、前の舟と後の舟とをもやつて引いて行くやうにしたものと思ふ。「木や竹を組みあはせて作つた舟、即ち筏舟の類」などいふ解もあるが、文義上からもさうは取れないし、渡場の實情から考へても隨分非常識な解だと思ふ。○ゆきき　往來。○さしかへるひまもなし　棹さして往復するひまもない程忙しい。○水の泡の　水の泡の如く。「浮世」にかゝる序詞で、消えやすくはかないといふ思想をあらはしてゐる。千載集、釋敎に、「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の浮世にめぐる身にこそありけれ」とある。○うき世に渡るほど　人がこの世に暮して行くその苦しい有樣。「ほど」は細かくいへば、「どれほどつらい思ひをして渡るものかといふその程合」の義。「渡る」は早瀨を渡る小舟の緣語にもなつてゐる。○早瀨の小舟　川の早い瀨を渡る小さい舟。○さをもやすめず　棹をやすめるひまも無いほどせはしい。

今宵は、とほつあふみ見付の國府といふ所にとゞまる。里あれて物おそろし。傍に水の井あり。

たれか來てみつけの里と聞くからに、
いとゞ旅寢の空おそろしき。

通解　今夜は、遠江國見付の國府といふ所にとまつた。この里は荒れて淋しい所で、物恐しい感じがした。傍に水の井がある。

たれか來てみつけの里と聞くからに、
いとゞ旅寢の空おそろしき。

（こゝは見付の里といふ事なので、何だか誰かが來て自分を見付け出すといふ里のやうな氣がして、一入旅寢が空おそろしく、氣味のわるい思がせられる。）

文旨　見付といふ名から「たれか來てみつけの里」などと洒落れる、實につまらぬ遊技である。强ひていへば、訴訟の旅だから敵方の者に見付けられて危害でも加へられはせぬかといふ心配が、地名と結びついて出て來た實感の發露だとも見られようが、それは餘程厭嫌目に見た見方で、歌そのものにそんなしんみりした情調は無い。「傍に水の井あり」なども頗るなげやりの文句である。

語義　○とほつあふみ　遠江。「とほつあはうみ」の約、後には更につゞまつて「とほたふみ」となつた。昔京都を中心にして、琵琶湖を「近つ淡海」といひ、略して「淡海」となり、更につゞまつて「あふみ」（近江）といふ國名になつた。それに對して濱名湖を「遠つ淡海」といつたのが、「とほたふみ」（遠江）といふ國名の起源である。○見付の國府　遠江國磐田郡見付町と中泉町との境に國府の趾がある。その邊を當時斯う稱したのだらう。「國府」とは王朝以降國司の廳の所在地。「コフ」はコクフの音便。○里あれて　村里が荒廢してゐて。○水の井　水が湧き出てゐる所をいうたのだらう。○誰か來て見付の里　「見付」といふ固有名詞を「見付けること、見とがめること」といふ意の普通名詞に結びつけた言葉の洒落。諸家の註が「見張る所」の義といふに一致してゐるが、「誰かゞ來て自分を見付ける」といふやうに語の普通義に解して何の差支もない筈である。○聞くからに　聞くので、聞くために。○いとゞ　いよ〳〵、一入、一層。○空おそろし　空おそろしい、何となくおそろしい。

廿四日、ひるになりて、さやの中山越ゆ。ことのまゝとかやいふ社のほど、紅葉いと盛におもしろし。山蔭にて、嵐も及ばぬなめり。ふかく入るまゝに、をちこちの峯つゞき、ことやまに似ず、心ぼそくあはれなり。ふもとの里に菊川といふ所にとゞまる。

越えくらす麓の里のゆふやみに、
まつかぜおくるさやの中山。

あかつき起きて見れば、月も出でにけり。

雲かゝるさやの中山越えぬとは、
みやこに告げよ、ありあけの月。

川音いとすごし。

渡らむと思ひやかけし、あづま路に
ありとばかりはきく川の水。

通解　廿四日、晝時になつて、小夜の中山を越えた。ことのまゝとかいふ神社の邊は、紅葉が眞盛りで、面白い眺めだ。山の蔭であるために、こゝまでは嵐も屆かぬものと見える。山深く這入つて行くにつれて、遠近の連峯のさまが、外の山とは趣を異にして、心細く物あはれである。麓の村里に菊川といふ所があつて、そこに一泊した。

越えくらす麓の里のゆふやみに、
まつかぜおくるさやの中山。

（山路で一日日が暮して、夕ぐれに麓の里についたが、その夕闇の中へ、今日越えて來た小夜の中山から、物淋しく松風を吹き送つて來てゐる。）

明け方に起きて見ると、もう月も出てゐる。

雲かゝるさやの中山越えぬとは、
　みやこに告げよ、ありあけの月。

（雲のかゝつてゐる、峻しい小夜の中山も、悲なく越えたと、有明の月よ、何卒都の人々に告げてくれ。）

菊川の流の音が、物すごく身にしみ渡るやうに聞える。

渡らむと思ひやかけし、あづま路に
　ありとばかりはきく川の水。

（關東にあるとだけは兼々聞いてゐたが、斯うしてこの菊川の水を實際に渡らうとは、ほんとに思ひも掛けなかつた事だ。）

文旨　有名な小夜の中山だけに、かなり詳細に書いてはゐるが、格別の特色もない。歌は前二首が割合すなほで、この紀行中ではまづ上の部に屬する。最後の一首は「ありとばかりはきく川の水」など、例によつて言葉の遊技だが、これも遊技としては厭味の少い方である。

語義　○ひるになりて　正午頃になつての意だらう。○さやの中山　「小夜の中山」とも「佐夜の中山」とも書く。後世はサヨノナカヤマと呼んでゐる。遠江小笠郡日坂（掛川の東二里）から榛原郡菊川に至るまでの坂路。○ことのまゝ　「任事」と書く。遠江國小笠郡東山口村字八坂にある八幡宮の事で、古は已等乃麻知（ことのまち）神社というた。○嵐もおよばぬなめり　嵐もこゝ迄は吹いて來ないものと見える。紅葉が散らずにあるのを見て斯ういつたのである。○なちこち　遠近、あちこち。○峯つゞき　連峯、連山。○ことやま　外の山。○あはれなり　物哀れだ、哀調がある。○ふもとの里に菊川といふ所ありその所に　「麓の里に菊川といふ所ありその所に」の略。○菊川　遠江國榛原郡金谷町の大字で、古くは東海道の宿驛であつた。小夜の中山の麓、金谷の西、菊川といふ川の西岸にある。○越えくらす　山路を越えて一日が暮す。○月も出でにけり　二十四日の事であるから、寢る時には月は出てゐなかつたが、明け方起きて見たらいつの間にか月も出てゐたといふのである。○雲かゝる　雲がおほひかゝる。山が高くて雲がかゝつてゐるといふ意。○みやこに　都の人々に。○川音　川の水音。川は菊川である。○渡らむと思ひやかけし　この川を渡らうとは思ひも掛けなかつた。「や」は反語。○あづま路　關東筋。京都から陸奥に至るまでの道筋の古稱。○ありとばかりはきく川　あるとだけは聞いてゐた菊川。菊川の「菊」に「聞く」を掛けた言葉の綾。

廿五日、菊川を出でて、今日は大井川といふ川をわたる。水いとあせて、聞きしには違ひてわづらひなし。河原幾里とかや、いとはるかなり。水の出でたらむおもかげ、おしはからる。

思ひ出づる都のことは大井川、
　いくせの石のかずもおよばじ。

通解　廿五日、菊川の宿を出立して、今日は大井川といふ川を渡る。水が非常に涸れて淺くなつてゐて、兼々聞いてゐたのとは違つて、渡るのに何の困難もない。河原の廣さは幾里とかいつて、非常に廣いものだ。この河原に水が一杯出たらどうだらうと、その時の有樣が思ひやられる。

思ひ出づる都のことは大井川、

いくせの石のかずもおよばじ。

（大井川を渡るにつけても思ひ出す都の事は非常に多くて、この大井川の數々の瀬にある石の數もなほ及ばぬ事であらう。）

文旨　大井川の記事はさらりとして、割合によく實感が出てゐるが、歌に至つては愚の骨頂、「思ひ出づる都のことは大井川」などなつては、言葉の遊技も、少し馬鹿々々し過ぎるやうである。

語義　○大井川　遠江國小笠郡と駿河國志太郡との境を流れてゐる川。○あせて　淺くなつて。水が涸れて淺くなるのをいふ。○聞きしには違ひて　聞いたとは違つて。大井川は渡るに困難だと兼々聞いてゐたが、その評判とは違つてといふ意。○わづらひ　困難、なやみ。○河原幾里とかや　河原が幾里あるとかいつて。こちらの岸から向ふの岸に行く間の河原が幾里あるといふのだらう。事實幾里といふ程は無いが、大げさに河原二里とか三里とかいうてゐたのだらう。○はるかなり　廣い、遠い。○水の出でたらむ面影　水の出た時の樣子。以前出た時の意ではない、出たらどんなだらうとその時の樣子の意。○おしはからる　思ひやられる、想像される。この「らる」は自然の働きを示す。○都のことは大井川　「多い」に「大井」を掛けた言葉の綾。○いくせの石のかずもおよばじ　幾つもの瀬の石の數も及ぶまい。大井川には瀬がいくつもあつて、そこには無數の石があるが、その數も、我が都の事を思ひ出す數の多いのには及ぶまいといふ意。

宇都の山越ゆるほどにしも、阿闍梨の見知りたる山伏行き逢ひたり。「夢にも人を」など、昔をわざとまねびたらむ心地して、いとめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくも覺ゆ。いそぐ道なりといへば、文もあまたは得書かず、たゞやむごとなき所ひとつにぞおとづれきこゆる。

わが心うつゝともなし、宇都の山、
　ゆめにも遠きむかし戀ふとて。
蔦楓しぐれぬひまも、宇都の山、
　なみだに袖の色ぞこがるゝ。

通解　恰も宇都の山を越える時に、慶融阿闍梨の見知つて居る山伏にばッたり行き逢つた。かの業平がこの宇都山で見知り越しの山伏に逢つて、都への手紙をことづけるといつて、「駿河なる宇都の山邊のうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり」と詠んだといふ、その昔の事をわざと眞似たやうな氣がして、甚だ珍らしく、面白くも、感深くも、又優美にも思はれた。その山伏は、道をいそぐというたので、手紙も澤山書く事が出來ず、たゞどうしても捨て置けない所一ヶ所だけにおたよりを申上げた。

わが心うつゝともなし、宇都の山、
　ゆめにも遠きむかし戀ふとて。

（私は夢にも遠い昔を戀ひ慕つて居るやうな始末でありますから、斯うして今宇都の山を越えるにつけても、心の内は更にうつゝといふ感じは無く、丸で正氣でゐるとも思へぬ程に亂れて居ります。）

蔦楓しぐれぬひまも、宇都の山、
　なみだに袖の色ぞこがるゝ。

（宇都の山の蔦や楓に時雨のふらぬ間でさへ、私の袖に涙のかゝらぬひまはありませんので、その涙の爲に袖の色はすつかり變つてこげたやうになつて居ります。）

文旨　宇都の山で偶然山伏に逢ふ、丸で伊勢物語の昔をわざ〳〵眞似たやうだといふのである。「夢にも人を」云々の文句は一寸面白いが、伊勢物語のこの條は頗る有名なもので、その歌も人口に膾炙してゐるのに、なぜ「夢にも人の」（新釋に採つたもの）又は「夢にも人に」（流布本の形）とある所を「夢にも人を」と書いたか、そこには疑問を挾む餘地がある。然しこの文だけではそれを的確に斷ずべき資料は無い。思ふに、筆者の記憶の錯誤か、或は自作の歌に「ゆめにも遠き昔戀ふとて」とあるその下心で、わざ〳〵「夢にも人を（思ふなりけり）」といふやうな氣持に原歌を轉化してゐるのか、二者その一であらう。歌は二首とも格別の特色もない。

語義　○宇都の山　宇津谷峠ともいふ、駿河國志太郡と安倍郡との間の山。○ほどにしも　丁度その時分に。「しも」は強勢の助詞。○阿闍梨　筆者と同行の慶融阿闍梨。○夢にも人を　伊勢物語（新釋本）に、「行き〳〵て駿河の國に至りぬ。宇都の山に至りて、我が入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かづらは茂りて、もの心細く、すゞろなる目を見る事と思ふに、修業者あひたり。かゝる道にはいかでかおはするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人のもとにとて、文書きてつく。駿河なる宇都の山べのうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり。」とあるのをいふ。○まれびたらむ　まれをしたやうな。○めづらかに　如何にも珍らしく。○なかしくも　面白くも。○あはれにも　感深くも。「悲しい」といふよりも情趣深く感じたといふ方。○やさしくも　優美にも。如何にも優雅な情調だといふ趣の語。○いそぐ道　いそぎの道、道を急いでゐる旅。○やむごとなき所　止むを得ない所。苟も幸便のある以上、どうしてもこゝだけは捨て置けぬといふ所の義。「貴い所」といふ意味にも取れる言葉だが、こゝはその方ではあるまい。○おとづれきこゆる　たよりを申上げる。○うつゝともなし宇都の山　「うつつともなし」は現實といふ氣がせぬ、正氣の心地がないといふ意。戀しさに心もぼんやりしてゐるといふのである。「宇都の山」は現在自分の越えてゐる山の名をあらはすと同時に、「うつゝ」の重音とした言葉の綾である。○ゆめにも　夢の中にも。○遠きむかし　「都の事をかくいつたのだ」といふ解もある。手紙に添へた歌としてはさういふ解がしつくりするが、言葉自體からは伊勢物語の昔といふやうに考へられる。その兩意を兼ねて漠然と解して置いて然るべきだらう。○蔦楓しぐれぬひまも　蔦楓にはよく時雨の降りかゝるものだが、その時雨の降らぬ間にも。○なみだに袖の色ぞこがるゝ　涙が掛るために袖の色が變る。「こがる」は焦るで、色が變ってこげたやうになるのをいふ。上掲伊勢物語の「蔦かづら」の所が「蔦楓」となつた本もある。蓋し筆者はその文句を踏んでこの歌を作つたものだらう。

今宵は、手越といふ所にとゞまる。某の僧正とかやののぼり給ふとて、いと人しげし。宿借りかねつれど、さすがに人のなき宿もありけり。

通解　今夜は、手越といふ所に泊つた。何某の僧正とかが京にお上りになるといふ事で、こゝは非常に人が立て込んでゐる。宿を取るのに困つたが、それでもやはり幸ひ客の無い宿もあつた。

文旨　手越の一夜、何でもない事だが、その頃の僧正などの事々しさが窺はれる。文もさらりとして惡くない。

語義　○手越　駿河國安倍川の西岸。○僧正　僧官の第一位。○人しげし　人が立て込んでゐる。御供の人とか拜みに來た人とかで、宿が一杯だつたといふのである。○宿借りかれ　宿をとるのに困る。○さすがに　それでも、さうはいふものの。○人のなき　泊り客のない。

廿六日、藁科川とかや渡りて、息津の濱にうち出づ。「なく〳〵出でし跡の月影」など、まづ思ひ出でらる。畫立ち入りたる所に、あやしき黄楊の小枕あり。いと苦しければ、うち臥したるに、硯も見ゆれば、

まくらの障子に、臥しながら書きつけつ。

なほざりにみるめばかりをかり枕、

むすびおきつと人にかたるな。

通解　二十六日、藁科川とかいふ川を渡つて、息津の濱に出た。定家卿の「こととへよ、おもひおきつの濱千鳥、なく〳〵出でし跡の月影」などいふ歌が、まづ以て思ひ出される。畫時に立ち入つて休んだ所に、粗末な黄楊の小枕がある。疲れて誠に苦しいので、その枕をして一寸横になつた所が、傍に硯も見えたので、枕元のからかみに、寢ながら次のやうな歌を書きつけた。

なほざりにみるめばかりをかり枕、

むすびおきつと人にかたるな。

（つひ一寸枕をかりてかりれをしたといふまでの事、深い契を結んでおいたなどと、枕よ決して人に語るな。）

文旨　息津の濱で、一寸うたゝれをしたといふだけだが、歌はかなり色ッぽい。尤も「みるめばかりなかり枕」「むすびおきつ」など、例の言葉の遊技で、座興といふ程度に過ぎないものである。

語義　○藁科川　駿河國安倍川の支流。但、この川は靜岡の西方の峽谷にあたり、志太郡の北方であるから、手越に泊つて興津へ出る道筋としては變におもふ。當時の道筋は藁科川が安倍川と合流する邊にあつたものか、それとも安倍川を藁科川と呼んでゐたのか、何れにしても「とかや」といふ通り曖昧な記憶を辿つていゝ加減に書いたものだらう。○息津の濱　駿河國庵原郡、今の興津町一帶の海濱で、清見潟などもその内に含まれてゐるものと考へられる。○なく〳〵出でし跡の月影　新古今集、羇旅部、藤原定家の歌に、「こととへよ、思ひおきつの濱千鳥、なく〳〵出でし跡の月影」とあるをいふ。歌意は、私が思をあとに殘して、なく〳〵別れて來た故郷の月よ、どうかわが旅のうさを慰めるためにたづれて來てくれといふのである。「思ひおきつ」の「置きつ」を「興津」に掛け、更にこの地名に縁のある「濱千鳥」を出して、「なく〳〵」の序としたのである。○あやしき　賤しい、粗末な。○黄楊の小枕　黄楊で作つたまくら。木枕かといふ説もあるが、「をまくら」とした本もあるから、もとから「小枕」の字で傳つてゐたのだらう。○いと苦しければ　ひどく疲れて苦しかつたから。○まくらの　枕もとの、頭の方の。○障子　今は主として紙張りの所謂障子の事であるが、古くは室の隔てに建てる建具の總稱で、單に障子といへば、多くは襖（からかみ）の事である。○なほざりにみるめばかりをかり枕　「みるめ」に「見る目」と「海松布」（海草の名）とを掛け、「かり」に「借」と「假」と「刈」とを掛けた事は明かであるが、而もこの歌意は二樣に考へられる。即ち、「を」を普通の目的格として、

なほざりにみるめばかりをかり枕、（深き契ヲ）むすびおきつと人にかたるな

と考へれば、つひ一寸した假寢で、深く契を結んだのではないといふ意になり、「を」を反戻と考へると、

なほざりにみるめばかりを、かり枕むすびおきつと人にかたるな

となつて、只一寸逢ひ見ただけで、かりの枕をかはしたのではないとなる。「みるめかる」に戀の意を寓するのは普通の事で、例へば、新古今に、「隱レ名戀といへる心を」といふ題で、「蜑のかるみるめを波にまがへつゝ名草の濱なれぬ磯の蜑人」とあるのは實際に契を結んだ方の意味、同じ新古今の「逢ふ迄のみるめかるべき方ぞなきまだ浪りた意とか掛けてゐる關係上、前のやうに見るがいゝと思ふ。本書の歌は、「かり枕」の中に假寢の意と枕を借の遊技で、單なる座興といふに過ぎない。さうなると浮氣の戀といふ事になるが、勿論言葉

○むすびおきつ　「結び置きつ」に「息津」（興津）といふ國有名詞を掛けたのである。

暮れかゝるほど、清見が關を過ぐ。岩越す浪の、白き衣をうち着するやうに見ゆる、いとをかし。

清見潟年ふる岩にこと問はむ、
浪のぬれぎぬいくかさね着つ。

ほどなく暮れて、そのわたりの海ちかき里にとゞまりぬ。浦人のしわざにや、隣よりくゆりかゝる烟、いとむつかしきにほひなれば、「夜の宿なまぐさし」といひける人の詞も思ひ出でらる。よもすがら風いと荒れて、浪たゞ枕のうへに立ちさわぐ。

ならはずよ、よそに聞き來し清見潟、
あらいそ浪のかゝる寢ざめは。

通解　日が暮れかゝる頃に、清見が關を通つた。岩の上を打越す浪が、恰も白い着物を岩に着せるやうに見える、それが實に面白い。

清見潟年ふる岩にこと問はむ、
浪のぬれぎぬいくかさね着つ。

（清見潟に年を經たふるい岩に尋ねるが、御身はこれまでに浪の濡衣を幾襲きたか、さぞ澤山着た事だらう。）

問もなく日が暮れて、その邊の海近くの里に泊つた。濱邊の人のしわざだらうか、隣からくすぶり掛つて來る煙が、實にいやなにほひなので、「夜の宿なまぐさし」といつた昔の人の言葉も思ひ出される。夜通し風がひどく荒れて、浪はたゞもうすぐ枕もとで、盛に立ちさわいでゐる。

ならはずよ、よそに聞き來し清見潟、
あらいそ浪のかゝる寢ざめは。

（荒磯の浪が、身に打ちかゝるやうな、こんな寢ざめは未だ嘗て經驗した事はない、然るに今斯うして、よそ事のやうに聞いてゐた清見潟に泊つて、始めてさうしたわびしい寢覺めをする事である。）

文旨　清見が關の歌、海邊の宿の一夜、そしてその歌、格別の事もないが、文の方は割合さらりと書かれてゐる。歌は二首とも聊か無理な技巧だが、然しいやみのある歌ではない。

語義　○清見が關　駿河國庵原郡清見寺の邊だらう。その邊は古の關所の跡だつたから斯ういうたので、十六夜日記の當時關所があつたといふのではない。○岩越す浪　岩の上を乘り越す浪。○見ゆる　「見えるそれが」の意の連體假止。○なかし　面白い、趣がある。○年ふる岩　年を經た古岩。○こと問はむ　尋ねて見よう。○浪のぬれぎぬ　前に「岩越す浪の、白き衣をうち着するやうに見ゆる」と書いた心持で、浪が岩の上に掛るのを斯いつたのである。「濡衣」は無實の罪名を蒙ることにいふ語で、この歌にもその意が含まれてゐる。恐らく「清見潟」と「濡衣」の對照上、「清い身が無實の罪」といふやうな氣持を織込んでゐるのだらう。○いくかさね　幾襲、幾枚。○そのわたり　その附近。○海ちかき里　「海が近い里」とも「海に近い里」とも考へられる。○浦人　海邊に住んでゐる人。漁夫とか蜑とか限定した思想の言葉ではないが、內容的には自然さういふ事になる。○くゆりかゝる　くすぶり掛つて來る。○むつかしきにほひ　いやな匂。胸のむかつくするやうな、何ともいへぬいやなにほひといふ感じ。○夜の宿なまぐさし　白氏文集卷三、縛戎人と題する詩に、「朝飡飢渴費杯盤、夜宿腥臊汚茵席」とあるのをいふ。諸註「朝喰」とあるは殘月抄活字本の誤を踏襲したものだらう。○涙たゞ枕のうへに立ちさわぐ　すぐ枕許で涙がどーくと打つてゐる。「涙がたゞ枕の上にさわぐかと思はれる」といふやうな

解は、殊更に條理だてやうとして却て文の趣を損れてゐると思ふ。○ならはずよ　經驗した事がない、つひぞこんな思をした事はない。この一首の解として、「これまではたゞ外事として聞いて居た事ですが、清見潟の荒磯波がぶつかつて來るやうなこんな厭な寢覺は、嘗て經驗した事がない」といつた風の解が一般に行はれてゐるが、それでは、外の所の荒磯波の寢覺は經驗したが、よそ事に聞いてゐた清見潟の荒磯波の寢覺は經驗しないといふ事になつて、「ならはずよ」と「よそに聞き來し」とが頗る變になる。思ふに作者は、「あらいそ浪のかゝる寢ざめは ならはずよ」といふのを中心思想にして、そこへ「よそに聞き來し清見潟」を織込んで、かなり複雜な內容を一首の歌にしたものであらう。○よそに聞き來し　今までよそ事として聞いて來た。今自分は斯うして清見潟に來て泊つたのであるが、今迄斯んな事があらうとは夢にも思はず、清見潟などいふ名を聞いても、そんな所は自分には全く無關係のよそ事だと思つてゐたといふのである。「清見潟は波が荒いと聞いてゐた」などと誤解してはならぬ。○あらいそ浪のかゝる寢ざめ　荒磯の浪の打ちかゝるといふのと、「斯る」(このやうな)との兩意を掛けたのである。「斯る寢ざめ」とは、こんな佗しい寢ざめの意。「寢ざめ」は睡眠からさめる、即ち目があくのを一般にいふ語で、夜中にとか、朝にとか、限定した思想の語ではない。

富士の山を見れば、烟も立たず。むかし父の朝臣に誘はれて、「いかになるみの浦なれば」など詠みしころ、遠江の國までは見しかば、「富士の烟の末も、朝夕たしかに見えしものを、いつの年よりか絕えし」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

誰が方になびきはててか、富士の嶺の
烟のすゑの見えずなるらむ。

古今の序の詞まで思ひ出でられて、

いつの世の麓の塵か、富士の嶺を、
雪さへたかき山となしけむ。

朽ち果てし長柄の橋をつくらばや、
富士の烟も立たずなりなば。

今宵は、波の上といふ所に宿りて、荒れたる音、更に目もあはず。

通解　富士の山を見ると、烟も立つてゐない。昔父の度繁朝臣に連れられて旅に出て、「いかになるみの浦なれば」などいふ歌を詠んだ頃、遠江の國までは見たので、「あの頃は、富士の烟の末も、朝夕たしかに見えたのに、いつの年から絕えたのか」と聞いて見たら、はつきり答へる人さへない。

誰が方になびきはててか、富士の嶺の
烟のすゑの見えずなるらむ。

(誰の方になびききつてか、斯うして富士の嶺の烟の末が見えなくなるのでせう。)

古今の序の詞——「高き山も、麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれるが如くに」云々とか、「今は富士の山の烟も立たずなり、長柄の橋もつくるなり」云々とかいふ詞まで思ひ出されて、

いつの世の麓の塵か、富士の嶺を、
雪さへたかき山となしけむ。

（いつの世の麓が積り積つて、この富士の嶺を、雪までも高く積つた、こんな高い山としたのであらう。）

朽ち果てし長柄の橋をつくらばや、

富士の烟も立たずなりなば。

（富士の烟ももう立たなくなつたなら、序手の事に、くさりきつて了つた長柄の橋も新しく造りたいものだ――古今集の序に、今は富士の山の烟も立たなくなり、長柄の橋も造るといつて、世の變遷の烈しい例に引いてゐる。私の若かつた頃は、たしかに見えた富士の烟も、今は立たなくなつてゐる、それを見ると、同じ例に引かれた長柄の朽ちはてた橋も、新しく造りかへたい氣がする。）

今夜は波の上といふ所に泊つて、烈しく荒れてゐる波の音のために、一晩中少しも眠れなかつた。

文旨　富士山は時々噴火しては熄んだものらしい。それで筆者が若い頃父と共に遠江まで來た時には確かにその烟の末が見えたが、今は全然見えないといふのである。それについて古今集の序の文句を思ひ出したといふのは極めて自然だが、歌は例に依つて理窟の技巧に過ぎない。僞作の疑を挾む人もあるが、一般に筆者當年の作と認められる。「うたゝれの記」に、假住の所――そこの記事と本書引馬の宿の條とによれば、蓋し濱松附近だつたらう――のさまを述べて、「日數ふるまゝに都の方のみ戀しく、晝はひめもすに眺め、夜は夜すがら物をのみ思ひつゞくる。荒磯の波の音も、枕のもとに落來る響には、心ならずも夢の通路絶え果てぬべし。

心からかゝる旅れになげくとも、夢だにゆるせおきつ白波。

不二の山はたゞこゝもとにぞ見ゆる。雪いと白くて心細し。風になびく煙の末も、夢の前にあはれなれど、上なきものはと思ひけつ心のたけぞものおそろしかりける。」と書いてある。それから「今宵は、波の上といふ所に宿りて、荒れたる音、更に目もあはず。」といふ文句は、前節の「ほどなく暮れて、そのわたりの海ちかき里にとゞまりぬ。……よもすがら風いと荒れて、涙たゞ枕のうへに立ちさわぐ」と重複する事になつて、文の書き方が一寸をかしいが、二十六日の一日の内の事だから、「海ちかき里」即ち「波の上」と解釋する外ない。恐らく筆者のアタマに、涙の音が烈しくて寢られなかつた事と、富士の烟の見えなくなつた事と、その二つが猛烈に印象された結果、こんな書き方となつて現はれたのであらう。

語義　○朝臣　「あそん」は「あそみ」の音便。天武天皇の十三年十月に詔して八色の姓を定められたその中の一つで、五位以上の人につけた尊稱である。○いかになるみの浦なれば　續古今集羇旅部に「思ふこと侍りけるころ、父平度繁朝臣とほたふみの國にまかれりけるに、心ならず伴ひて、鳴海の浦を過ぐとてよみ侍りける」と詞書して、「さてもわれいかになるみの浦なれば思ふかたには遠ざかるらむ」とある歌をいふ。その作者名は、安嘉門院右衞門佐とある、それがこの書の筆者阿佛尼の前名である。「うたゝれの記」には「さてもわれ」の五字が「これやさは」となつてゐる。一首の意は、「さても私は、どうなつて行く身の上なれば、斯うして戀しく思ふ都の方からは遠ざかつて行く事だらう」といふのである。○さだかに　たしかに、はつきりと。○だに　「さへも」といふ意だが、「問へば、さだかに」といふ言葉に對して、しつくりしない使ひ方である。○誰が方になびきはてしか　烟を人に見なし、あれはまア誰の方になびいてしまつた事やらといつたのである。○見えずなるらむ　見えなくなるのだらう。事實からいへば、「見えなくなつたのだらう」であるが、「誰の所へ行つてしまつて斯うして見えなくなるのだらう」といふやうな辿り心地から見れば、「なりけむ」より「なるらむ」の方が情味がある、從つて解も原歌に順應して置く方がいゝと思ふ。○古今の序の詞　通解に引いた文句で、更にその前後を詳悉すれば、「遠き處も出で立つ足もとよりはじまりて、年月をわたり、高き山も、麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれるが如くに、この歌もかくの如くなるべし」と「今は富士の山の烟も立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く

人は、歌にのみぞ心を慰めける」との二文である。○雪さへたかき山　山自體の高い上に更に雪なども高く積つた山。○朽ち果てし長柄の橋　長柄の橋は攝津國長柄川に架した橋で、容易に新しく作り改める事が無かつたために、古歌に古い物の例に引かれる。例へば、古今集雜歌上に、「世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり」とあり、同書誹諧歌に、「なにはなる長柄の橋もつくるなり今はわが身を何にたとへむ」などある。○立たずなりなば　これも事實に即していへば、「立たずなれば」(立たなくなつたから)とあるべき所だが、「立たなくなつたなら」「立たなくなつたといふなら」といふ辿り氣分で「なば」といつたのだらう。○波の上　文旨の所で述べた通り、清見潟の邊の海近い里の名であらう。○荒れたる音　波のあれてゐる音。○更に　一向、少しも。○目もあはず　眠れない。

廿七日、明けはなれて後、富士川わたる。朝川いとさむし。數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。

さえわびぬ、雪よりおろす富士川の
かは風こほる冬のころもで。

通解　廿七日、夜が明けはなれて後に、富士川を渡つた。朝の川は實に寒い。數へて見ると、十五の瀬を渡つたのであつた。

さえわびぬ、雪よりおろす富士川の
かは風こほる冬のころもで。

(富士の雪から吹きおろして來る富士川の川風に、冬の旅衣の袖が氷りつくやうで、しん〳〵と身にしみる寒さが、實につらい事であつた。)

文旨　富士川を渡る趣、「朝川いと寒し」など、簡勁の妙があるが、「かぞふれば十五瀬をぞ渡りぬる」に至つては頗る唐突で解釋に苦む。古來普通に行はれてゐる說は、京都を出てから渡つた川瀨の數が十五だといふのである。こゝの文を卒讀した感じからいふと、富士川の瀨を十五渡つたといふやうに思へるが、いくら河原が多くて川瀨が數々に分れてゐるにしても、十五瀨は餘り事實に副はぬやうに思へる。尤も大日本地名辭書に引いた新撰國志には、「往昔は河道岩本より東に奔り、傳法村の南を過ぎ、川成島の邊に於て海に入れり、されば東岸と西岸、岩淵と蒲原の間、渺茫たる洲渚を爲し、數派の水奔放して、變遷常なく」として本書本文を引いてゐる。何れにしても甚だ不十分な書き方だと思ふ。

語義　○富士川　甲斐から駿河に入り、富士、庵原二郡の境を流れてゐる大きな河。○朝川　朝の川といふだけの意。○さえわびぬ　寒さが身にしみてつらかつた。○雪よりおろす　富士の雪の上から吹きおろして來る。「川風」の形容詞的修飾語。○ころもで　袖。

今日は、日いとうらゝかにて、田子の浦にうち出づ。海士どものいさりするを見ても、

心からおり立つ田子の蜑衣、
ほさぬうらみと人に語るな。

とぞ言はまほしき。

通解　今日は、空がからッと晴れて、誠にのどかな日和で、田子の浦に出た。漁夫どもの魚を取つてゐるのを見ても、

心からおり立つ田子の蜑衣、
　ほさぬうらみと人に語るな。

（農夫が田におり立つやうに、この田子の浦の漁夫は、自分の心から求めて海におり立つのだから、濡れた着物をほす間がないなどと、人に向つて恨み言などをいふな。）

と言ひたく感じた。

文旨　「日いとうらゝかにて」の實感が幾分か歌の上にも働いてゐるやうだが、要するに「おり立つ田子」を「田子の浦」に結びつけた言葉の遊技に過ぎない。

語義　○日いとうらゝかにて　天氣がよく晴れて長閑で。こゝの「日」はその日の空模樣を漠然というた語。「にて」を「から」と解した本があるが、それはいけない。長閑な日和に歩いて行つて田子の浦に出たといふ文調と考へられる。○田子の浦　大日本地名辭書には、「今蒲原町の管内、吹上の邊の舊名とす、即富士川の河口西岸に當る」として本書を引いてゐるが、こゝは西から東に向つて富士川を渡つた後に田子の浦の記事があるのだから、それでは地理的に理窟が合はない。同書に、「然るに何の世よりか、富士郡吉原の南を田子浦と呼び、蒲原なるは其名を失へり」とある。本書に謂ふのは、その新しい方の田子の浦だらうと思ふ。○うち出づ　出た。萬葉集卷三の「田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」といふ有名な山部赤人の文句を思つて書いた言葉かも知れないが、文調からいへば、わざ〳〵出たとは考へられぬ。富士川を渡つて、それからうらゝかな日和に、いゝ氣持で歩いて行つて、自然田子の浦に出たといふ筋だらうと思ふ。○海士　海濱に住み、魚鹽の業を營むもの。○いさりする　魚をすなどる。○心から　自分の心から、自ら求めて。○おりたつ　おりて行く。「蜑衣」の縁で「織り裁つ」の意を兼れてゐる。○田子　農夫。田子の浦の地名に掛けた言葉の綾。○蜑衣　漁夫の衣。○ほさぬうらみ　かわかす間もなく、いつも濡れてゐるといふ恨。「恨」に着物の縁で「裏見」を掛けたらしくもある。

伊豆の國府といふ所にとゞまる。いまだ夕日殘るほど、三島の明神へまゐるとて、詠みて奉る。

あはれとや三島の神の宮柱、
　たゞこゝにしもめぐり來にけり。
おのづから傳へし跡もあるものを、
　神は知るらむ、しきしまの道。
尋ね來てわが越えかゝる箱根路を、
　山のかひあるしるべとぞ思ふ。

通解　伊豆の國府（今の三島）といふ所に泊つた。まだ夕日の殘つてゐる頃、三島明神へ參るといふので、次の三首の歌を詠んで奉つた。

あはれとや三島の神の宮柱、
　たゞこゝにしもめぐり來にけり。

（三島の神樣も、私の心根をあはれと思つて見て下さる事だらうと、その一念で、遙々故郷を離れてこゝに廻つて參つた次第であります。）

おのづから傳へし跡もあるものを、
神は知るらむ、しきしまの道。

（和歌の道には、自然正しく傳へた跡も殘つて居ります。即ち我が家は、その正傳でありますもの、神樣はよくその事を御承知で、どこ迄も御守り下さる事と存じます。）

尋ね來てわが越えかゝる箱根路を、
山のかひあるしるべとぞ思ふ。

（遙々と尋ねて來て、これから越えようとする箱根路をば、その嶮しい山路に幾多の峽のある通り、私に取つてもわざ〳〵やつて來た甲斐があつて、必ず訴訟にも勝つ所の道しるべと思ふ次第であります。）

文旨　三島の明神に捧げた歌、三首とも訴訟に對する自己の祈願の意を詠じたもので、例によつて言葉の技巧ではあるが、割合に厭味は少いやうに思ふ。

語義　○伊豆の國府　伊豆の國の國司廳の所在地、今の三島町。○三島の明神　三島町に在り、今官幣大社。○あはれとや三島の神　三島の神もあはれと見給ふだらう。「あはれとや見る」の「見」と「三島」の「三」とかけた言葉。○宮柱　宮殿の柱。伊非諸、伊非冊の二神が、宮柱をめぐつて契り給うたといふ故事によつて、下の「めぐり」の緣語としたのである。○たゞこゝにしもめぐり來にけり　この句を上に置いて、一首の意を「私は故郷をはなれてこゝまでめぐつて來たが、三島の神も私を哀と思うて見て下さることでせう」と解する說が一般に行はれてゐるやうだが、それでは「たゞこゝにしもめぐり來にけり」の「たゞ」「しも」「にけり」の語感がにじみ出して來ない。だから私は、「三島の神もあはれとや見給はんと、われはたゞこゝにしも廻り來にけり」といふ歌意と見たいと思ふ。○おのづから傳へし跡　自然と傳へて來た跡。私の家には歌道が父祖以來傳つて殘つてゐるといふ事をいうたものであるが、さればというて、この一首の意を、「我が家には、和歌の道が父祖以來自然と傳つた跡が殘つてゐるのを、神は御存知でありませう。何卒お守り下さりませ」といふ風に解したのでは、「おのづから傳へし跡もあるものを神は知るらむ」といふ表現に忠實でないと思ふ。私は一首の意を、「敷島の道にはおのづから傳へし跡もありて、我が家はその跡なるものを、神は知りて守らせ給ふらむ」といふやうに見たいと思ふ。○しきしまの道　和歌の道。○箱根路　箱根山は駿河、相模、伊豆三國の交界に横はつてゐる。路はその峯巒を越えて、伊豆の三島から相模の酒匂川の川口に至る所謂箱根八里の嶮である。○山のかひある　「かひ」は峽即ち山と山との間の稱で、それに「效がある」――訴訟の效があるの意を掛けたのである。○しるべ　道しるべ、手引。

廿八日、伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ、

たまくしげ箱根の山をいそげども、
なほ明けがたきよこ雲のそら。

足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり。

ゆかしさよ、そなたの雲をそばだてて、
よそになしぬるあしがらの山。

通解　廿八日、伊豆の國府を出立して、箱根路に掛つた。まだ仲々夜の明けぬ頃だつたので、たまくしげ箱根の山をいそげども、なほ明けがたきよこ雲のそら。

（箱根の山ないそいで行くが、横雲の掛つた東の空は、まだ仲々容易に明けさうもない。）

足柄山は道が遠いといふので、斯うして箱根路にかゝつたのであつた。

ゆかしさよ、そなたの雲をそばだてて、
　よそになしぬるあしがらの山。

（その方面に雲がすつと立つて、姿も見えぬやうに、よそになつて了つた足柄山が、誠にゆかしく思はれる事だ。）

文旨　第一の歌は、「たまくしげ箱根の山……明けがたき」などいふ言葉の技巧は例の通りだが、割合に感じのよい、さらりとした歌である。第二の歌は裏現に無理があつて、意味がはつきりしない。その爲めに「語義」の所で詳悉するやうに、解釋上殆ど全く相反したやうな說も立つのである。

語義　○玉くしげ　「箱根」の「箱」に掛つた枕詞。一般に「ふた」「み」「あく」等の枕詞としても用ひられる。が、こゝは「箱」に掛つて、「たまくしげ箱……明け……」といふやうに緣語をなしてゐる。○よこ雲のそら　夜明がた、東の空に横に雲のたなびいてゐるのをいふ。○足柄山　相模、駿河二國の境に跨る山。古くは官道が箱根山の北を迂廻して足柄山を越えたのであるが、箱根路が通ずるやうになつてからは、その方が近道になつたのである。○ゆかしさよ　奥ゆかしく、慕はしく思はれる事よ。○そなたの雲をそばだてて　その方の雲を聳え立たせて。「そなたに雲が聳えたつて」といふのを他動詞の修辭にしたものと思ふ。「何が峙たせたのか」といふ理窟からいへば、「箱根路が」とでも答へる外ないが、作者のアタマにはさういふ意識は餘り働かず、今箱根路を行くにつけて、足柄が殊更ゆかしく思はれるといふ心持と、折柄雲が掛つてゐて足柄の方がよく見えないといふ實景と――之は餘程鼠屁目に見た方で、事實は見える見えぬが問題でなかつたかも知れぬが、その二つが結着いて斯ういふ表現になつたものと思ふ。殘月抄に、「欹てかたぶくるよし也、山の名のあしがらにあしき人をよせて、そなたの惡しき雲をそばだてかたぶくることのゆかしきと也」と解してゐる。その系統を引いて、「そばだつとはそばへかたよせるないふ」などと解し、從つて一首の意を、「彼方の雲を片隅におしのけてしまつて、きれいな姿に立つてゐる足柄山はなつかしいことである」とか、「あちらの方の雲を押しのけ片よせて、あしきものをよそにして遠ざけてしまつた足柄山のゆかしい事よ（一首の意、雲をあしきものにたとへ、暗に爲氏に比したのである）」とか解した書がある。然し「そばだつ」は、「枕をそばだつ」「耳をそばだつ」などいふ類で、そばだつやうにする意であつて、一方に片よせる――おしのけるなどいふ意味ではない。山が高く立つのが「そばだつ」である以上、雲の立つのも「そばだつ」でいゝ筈、それを他動詞にすれば、「雲をそば立てて」になる。山のそばに雲をそばだてれば山の姿は見えなくなる。見えないから「ゆかしさよ」と感ずるのである。「ゆかし」は見たい聞きたい――どんなだらうかと追求する感じの語である。枕草子の「とくゆかしきもの」の條でも見れば、その趣はすぐ分る筈。それを「きれいな姿に立つてゐる足柄山はなつかしい」など解するのは餘りにも語感を無視し過ぎたものと思ふ。○よそになしぬるあしがらの山　雲によそにされて姿も見えぬ足柄山がゆかしいといふのである。卽ちこの一首は「そなたの雲をそばだててよそになしぬる＝あしがらの山ゆかしさよ」といふ筋の歌と考へられる。「足柄」に「惡し」を掛けたといふのは、この作者の歌として一應首肯されなくはないが、然しこの一首に於て、そこ迄入つて見る必要はないと思ふ。まして「あしき雲＝爲氏」などはどうしても立入り過ぎてゐる。佐野保太郎氏は、古來の諸解に反對して「彼方（むかう）の方の雲を立ち起らせて、惡（あ）しといふ名の足柄山を外（よそ）にしてしまつたのは、實にゆかしいことでございます」と解してゐる。足柄が雲で見えないといふ點では私の考と一致するが、「あしといふ名の足柄山をよそにしてしまつたのは實にゆかしい」といふ解は、全然私の考に反してゐる。「ゆかしさよ……よそになしぬる足柄の山」といふ調子をすなほに味つて見て戴きたい。

いとさかしき山を下る。人の足もとゞまりがたし。湯坂とぞいふなる。辛うじて越え果てたれば、また麓に早川といふ川あり。まことに早し。木の多く流るゝを、いかにと問へば、海士の藻鹽木を浦へ出さむとて流すなりといふ。

あづま路の湯坂を越えて見渡せば、
　しほ木ながるゝ早川のみづ。

通解　非常に嶮しい山を下りて行く。人の足も踏み止り兼れる程だ。この坂を湯坂といふのである。やつとの思ひで越えてしまふと、また麓に早川といふ川がある。名前の通りほんとに流れが早い。その川に木が澤山流れてゐるのを、どうしてかと聞いたら、濱の者の藻鹽を焚く木を海邊に出さうとして流すのだといふ。

あづま路の湯坂を越えて見渡せば、
　しほ木流るゝ早川のみづ。

（關東の湯坂を越えて見渡すと、流れの早い早川の流れに、藻鹽木が澤山流れてゐる。仲々壯快な眺めだ。）

文旨　早川に流れる藻鹽木といふ一寸變つた題材であるが、歌は凡の凡なるもの、無技巧はいゝが、これでは散文と何の違ひもない。

語義　○さかしき　嶮しい。○湯坂　箱根の蘆の湯から鷹栖山を經て湯本に下る坂路。○早川　蘆の湖から出て、箱根火口の北を流れ、小田原の西で海に入る川。○海士の藻鹽木　海士が焚く所の藻鹽木。「海士が流す」といふ文の筋ではあるまい。「藻鹽」は海藻に幾度も潮水を掛けて鹽分を含ませ、これを燒いて水に溶かし煮つめて作つた鹽の稱で、「藻鹽木」はその海藻を燒くための薪である。○しほ木　藻鹽木の略稱。

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに、とまるべき所とほし。伊豆の大島まで見渡さるゝ海面を、いづことかいふと問へど、知りたる人もなし。海士の家のみぞある。

海士の住むその里の名も白浪の
　寄する渚にやどやからまし。

丸子川といふ川を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所にとゞまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

通解　湯坂から濱邊に出て、日はもう暮れかゝるのに泊るべき所はまだ遠い。伊豆の大島まで見渡される海邊を、こゝは何といふ所かと尋ねたが、知つてゐる人もない。たゞ海士の家ばかりがあつた。

海士の住むその里の名も白浪の
　寄する渚にやどやからまし。

（海士の住んでゐる、其の名もしらぬ里――白浪の打寄せるこの濱邊の里に、今宵一夜の宿をからうか、さてさて淋しい事ではある。）

丸子川といふ川を、非常に暗い夕闇の中に、とぼ〳〵と辿り渡つた。今夜は酒匂といふ所にとまつた。いよ〳〵明日は鎌倉へ這入らうといふ事である。

文旨　「その里の名も白涙の」など例の通り言葉の技巧で、歌としての品格頗る乏しい。丸子川も平凡。只「明日は鎌倉へ入るべしといふなり」は、短い飾らぬ文句の中に、ほつとしたやうな氣分がにじみ出してゐる。

語義　○海面　海上といふ義が普通だが、こゝは海邊の義に使はれてゐる。さうした用例も勿論ある。この濱邊は上の「浦」と同地點をいうたものと考へられるから、この前後の文意を「この海邊は伊豆の大島まで見渡されるゝ景色であるが、そこを何といふ所かと問うても知つてゐる人もない」と解してもよいと思ふ。さうすると、「海面を」の「を」は「なるを」といふ心持になる。○いづことかいふ　何といふ名の所かといふ意。○その里の名も白涙の　その里の名も知らぬといふ言葉を「白涙」にいひかけたのである。諸家の解が「その里の名も何といふのか知らないが」といふのに一致してゐる。僅かの事だがこゝに「が」といふ言葉を使ふのは原歌の趣に副ふまい。「名も知らぬ里に泊る」と「白涙の寄せる渚に泊る」と二つを掛けて淋しい旅の氣分を出したのがこの歌の山だらうから。○丸子川　鞠子川とも書く。今は酒匂川といふ。小田原の北東の所で海に入る川。○暗くて　くらい中を。○たどり渡る　足もとがよく見えないで、とぼ〳〵と渡るといふ意。「さぐりさぐり渡つた」といふ解は語義上勿論正解だが、語感上善解とはいひにくい。手でさぐるといふ實感が伴ふからである。○酒匂　相模國足柄下郡の古驛。○明日は鎌倉へ入るべしといふなり　「いよ〳〵明日は鎌倉へ這入りますね」と供の者などが勇み立つていふのを聞いて、作者がそれを自分の文句にして書いた筆致であらう。「明日はいよ〳〵鎌倉へ行き着くのだと人々は申されます」といふ解もあるが、それなら原文の終が「とぞいふ」などとありたく思ふ。

廿九日、酒匂を出でて、濱路をはる〴〵と行く。明けはなるゝ海面を、いとほそき月出でたり。

浦路行く心細さを浪間より

渚に寄せかへる浪のうへに霧たちて、數多ありつる釣舟見えずなりぬ。

あま小舟漕ぎ行くかたを見せじとや、
浪に立ちそふ浦のあさぎり。

都とほく隔り果てぬるも、なほ夢の心地して、
立ち離れよもうき浪はかけもせじ、
むかしの人のおなじ世ならば。

通解　廿九日、酒匂を出て、濱邊の路を遙々とやつて行つた。明けはなれる海面から、非常に細い月が出た。

浦路行く心細さを涙間より
出でて知らするありあけの月。

（涙間から細い有明の月が出て、恰も寂しい海邊傳ひにやつて行く旅の心細さをしみ〴〵思ひ知らせるやうな感じがする。）

波打際に寄せてはかへる涙の上に霧が立つて、そこらに澤山ゐた釣舟が見えなくなつて了つた。

あま小舟漕ぎ行くかたを見せじとや、
涙に立ちそふ浦のあさぎり。

（海士の乘つてゐる小さな舟の漕ぎ行く先を人に見せまいといふのか、海邊の朝霧が波の上に立ち添うて、す

つかりかくしてしまつた事だ。）

段々と旅の日數を重ねて、都から遠く隔つて了つたのも、何だかやはり夢のやうな氣がして、次の歌を詠んだ。

立ち離れよもうき涙はかけもせじ、
むかしの人のおなじ世ならば。

（なつかしい昔の人――亡夫爲家卿の存生のまゝの世であつたなら、斯うして都を立ち離れて、子供等にうき艱難をさせるやうな事は決してあるまいに、思へば悲しい次第である。）

文旨　いよ〳〵東路の旅の結末で、これからは都からの通信が主題になるのである。紀行の結末として、簡明な三つの文も仲々いゝ調子だし、三首の歌も割合にさらりとしてゐる。

語義　○濱路　海邊の路。○海面を　この「を」はやゝ不鮮明な使ひ方で、「に」の義かとも思へるが、次の歌にも「涙間より」とあるから、「海面ないとほそき月出でたり」の呼應として「より」の意に解してよからう。○浦路　海邊の路。○立ちそふ　寄りそふ。「そひ加はる。涙が立つ上に、更に霧が立ち添ふ」といふ解もあるが、一首の趣から見て少し立入り過ぎると思ふ。○なほ　やはりの意。○立ち離れ　自分が家郷の都から離れて、こんな遠方まで來て。○よもうき涙はかけもせじ　決してうき目にあはせる事はしない。子供等に難儀をかけることは決してなかつたらうといふ意。「よも」は口語の「よもや」「まさか」といふよりは強い感じの語。○むかしの人　亡夫爲家をさす。○おなじ世ならば　その同じ世なら。「同じくこの世に生存してゐるならば」といふ解は、内容的には不都合はないが、語義そのものからはどうかと思ふ。「むかしの人の」の「の」は領格の「の」で、その同じ世即ち存命のまゝの世といふ風に考へた方が語義としては自然だらう。

あづまにて住む所は、月影の谷とぞいふなる。浦近き山もとにて、風いとあらし。山寺のかたはらなれば、のどかにすごくて、浪の音、松の風たえず。都のおとづれ、いつしかにおほつかなき程にしも、宇都の山にて行き逢ひたりし山伏のたよりにことづけ申したりし人の御許より、たしかなる便につけて、ありし御返とおぼしくて、

旅衣涙をそへて、うつの山
しぐれぬひまもさぞしぐるらむ。

ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの
月やおくれぬかたみなるべき。

都を出でしことは、神無月十六日なりしかば、いざよふ月をおぼしめし忘れざりけるにやと、いとやさしくあはれにて、唯この返事ばかりをぞ、又きこゆる。

めぐりあふ末をぞ頼む、ゆくりなく
空にうかれしいざよひの月。

通解　東國鎌倉に於ける住所は、月影の谷といふのである。濱邊近くの山の麓で、風が非常に荒い。山寺のそばなので、如何にも靜かに森閑としてゐて、涙の音や松風の響が絶えず聞える。都からの便が、いつとなく自然

に待遠しく感ぜられて來た頃、宇都の山で行き逢つた山伏の便に託して手紙を差上げた御方から、確かな便に託して、あの時の御返事と思はれて、次の歌を下された。

旅衣涙をそへて、うつの山
　しぐれぬひまもさぞしぐるらむ。

（うき旅の悲しさ、涙までもふりそへて、しぐれがちな宇都の山のしぐれぬ間でも、あなたの旅衣にはさぞ時雨の絶え間がない事でせう。）

ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの
　月やおくれぬかたみなるべき。

（ふと空にうかれ出た十六夜の月――あなた様が思ひもよらず都を離れて旅にお立ち遊ばされたのは、忘れもせぬ十六夜の月の晩でしたが、その十六夜の月こそ、いつも私の身から離れぬ、おなつかしいあなた様の御形見で御座いませう。）

私が京都を立つたのは、十月十六日であつたので、その夜の十六夜の月を今もお忘れにならぬのかと、その御心が誠に優雅に感深く思はれて、唯その歌に對する御返事だけを又申上げた。

めぐりあふ末をぞ頼む、ゆくりなく
　空にうかれしいざよひの月。

（あの十六夜の月の空にうかれ出るやうに、私は思ひもよらず空にうかれ出は出ましたが、やがてまた都に歸つて、再びあなた様に廻りあふ日を頼みにして待つて居ります。）

文旨　以下都からの通信が主題になつてゐる。本節は月影の谷における住居の有様を略敍し、それから宇都山で山伏に託した手紙の返事と、それに對する筆者の返歌とを擧げてゐる。何れも取立てていふ程のものではない。

語義　○あづま　東國。京都から東方にあたる諸國を總稱する語であるが、こゝは特に鎌倉を指していつたのである。○月影の谷　極樂寺の境内で、阿佛尼屋敷の名が殘つてゐる。○浦近き山もと　海岸に近い山の麓。極樂寺は稻村ヶ崎のそばに在る。○山寺　極樂寺をいふ。○のどかにすごくて　「のどか」は如何にも靜かで心の落着く氣分をいふ。「しづか」とありたい所だといふ説もあるが、徒然草に「心のまゝに茂れる秋の野らは、畳きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり」とあるのと同じ趣で、決して異例ではない。「に」はッシテの意。「すごく」はシーンとして淋しさが身に滲み入るやうな心持をいふ。○都のおとづれ　都からの音信。○いつしかに　これには二樣の解があつて、一は「いつかいつかと」と解し、一は「いつとはなしに」と解する。次に「おぼつかなき」（待遠しい）と出てゐるから、「いつかいつかと」と解した方がしつくりするが、或書のやうに「何時しかには何時しかとの意」などと斷ずるのは聊か亂暴だらう。原文の「いつしかに」を假に「いつしかと」と改めて文の筋を立てて見れば、「都のおとづれいつしか（あらん）とおぼつかなき程にしも」である。これを「都のおとづれいつしか（あらん）におぼつかなき程にしも」として文が成立するか否かを考へれば分る筈である。「都のおとづれいつしかに」までを一束にして、「都のたよりはいつかいつかといふ風に」と解してもよささうだが、それは德川期の平民文學にありさうな調子で、この文の場合には適用しにくい。「いつしかに」の用例としては、紫式部集に「しのゝめの空きりわたりいつしかに秋のけしきに世はなりにけり」とあり、長秋詠藻に「いつしかに降りそふ今朝の時雨かな露もまだひぬ秋の名殘に」とあり、六百番歌合に「いつしかに通ふ心の今はさは嬉しかるべきしるべともがな」とある。これ等何れも「いつの間にか」の意である。「いつかいつかと」といふやうに待遠しい意に取つてよい用例は見當らぬ。上述する所の不條理を押してこゝ一つを異例とするにも

及ぶまい。従つて、こゝは吉川氏が「到着の當座は何かにまぎれてさうではなかつたが、落ちつくに従つていつしか都のたよりが待遠しく感ずるやうになつたの意」と言つてゐるやうに見る外あるまいと思ふ。○おぼつかなき程にしも　待遠しく感ずる時分に。「程」は頃の意。「しも」は强勢の助詞で、恰もさうした時にの意。○たしかなる便につけて　確實な幸便があつたのでそれに託して。○ありし御返　前に差上げたあの手紙に對しての御返事。「ありし」は過去の事を指して「あの」「例の」の意に使ふ慣用語。宇都の山の條に「蔦楓しぐれぬひまも宇都の山涙にそでの色ぞこがるゝ」とある、その歌に對する返歌だといふのである。即ちこゝの文の筋は、「ありし御返とおぼしくて」は次の一首に掛け、第二首についてはその次の文で説明してゐる形である。○おぼしくて　思はれて、見えて。○旅衣涙をそへて　旅衣に時雨が掛るその上に涙を添へて。○しぐれぬひまもさぞしぐるらむ　時雨の降らぬ間も、旅衣には涙が時雨のやうにふり掛つてさぞ濡れてゐるであらう。○ゆくりなく　思ひもよらず、不意に。○あくがれ出でし　浮れ出た、さまよひ出た。阿佛尼が旅に出たのを、月が空に出たのに掛けたのである。「あくがる」は心の浮れる意であるが、さればといつて、「うき〳〵と旅に出た」とか「心おちつかずさまよひ出た」とかいふ直譯解は、こゝの情調にぴッたり來ない。○おくれぬかたみ　常に身についてゐて離れぬ記念物。○いざよふ月をおぼしめし忘れざりけるにや　十六夜の月を思ひ忘れ給はなかつたのか。その夜が十六夜であつた事を今も覺えてゐて下さるのかといふ意。「おぼし」は「思ひ」の敬語である。「おぼしめし忘れざりける」は口語にすれば結局「お忘れにならなかつた」といふ事になる。○やさしくあはれにて　その人の心根が優美に思はれ從つて感の禁じ難いものがあるといふ思想。「やさしく」について「その心根をやさしいと思ふ」と解し、「あはれ」を「いとほしい」と解した書もあるが、こゝは口語のやさしい即ちおだやかな情合を持つてゐるといふ心持よりも、その夜の月を忘れずそれに託して歌を詠んだその心のみやびさをいうたものと見る方が自然だらう。○この返事　この歌――第二の方の歌に對する返事。○きこゆる　申上げる。「きこえし」の現寫法。○末、後日、將來。○頼む　頼みに思ふ、あてにする。○空にうかれしいざよひの月　空にうかれ出た十六夜の月。「うかる」も「あくがる」と同義。我が身を十六夜の月に喩へた修辭で、結局の歌意は、私は都を離れて旅に出ましたが、再びあなたにめぐりあふ日を期待して居りますといふのである。

前の右兵衛督の御女、歌よむ人にて、勅撰にもたびたび入り給へり。大宮院の權中納言ときこゆ。歌のことゆゑ、朝夕まうし馴れしかばにや、道のほどのおぼつかなさなど、おとづれ給へる文に、

はるゝと思ひこそやれ、旅衣
　なみだしぐるゝほどやいかにと。

返事に、

おもひやれ、露も時雨もひとつにて、
　山路わけ來し袖のしづくを。

このせうとの爲兼の君も、おなじさまに、おぼつかなさなど書きて、

故郷はしぐれにたちし旅衣、
　雪にやいとゞ冴えまさるらむ。

かへし、

旅衣（たびごろも）うらかぜ冴えて神無月（かんなづき）
　しぐるゝ空にゆきぞ降りそふ。

通解　前の右兵衛督爲教卿の御娘は、歌人であつて、お歌は勅撰集にも度々お入りになつてゐる。この方は、大宮院の櫻中納言と申上げる。歌の事で、朝夕親しくおつき合ひ申上げたからか、道中の氣づかはしさなど、御たより下された手紙の中に、

はるゝ〳〵と思ひこそやれ、旅衣
　なみだしぐるゝほどやいかにと。

（旅の物悲しさに、涙が時雨のやうに旅衣にふりかゝる時の、あなたの御胸の中はどうあらうかと、遠く離れた都にゐて、はる〳〵と御身の上を思ひやつて氣遣つて居ります。）

その返歌として、

おもひやれ、露も時雨もひとつにて、
　山路わけ來し袖のしづくを。

（どうぞ御察し下さい、山路を踏分けて來た私の旅衣には、露も時雨も――まして涙は申す迄もなく――皆一緒にふり掛つて、びッしより濡れた袖のしづくが、まアどんなにかひどい事で御座いませう。）

この方の兄さんの爲兼の君も、やはり同じ趣に、私の道中の氣づかはしさなど書いて、

故郷はしぐれに立ちし旅衣、
　雪にやいとゞ冴えまさるらむ。

（あなた樣は、故郷の都を時雨の寒々と降るなかにお立ち遊ばされたのですが、今は冬も段々深くなつてまゐりましたから、旅のお召は、雪の爲めに一入冴えまさつて、どんなにか寒い悲しい思ひを遊ばす事でせう。）

この歌への返しは、

旅衣うらかぜ冴えて神無月
　しぐるゝ空にゆきぞ降りそふ。

（濱邊の風は、しん〳〵と旅衣に冴えきつて、時雨の降る十月の空に、更に雪まで降りそはり、ほんとに堪へがたい寒さで御座います。）

文旨　亡夫爲家の孫――筆者には義理の孫に當る二人との贈答の歌である。格別の事もないが變な技巧がなくて割合にすなほに出來てゐる。但し概して答歌は異なる鸚鵡返しの慣習内から出てゐない。

語義　○前の右兵衛督　爲教。爲家の子、爲氏の弟で、阿佛尼の繼子である。「右兵衛督」は右兵衛府の長官。「前の」は今現官でないのをいふ。○御女　名は爲子。○勅撰にもたび〳〵入り給へり　この人の歌は、續拾遺、新後撰、玉葉、風雅、新千載、新拾遺、新續古今等に出てゐる。勅撰集に載る事は歌人として非常に名譽の事だつたので、特に斯う書いたのである。○大宮院の櫻中納言　大宮院に仕へて宮中に於ける呼び名を櫻中納言といふたので、世間の人が斯く呼んでゐたのである。「大宮院」は後嵯峨天皇の皇后で、御名は姞子（よしこ）。○歌のことゆゑ　歌の事のために。○朝夕まうし馴れしかばにや　常に親しく馴れてゐたからだらうか。「まうし」は習慣的に添つた語。「しかば」は「たから」の意、それに疑問推量の「にや」が添つたのである。○道のほど　道の間、道中。○おぼつかなさ　不安さ、氣がかりさ。「あなたの御道中御さはりは無かつたかと氣掛りで心配でたまりません」といふ風の事が手紙に書いてあつたといふのである。○なみだしぐるゝほどやいかにと　涙が時雨の降るやうに落ちる時のあなたの心はどうであらうか、さぞつらい事であらうと。「ほど」は「頃」「時」の意。○露も時雨もひと

つにて　露も時雨も一緒にそゝぎ掛つて。この句の中に、涙は勿論絶え間なく掛るといふ氣持を含めてゐる。○山路わけ來し　山路を踏分けて道つて來た。○袖のしづく　袖が濡れてポト〳〵としづくが垂れるといふのである。○せうと　兄。「せひと」（兄人）の音便。○爲兼　有名な歌人で、伏見上皇の勅を奉じて玉葉集を撰した人。○おなじさまに　同樣に。前に書いた爲子と同じ趣にの意。○しぐれに立ちし旅衣　時雨の降るなかに旅に立つたといふ意。「たつ」は旅衣の縁で、「立つ」に「裁つ」を掛けてゐる。○雪にやいとゞ冴えまさるらむ　雪の爲めに一入寒さがしみ入る事であらうか。段々冬も深くなつたから、さぞ雪も降つて、一入お寒い事でせうといふのである。○うらかぜ冴えて　濱邊の風が寒くしみ込んで。「うら」は「旅衣」の縁で、「浦」に「裏」を掛けたのである。○降りそふ　降り加はる。時雨の降る上に更に雪まで降るといふ意。

通解　式乾門院の御櫛笥殿と申す方は、久我の太政大臣の御息女で、この方も續後撰から引續き二度三度の勅撰に歌が入り、又家々の私撰の歌集にも歌が澤山入つて居られる方だから、御名前しかくれなく世間に知れ渡つて居る。今は安嘉門院の御所に、御方といつて奉仕しておいでになる。私が鎌倉へ下る事を思ひ立つた際、いよいよ明日出立といふので、御暇乞の次第に、安嘉門院の御所北白河殿へ參上致したが、御見えにならなかつたので、家にゐるのは今夜一晩だけといふ旅立ち、何かと氣忙しくて、斯樣かく〳〵の次第とさへ申上げる間もなく、そのまゝ立つて了つたが、その御方へも、氣がかりで、おたよりを申上げた。

文旨　久我太政大臣の息女へおたよりを申した次第が細かく書いてある。次に筆者からの歌があり、先方からの返信があつて、贈答の記錄としては中途半端だが、便宜上こゝ迄を一段落として取扱ふ事にする。この文はかなり委曲を悉しながら而も簡勁の妙を得てゐる。「東路に思ひ立ちし、明日とて」とか「今宵ばかりの出立」とか「いそぎ出でしにも」とかいふ類、省略の手法が如何にも面白い。語義の項を參考として熟讀考究して戴きたい。

語義　○式乾門院のみくしげ殿　式乾門院にお仕へ申して居る御櫛笥殿。「式乾門院」は御高倉院の皇女、御名は利子、四條院の御准母、「みくしげ殿」は御櫛笥殿又は御匣殿と書く。貞觀殿の別名で、後宮で御裝束などを裁縫する所の稱、そこに奉仕する官女の長を御匣殿別當といふ、こゝはその略稱である。○久我の太政大臣　源通光。○續後撰よりうちつゞき　續後撰和歌集から引續いて。「續後撰」は後嵯峨院の勅によつて藤原爲家が撰んだ歌集。○二度三度の　この句については、勅撰に二三度入つたとする註と、家々の打聞に二三度入つたとする註と兩樣ある。中には家々の打聞の解として「但しこゝは勅撰集のことであらう」とした書もあるが、それは語義の蹂躙だと思ふ。なるほどこゝの「の」は一寸變な使ひ方である。普通の「の」の用法に準じて、「二度三度の家々の打聞」とつゞけるとしては、「家々の打聞」を「二度三度」と形容した事が變に思へる。或はこの「の」の字は後に轉寫の際間違つて這入つたのではあるまいか、さうでなくて原作者が斯う書いたものとすれば、こゝの文脈は、續後撰よりうちつゞき二度三度の（集）にも
家々の打聞

と考へるのが比較的自然ではないかと思ふ。御匣殿の歌は數々の勅撰に載つてゐるが、阿佛尼がこの文を書いた時までででも、續後撰に一、續古今に十一、續拾遺に七出てゐるから、「二度三度の集（勅撰集）」と見てよく宮るわけである。○家々の打聞　諸家の私撰の歌集。「打聞」は人から聞いたものを書きとめておくものの稱で、枕草子「うれしきもの」の條に「物の折、もしは人といひかはしたる歌の聞えてほめられ、打聞などに書き入れらるゝ。みづからの上には、まだ知らぬ事なれど、なほ思ひやらるゝよ」とある通り、自分の歌が打聞に入るのは歌人の名譽とした所に違ひない。勅撰集も結局はそれ等を基礎として撰ばれるのである。○御名もかくれなくこそ　御名前も世間に知れ渡つてゐる。「こそあれ」の省略。○安嘉門院　式乾門院の御妹で、御名は邦子、後堀河院の准母。○御方　その御方に仕へ奉る人といふ意の呼び名だらう。○東路おもひ立ちし明日とて　關東鎌倉へ下る事を思ひ立つた折いよ〳〵明日出立するというて。こゝの「し」は連體假止で、「おもひ立ちし（ほど）明日（は都を出づ）とて」などいふ省略の趣と見てよからう。○まかりまうしの由に　御いとまごひに上りましたといふ事をいふ爲にといふ思想。「由に」を「つもりで」「爲に」など譯しても結局の意味に變りはないが、語感にしつくりしない。不滿ながら姑く、「次第に」と通解して見た。○北白河殿　京都の東郊にある安嘉門院の御所。○見えさせ給はざりしかば　相憎御留守で御宅にお見えにならなかつたから。○今宵ばかりの出立　家に居るは今宵ばかりとなつた旅立。家にゐるのは今夜一晩だけで、明日はいよ〳〵旅に立つといふ際でといふ思想だが、原文の表現に即していへば、「の」は「である所の」の意、「出立」は旅立といふ名詞である。○さわがしくて　氣忙しくて、心が落着かないで。○かくとだに聞えあへず　斯々とさへ申上げる暇もなく。斯樣の次第で今度鎌倉に旅立ちますといふ事を申上げる間もなくの意。○いそぎ出でしにも　諸家の註が「にも」を「につけても」と解するに一致してゐる。なるほど「いそぎ出でし」に接する「にて」といふだけを條件にして考へれば、さう解するのが自然であるが、次を見ると、「心にかゝりて、おとづれ聞ゆ」とある。「心にかゝりて」は副詞で、挿入句と見て然るべきもの、「おとづれ聞ゆ」は「何チドウシタ」の趣である。して見ると、こゝの文節の主語は當然「私ハ」で、文の要素として「誰ニ」が必要になる。それを別に新しく補ふよりも、

（誰ニ）　いそぎ出でし（カハ、ソノ方）にも
（ドウシテ）　「心にかゝりて」
（何チ）　おとづれ
（ドウシタ）　聞ゆ

斯ういふやうに考へた方が原文の文調上自然であると思ふ。○心にかゝりて　氣にかゝつて、それが氣がかりで。○おとづれ聞ゆ　おたよりを申上げた。「聞ゆ」は敬語動詞で、例の現寫法の修辭。

草の枕ながら年さへ暮れぬる心ぼそさ、雪のひまなさなど書きあつめて、

消えかへりながむる空もかきくれて、
ほどはくもるぞ雪になりゆく。

など聞えたりしを、立ちかへりその御返事、

たよりあらばと心がけ參らせつるを、今日はしはすの廿二日、文待ちえて、珍しくうれしさ、まづ何事もこまかに申したく候ふに、今宵は御方違の行幸の御うへとて、まぎるゝ程にて、思ふばかりもいかゞと本意なうこそ。御旅明日とて、御まゐりありける日しも、峯殿の紅葉見にとて、わかき人々さそひにし程に、後にこそかゝる事ども聞え候ひしか。などや斯くとも御尋ね候はざりし。

ひとかたに袖やぬれまし、旅衣
　たつ日をきかぬうらみなりせば。

さてもそれより、「雪になりゆく」とおしはかりの御返事は、

かきくらし雪ふる空のながめにも、
　ほどはくもゐのあはれをぞ知る。

とあれば、この度は又、「立つ日を知らぬ」とある御返ばかりをぞ聞ゆる。

心からなに恨むらむ、旅衣
　たつ日をだにも知らずがほにて。

通解　その手紙には、旅寝のまゝに年さへも暮れて了つた心細さ、雪の絶間なさなど、何やかやと澤山書いて、それから、

消えかへりながむる空もかきくれて、
　ほどはくもゐぞ雪になりゆく。

（身も心も消え入るやうな、悲しい思にくれて、じつと眺め入る空も、我が心と同じやうに眞暗になつて、遙か彼方の都の空は、段々と雪になつてまゐります。）

など申上げた所が、折返してその御返事があつて、

幸便があつたら御手紙を差上げたいと、心掛けて居りましたところ、今日は十二月の廿二日、御待ち申上げてゐた御手紙を頂戴して、ほんとに珍しく嬉しく、まづ何事も精しく申上げたく存じますが、今日は陛下の御方違の出御がある御事とて、何かと取紛れて居りまする場合でありますので、心に思ふだけの事も十分に申述べられますまいかと、誠に殘念に存じます。御旅立はいよ〳〵明日といふ事で、御いで下さいましたその日は、峯殿の紅葉見にというて、若い方々が誘ひましたので、その方へ參つて相憎と不在で、後になつて左樣の次第を承つた事で御座いました。なぜ前以てかう〳〵とおたよりを下さいませんでした。

ひとかたに袖やぬれまし、旅衣
　たつ日をきかぬうらみなりせば。

（あなたの御出立の日を聞かなかつたといふ恨だけなら、私の悲しみも只一通りで御座いましたらうが、わざ〳〵おいで下されたのに、お目にも懸れなかつたその殘念さは、ほんとに並大抵の事では御座いません。）

とあつて、それから、「雪になりゆく」――遠い都の空は雪になつて行くと推し量りで詠んだ私の歌に對する御返事は、

かきくらし雪ふる空のながめにも、
　ほどはくもゐのあはれをぞ知る。

（空がかき曇つて、雪の降つてゐる空をじつと眺め入るにつけても、遙か遠い旅の空に在つて、「ほどはくもゐぞ雪になり行く」と詠んで、悲しい思ひに沈んでいらッしやる御心の内を、しみ〴〵と御察し申上げます。）

とあつたので、今度は又、「立つ日を知らぬ」とある歌の御返事だけを申上げた。

心からなに恨むらむ、旅衣
　たつ日をだにも知らずがほにて。

（自ら求めて置いて、今更何で私をお恨み遊ばされるのでせう。あなた様は私の旅立つ日をさへも知らぬ振をして居られたではありませんか。お目に懸れなかつたのはみんなあなたの御心からです。）

文旨　前節のつゞきで、御匣殿からの手紙が――蓋しその前半位だらうが――そのまゝ載録されてゐるのも珍らしい。その手紙の文句の中には、特に普通と違つた言葉遣の目につくものがある。それは語義の項で述べる事にする。贈答の歌は例の鸚鵡返しで、勿論格別の事はないが、割合にさらりとしてゐる。

語義　○草の枕ながら　旅寝のまゝで、旅の空に在るまゝで。「草の枕」といふのは、草を枕として野宿をした昔の旅行から出た言葉で、後世は一般に旅宿とか旅行とかいふ意味に用ひられてゐる。○年さへ暮れぬる「さへ」はその上にといふ原義通りの用例で、月日を過したその上にいよ〳〵年まで暮れたといふのである。○雪のひまなさ　雪の絶え間なく降ること。○書きあつめて　色々の事を澤山に書いて。○消えかへり　消え入るほどに思つて、死ぬほど悲しい思ひに沈んで。この言葉は同時に「雪」の縁語にもなつてゐる。○ながむる空も　じつと眺め入つてゐる空も亦自分の心と同じやうに。悲しい物思ひに沈んでじつと故郷の空を眺めれば、その方の空も亦物悲しげに打曇つてゐるといふのである。○かきくれて　まツくらに曇つて。「年が暮れる意を含めてある」といふ説は、手紙の文句から見ればなるほどとも思へるが、語自體からは聊か立入り過ぎるやうである。○ほどはくもゐ　遙か遠くの空。「くもゐ」は雲のある所の意で、（一）空又は雲。（二）遠く離れてゐる所。（三）禁中。（四）皇都。等の意に用ひられる。こゝは第二の意に第四の意を兼ねて、遙かに遠い都の空といふ義に用ひられてゐるやうである。なほ「ほどはくもゐ」といふ語は一種の慣用成句で、拾遺集「忘るなよ程は雲居になりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで。」新古今「思ひ出でば同じ空とは月を見よ程は雲居にめぐり逢ふまで。」新後撰「思ひたつ程は雲居に行く雁の故郷遠くかすむ空かな。」などいくらも用例がある。○立ちかへり　をりかへして、すぐに。○たよりあらばと　幸便があつたら御たよりをしようと。○しはす　師走と書く。陰暦十二月の稱。○文待ちえて　待つてゐた御手紙に接して。「待ち得」は待つてゐたものに接するといふ思想の語。○珍しくうれしさ　珍らしく嬉しいにつけての意。「珍しく」は形容詞の副詞法、「うれしさ」は形容詞の名詞化で、文法的には異例である。○まづ　何は置いてもまづ。○方違　陰陽家の説で、他行の時、その行かうとする方が、その年の金神に當るか、又は臨時に、天一神、太白神等の遊行の方に當ると、その方へ行くのを凶として、之を方塞といひ、前夜に他の方角へ行つて一泊し、翌日そこから目的の處に行く、それを方違といつて、中古以來一般に行はれた。○行幸　天皇の出御をいふ。この時の天皇は後宇多天皇。○御うへ　御事といふ意。但、「の御うへ」の四字の無い本もある。○まぎるゝ程　取紛れてゐる時、混雜してゐる場合。○思ふばかりもいかゞと　心に思ふだけもどうだらうか、どうも十分に書けないであらうと。○本意なうこそ　不本意であります、殘念に思ひます。下に「侍れ」が略されてゐる。○御旅明日とて　旅に御出立が明日といふ事で。○御まゐりありける日しも　御いでのあつた丁度その日。「まゐり」は賤所から貴所へ行くといふ卑自の思想の語だが、こゝはそれに「御」をつけて敬語としてゐる。それにしても高い身分の人の手紙だけに、どことなく上から下へといふ感じが無いでもない。○拳殿　闕自藤原道家。晩年毘沙門谷に光明峯寺を建てて、そこに幽居してゐたので、世に光明峯寺殿又は略して峯殿といつた。○かゝる事ども　あなたが旅立ちのため告別に御出でになつたといふ事などの意。「ども」は複數の終尾詞であるが、こゝは「など」といふ漠然たる意味の用例である。○聞え候ひしか　聞き及びました。「しか」は「こそ」に對する結びで、「き」の已然形。「聞え」は申すの敬語、聊か不自然な言葉遣のやうに思ふが、蓋し召使の者が私に申してそれに依つて始めて知つたといふやうな心理からこんな書き方をしたのであらう。「聞ゆ」には評判があるといふ意味もあるが、こゝは直接耳にしたといふ場合であるから、その用義は當らない。○などや　どうして。何故に。○斯くとも　斯々であるとも。いよ〳〵旅に立ちますとの意。○御承れ候はざりし　お

たよりを下さいませんでしたか。「御尋れ」といふ言葉も普通とは變つた使ひ方である。然し或書のやうに、「暇乞に行くが、差支ないかと、前以て私の都合をおたづれ下さらなかつたのですか」と解する事は、前後の文調から見て立入り過ぎてゐると考へられる。○ひとかたに袖やぬれまし　一通り袖が濡れるだらう。只一通りの悲しさに止るだらうの意。○たつ日　出立する日。「たつ」は「立つ」に「裁つ」(旅衣の縁)を掛けたのである。○うらみ　これも「恨み」に衣の「裏」を掛けた言葉の綾。○さてもそれより　そしてその次に。○雪になりゆく　前に出てゐる「ほどはくもゐぞ雪になりゆく」の歌を指す。○おしはかり　都の事をおしはかつて詠んだ歌。○かきくらし　空がかきくもつて。「かきくれて」と同義の他動詞で、文法的にいへば、空をくらくしての意。○ほどはくもゐのあはれ　「ほどはくもゐ」は原歌の鸚鵡返しであつて、旬意としては、遙か遠くの地にゐるあなたの物あはれな心の中といふ意と、「ほどはくもゐ」と歌に詠じて悲しまれるその哀調といふ意とを兼ねた趣と見てよからう。○この度は　今度こちらから御匣殿に差上げる手紙は。○心から　自分の心から、自ら求めて。出立に際し面會の出來なかつた事をお恨みになるが、それはあなた自身の御心からした事で、何も今私をお恨みになる筋は無いといふ思想。原歌を鸚鵡返しにいつた歌の技巧で、勿論本氣に喧嘩腰でいうた筋ではない。昔の歌には、お互に、あなたこそ薄情だといひ合ふやうな趣の贈答が澤山ある。殊に親しい間では、それが却て親愛の情を現はす一つの手段でもあつたのである。○なに恨むらむ　なぜ恨むのでせう、何もお恨みになるべき筋合ではありません。○立つ日をだに　出立する日をさへも。○知らずがほ　知らないふり。知つてゐてもわざと知らぬやうにしてゐての意。

あかつき便ありと聞きて、よもすがら起き居て、都の文ども書く中に、殊にへだてなく、あはれにたのみかはしたる姉君に、をさなき人々のこと、さまざまに書きやるほど、例の浪風はげしく聞ゆれば、只今あるまゝの事をぞ書きつけける。

夜もすがら涙ち文もかきあへず、
　磯越す風にひとり起き居て。

又おなじさまにて、故郷には戀ひしのぶおとうとの尼上にも、文たてまつるとて、磯物などのはしばしも、いさゝか包みあつめて、

いたづらにめかりしほ燒くすさびにも、
　戀しや、なれし里のあま人。

通解　明早朝都への便があると聞いて、夜通し眠らずに起きてゐて、都へ送る手紙を何本も書く中に、殊に隔てなく、情愛深く、お互に力として頼み合つてゐる姉君に、幼い子供たちの事を、よろしく頼むと、いろ〳〵と書いてやる頃、いつもの通り涙風の音が烈しく聞えるので、只今眼前の情景をそのまゝ歌に詠んで書きつけたのであつた。

夜もすがら涙も文もかきあへず、
　磯越す風にひとり起き居て。

(濱邊を吹き越して來る風の音を聞きながら、たゞひとり起きてゐて、餘りの悲しさに、夜通し涙が止めどなく流れて拂ひきれず、手紙もとても書ききれません。)

又それと同じ趣で、故郷に在つて私の事を戀ひ忍んでくれてゐる妹の尼上にも、手紙を差上げるというて、海邊

にある物などの小さい切れ端なども、少しばかり包み集めて、
いたづらにめかりしほ焼くすさびにも、
戀しや、なれし里のあま人。
（只何といふ事なしに、海藻を刈つたり、鹽を焼いたりする慰み事につけても、住みなれた故郷の海士――尼上が誠に戀しい事で御座います。）

文旨　筆者の姉と妹とに對する通信の一斑を錄してゐる。文も獣も格別取立てていふ程の事はない。

語義　○よもすがら　終夜、夜通し。○都の文ども　都への手紙。「ども」は複數の終尾詞。○殊に　特別に。○へだてなく　わけへだてなく、極めて親密に。○あはれに　情愛深く。○たのみかはしたる　互に力として頼りにしあつてゐる。○姉君　次の項にこの人の身分について書いてある。○をさなき人々のこと　都に殘してある幼い子供等即ち爲相や爲守等のこと。○さま〴〵に書きやる程　いろ〳〵と書いてやるその時。「程」は頃、時の意。○例の　いつもの。○只今あるまゝの事　今日の前にあるまゝの情景。○涙も文もかきあへず　涙もかきあへず、文もかきあへない。即ち、餘りの悲しさに、涙も拭ひきれず、文も書ききれないといふ意。○おなじさまにて　同じ趣で。姉上に書いたのと同じ趣でといふのであらう。即ち「さま」は手紙の内容についていうたものと思ふ。「姉君と同樣に」と解して、下の「戀ひしのぶ」に掛る副詞と見れば、「故郷には」の「は」はよく利いて來るが、句の全體として聊か不自然の感じがする。「姉へ手紙をやつたと同じやうに」と解した書もあるが、それでは「にて」がなかしい。○故郷には戀ひしのぶ　故郷の都に於て我を戀ひ慕うてゐる所の。こゝの「は」は強めの助詞だが、使ひ方が少し無理のやうに思ふ。○おとうとの尼上　妹なる尼上。「おとうと」はオトヒトの音便で、古くは弟にも妹にも通じて用ひた言葉。「尼上」は尼さんといふ程の敬稱。○たてまつる　差上げる。これも敬語。○磯物　磯にあるもの、即ち海草や貝殼などの類。○はしばし　きれ〴〵。少しばかりといふ思想。○包みあつめて　色々の物を一つに集め包んでといふ意だらう。○いたづらに　別段何といふ事なく、漫然と。○めかりしほ焼く　海藻を刈つたり鹽を焼いたりする。海邊で海士のするやうな事をするといふ意。○すさびにも　なぐさみ事につけても。心の慰みにそのやうな事をして見るにつけてもの意。今海藻などを贈るにつけて、作者自らさういふ事をやるといふ風に詠じた言葉の上の技巧と考へられる。○なれし里　住みなれた里、即ち故郷。○あま人　「海士」（あま）に「尼」（あま）を掛けた言葉の綾。海士は「めかりしほやく」の緣語。「尼」が妹の尼上を指したものである事は、更めていふ迄もない。

ほど經て、このおとゝひ二人の返事、いとあはれにて、見れば、姉君、

玉章を見るに涙のかゝるかな、
磯越すかぜは聞くこゝちして。

この姉君は、中院の中將ときこえし人のうへなり。今は三位入道とか。おなじ世ながら遠ざかりはてて、行ひ居たる人なり。そのおとうとの君も、「めかりしほやく」とある返事、さま〴〵に書きつけて、「人戀ふる涙の海は、都にも枕の下に湛へて」などやさしく書きて、

もろともにめかり鹽焼く浦ならば、
なか〳〵袖になみはかけじを。

この人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくする事どもを思ひつらねて書きたるも、いとあはれにもをかし。

通解　程經て、この姉妹二人の返事が來たが、實に情のこもつた書き方で、見れば、姉君の手紙には次のやうな歌が書いてある。

玉章を見るに涙のかゝるかな、
　磯越すかぜは聞くこゝちして。

（御手紙を拜見するにつけて、まるで自分の身が鎌倉にゐて、磯を吹き越して來る烈しい風の音なば、親しく自ら聞くやうな氣がして、つひ御手紙の上に涙がこぼれた事で御座います。）

この姉君は、中院の中將と申した方の奥方である。その中將は今は三位入道とかいつてゐる。同じ世の中にゐながら、その旦那樣とはすつかり遠ざかつて、佛道の行を修してゐる人である。その妹の君も、あの「めかりしほやく」と私の方から申してやつたのに對しての返事を、いろ〳〵と書きつけて、「人戀しさに落す涙は、都にゐる私とても變りはなく、涙の海は枕の下に一杯に湛へて居りまして」などやさしく書いて、

もろともにめかり鹽燒く浦ならば、
　なか〳〵袖になみはかけじを。

（あなた樣と共々に、同じ濱邊で、海藻を刈り鹽を燒く身の上でしたら、却つて袖に涙の浪は掛けますまいものを。――同じあまと名のつく身ながら、姉上樣と別れ〳〵に、斯うして都に住んで居りまして、只々涙に袖をぬらして居る事で御座います。）

この人も嘗て安嘉門院にお仕へ申したのである。人にはつゝみかくすやうな内々のことを、色々と思ひ續けて書き續けてあるのも、誠にしほらしくも又面白い。

文旨　前節を承けて、姉妹からの返事の趣を書いてゐる。その中で、姉君の素性を書いた所が省略に過ぎてはつきりしない。この筆者の文には時々なげやりに過ぎて分らぬ所がある。こゝもその一つで、自然解釋上に異議が生ずる。それは語義の項で詳述する。

語義　○ほど經て　よほど時日が經過して後。○おとゞひ　兄弟。こゝは姉妹の義。「おとゝ（弟）え（兄）」の轉で「おとゝい」となつたのだが、習慣上斯うも綴つてゐる。○あはれにて　しみ〴〵と情が籠つてゐてといふ意だらう。○玉章　手紙。○涙のかゝる　手紙に涙がそゝぎかゝるといふ意。○磯越す風は聞くこゝちして　手紙を讀むとその實況がまざ〳〵と目に見え、自ら鎌倉に在つて、磯を吹き越す風を聞くやうな氣がしてといふ意。「は」は「なば」を意味する强勢の助詞。○中院の中將ときこえし人のうへ　「中院の中將」は如何なる人とも分らぬ。「うへ」は奥方の意。○今は三位入道とか　この句は簡潔に過ぎて意味が不明であるために、「三位入道」を姉君の呼び名とする人と、「中院の中將」の出家後の名とする人と、二つの說がある。上からの續きは姉君の現在の呼び名とした方が具合がよいが、「三位入道」といふ言葉自體が女の呼び名としては變だから、私は姑く後說の方に從ふ事とする。○おなじ世ながら遠ざかりはてて　夫と同じこの現世に在りながら、すつかり遠ざかつて了つて。「同じこの現世にありながら、世の中から遠ざかつて」とか、「私と同じこの現世に住んでゐながら遠く隔つてしまひ」などいふ解は贊成しにくい。「世の中から」でも「私」からでも「遠ざかりはて」た人にしては、子供の事など色々頼むといふ前節の手紙の趣がしつくりしないと思ふからである。○行ひ居たる　佛の道を行つてゐる所の。○おとうとの君　妹の尼君を指す。○人戀ふる涙の海　人を戀ひ慕つて泣く涙が一杯で海のやうだといふ意。○都にも枕の下に湛へて　そちらのやうな磯邊ならぬこの都でも枕の下に一杯でといふ意。あなたの戀しさに私も

夜通し泣いてばつかり居りますので、枕の下は丸で海のやうですといふのである。古今集、戀三、紀友則の歌に
も「しきたへの枕の下に海はあれど、人をみるめは生ひずぞありける」とある。○もろともにめかり鹽焼く浦ならば、こゝがあなたと共々に海藻を刈り鹽を焼く海邊であつたならば。二人共に尼なので、尼か蜑に掛けて、二人共々に居るならばといふ意を斯う言つたのである。○なか〳〵　却て。○袖になみはかけじを　袖に涙は掛けまいものを。袖に涙を掛けて濡らす事はあるまいものをの意。○つゝましくする事　人につゝみかくすやうにする内密の事。○思ひつられて　色々と思ひつゞけて。○あはれにもをかし　しほらしくいとほしくも又面白い。「も」は並立の助詞ではあるが、「あはれでもあり又面白くもある」といふ口語の趣よりは、「あはれ」と「をかし」の間がもつと密接に結びついた感じのやうに思ふ。

ほどなく年暮れて、春にもなりにけり。霞こめたるながめのたど〳〵しさ、谷の戸は隣なれども、鶯の初音だにもおとづれ來ず。思ひなれにし春の空は、忍びがたく、昔の戀しきほどにしも、また都の便ありと告げたる人あれば、例のところどころへの文書く中に、「いざよふ月」とおとづれ給へりし人の御許へ、

おぼろなる月は都の空ながら、
まだ聞かざりし浪のよる〳〵。

など、そこはかとなき事どもを書き聞えたりしを、たしかなる所より傳りて、御返事を、いたうほども經ず待ち見たてまつる。

寢られじな、都の月を身にそへて、
なれぬまくらの浪のよる〳〵。

通解　程なくその年が暮れて、春にもなつた。霞のたちこめたあたりの眺めのぼーッとした覺束なさ、谷の戸口はついそばなのだが、その谷の口から出て來るといふ鶯の初音さへも聞えて來ない。年頃馴れ親んだ都の空は如何にもなつかしくてたまらず、昔の事が戀しく思はれる折も折、また都への幸便があると告げた人があつたので、いつもの方々の所へやる手紙の中に、「いざよふ月」といふ歌のたよりを下された方の御許へ、

おぼろなる月は都の空ながら、
まだ聞かざりし涙のよる〳〵。

（おぼろに霞む春の夜の月の眺めは、都の空と變りはありませんが、都ではまだ一度も聞かなかつた涙の音が、夜毎々々に烈しく打寄せて、異郷に在る身の、堪へがたい淋しさを感ずる事で御座います。）

など、とりとめもない事を色々と書いて差上げた所が、或る確かな人の手から傳つて、その御返事を、待つ間程なく頂戴して拜見した。

寢られじな、都の月を身にそへて、
なれぬまくらの涙のよる〳〵。

（都で眺められたその同じ月を常々御覽になつて、いろ〳〵と都の事が思ひ出されて悲しい事でせうに、又馴れぬ旅寢の枕に夜毎々々烈しい涙の音が聞えて來ては、さぞ御安眠も出來ぬ事で御座いませう。）

文旨　筆者が鎌倉に入つた翌年の春である。旅寓既に二三ヶ月、感慨の禁じ難いものがあつたらう。文に清新といふ趣はないが、自然に情趣がにじみ出てゐる。「涙のよる〳〵」は例の掛言葉だが、「おぼろなる」の一首は、割合すなほにさらりと出來てゐる。

語義　○春にもなりにけり　建治四年の春になつたのである。○たど〳〵しさ　ぼんやりとしてはつきりしないさま。○谷の戸は隣なれども　谷の入口にはすぐ近いけれども。昔の人は、鶯が冬の間谷の中にこもつてゐて、春になるとその入口を出て來ると考へて、「谷の戸出づる鶯の聲」などいひ習はしてゐた。こゝもその思想で、谷の戸がすぐ隣だから、早速鶯の聲も聞えさうなものだのに、まだその初音さへも聞えて來ないといふたのである。拾遺集に、「谷の戸を閉ぢや果てつる鶯の待つに音せで春も過ぎぬる」などいふ歌もある。○思ひなれにし春の空　年來馴れ親しんでゐた都の春の空。○忍びがたく　こらへられず、なつかしさに堪へがたく。○昔　都にゐた頃のことをいふ。○ほどにしも　丁度その折に。「ほど」は時、折の意。「しも」は強勢の助詞。○例のところどころいつも手紙を上げる人々。○いざよふ月とおとづれ給へりし人　前に宇都山で山伏に託してやつた手紙に對して「ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの月やおくれぬ形見なるべき」といふ歌を下された御方。○おぼろなる月は都の空ながら　朧の月は都の空で眺めたのと變りはないが。○まだ聞かざりし涙のよる〳〵　「よる〳〵」は「寄る寄る」に「夜々」を掛けたのである。未だ嘗て聞かなかつた浪の寄る音を夜々聞くの意で、前句の「空ながら」と對應して、旅に在る身の遺瀬なさといふ氣分が、明かにこの句の中に含まれてゐると思ふ。○そこはかとなき事ども　とりとめもない事を色々と。特にこれときまつた事を書くといふでなく、何かと感じた事思ひついた事を漫然と書くといふ思想。○書き聞えたりしを　書いて申上げた所が、書いて差上げた所が。○たしかなる所より傳りて　確實な人の手によつて自分の方へ傳へられて。この句は下の「待ち見たてまつる」に掛る。○いたうほども經ず　そんなに甚しく時日の經過せぬ内に。○待ち見たてまつる　待つてゐるのが手に這つて拜見した。「待ちうけて拜見した」といふ解が行はれてゐるが、口語として聊か自然を缺くと思ふ。○寢られじな　寢られないでせうなア。御安眠も出來ますまいなア。「な」は咏歎の趣をあらはす強勢辭。○都の月を身にそへて　都で見たその同じ月をいつも眺めて。「身にそへて」は身から離さずにの意で、いつも眺めてゐるといふ思想。「都の月のさまを始終身から離さず思ひ出し、故郷都のことがなつかしくなり」と解した事もあるが、前に「月は都の空ながら」とある返歌として見る時、さうは解かれぬ筈である。

權中納言の君は、まぎるゝ事なく歌を詠みたまふ人なれば、このほど手習にしたる歌ども、かき集めてたてまつる。「海ちかき所なれば、貝などひろふ折も、名草の濱ならねば、なはなき心地して」など書きて、

いかにしてしばし都をわすれ貝、
　浪のひまなくわれぞくだくる。

知らざりし浦山風も、梅が香は
　都に似たる春のあけぼの。

花曇ながめてわたる浦風に、
　かすみたゞよふはるの夜の月。

あづま路の磯山松のたえ間より、

なみさへ花のおもかげに立つ。

都人、おもひも出でば、あづま路の

花やいかにとおとづれてまし。

など、たゞ錐にまかせて思ふまゝに、急ぎたる使として、書きさすやうなりしを、また程經ず返事し給へり。「日頃のおぼつかなさも、この文に、かすみ晴れぬる心地して」などあり。

頼むぞよ、潮干にひろふうつせ貝、

かひある浪の立ちかへる世を。

くらべ見よ、霞のうちの春の月、

はれぬこゝろはおなじながめを。

白浪の色もひとつに散る花を

おもひやるさへ面影に立つ。

あづま路の櫻を見ても忘れずば、

みやこの花を人や問はまし。

通解　櫃中納言の君は、他に心の紛れる事なく、專念に歌をお詠みになる方なので、この程只孚馴しに書きすさんだ歌を、書き集めて差上げた。「こゝは海の近い所ですから、貝なども拾ひますが、さういふ折にも、名草の濱でありませんので、やはり心を慰める甲斐はないやうな氣が致しまして」など書いて、

いかにしてしばし都をわすれ貝、

浪のひまなくわれぞくだくる。

（どうかして暫くでも都の事を忘れたいと思ひますが、その甲斐もなく、絶間なく打寄せる浪のやうに、私の心は絶えずさまゞに思ひ碎けて居ります。）

知らざりし浦山風も、梅が香は

都に似たる春のあけぼの。

（今迄全く知らなかつた濱邊の山風ではあるが、さすがに吹き送る梅の薫は都と似通つて、誠にゆかしい春の曙の趣である。）

花曇ながめてわたる浦風に、

かすみたゞよふはるの夜の月。

（花曇の空を眺めてゐると、靜かに吹き渡る濱風のために、霞が吹き漂はされて、月は幽かにちら〳〵と見える、實に面白い春の夜の眺めである。）

あづま路の磯山松のたえ間より、

なみさへ花のおもかげに立つ。

（東國の濱邊の松の途切れた間から見れば、打寄せる涙までが花の咲いてゐるやうな趣に見えて、如何にも面白い眺めである。）

都人、おもひも出でば、あづま路の

花やいかにとおとづれてまし。

（都に住んで居られるあなたが、若し旅の空にゐる私の事を思ひ出しても下されたなら、せめて東國の花はどうか位のおたよりは下さいませうのに。）

などと只筆に任せて思ふまゝに書いて、急いでゐる使だとの事なので、書き掛けて中途で止めるといつた風で、誠に不十分な手紙だつたのに、またいくらもたゝぬ内に、御返事をよこして下された。それには、「どうか〳〵と御案じ申す日頃の氣懸りさも、この御手紙で、霞が晴れたやうに、すつかり晴れ晴れした心持が致しまして」などと書いてある。

頼むぞよ、潮干にひろふうつせ貝、
　かひある涙の立ちかへる世を。

（どうかあなた樣が東國に御いでになつた甲斐があつて、首尾よく目的を達して、都へ御歸りになる時節を、私はたのみにしてお待ち申して居るので御座います。）

くらべ見よ、霞のうちの春の月、
　はれぬこゝろはおなじながめを。

（私の晴れやらぬ心の内は、霞のなかの春の月と同じ有樣で、いつも悲しい物思ひに曇つて居りますものを、あの霞んだ月を御覽になるにつけても、どうか私の心の中を思ひくらべて見て下さい。）

白涙の色もひとつに散る花を
　おもひやるさへ面影に立つ。

（白涙と同じ色に花の散る趣を、遠く都から思ひやるだけでも、その樣子があり〳〵と目の前にちらついて見えるやうであります。）

あづま路の櫻を見ても忘れずば、
　みやこの花を人や問はまし。

（東國の櫻を見るにつけても、故郷の事を忘れずに思ひ出されるならば、都の花はどうかと、あなたは尋ねておよこしになる事でありませうに。）

文旨　權中納言の君との歌の贈答である。「このほど手習にしたる歌どもかき集めてたてまつる」といふその歌が次の五首なのか、それは別で、五首の歌はその歌を送る手紙に書き添へた歌か、はつきりしないが、「歌どもかき集め」と「などたゞ筆にまかせて思ふまゝに」との文調から考へて、書き集めた歌はこの五首とは別のもので、五首は權中納言を對象として詠んだ純然たる贈答の歌と見るのが自然だらう。その意味に於て、

「いかにして」對「頼むぞよ」
「花曇」　對「くらべ見よ」
「あづま路の」對「白涙の」
「都人」　對「あづま路の」

といふやうに對照して考察して見る必要がある。斯うしたところやはり阿佛尼の歌の方が一寸いゝ。五首とも割合に理に落ちた技巧がなくてすなほな方である。當時の習慣として、返歌は殆ど原歌の鸚鵡返しに過ぎないので、多くの場合に返歌はつまらぬものとなり勝ちのやうである。

語義　○權中納言の君　前に「前の右兵衛督の御女」とあつた人。○まぎるゝ事なく　他に心のまぎれる事なく、餘念なく、專念に。少しの事だが「熱心に」といふと、殊更な努力を伴ふやうになつて語の感じがそれて來る。○このほど　この間ぢう。○手習にしたる　手を馴らす氣持で書きすさんだ。「習字のため」といふ解は正しいが

口語の持つ内容――お手本を見て字の稽古をするといふ内容の爲めに少し感じがそれる。こゝに特に「手習にしたる歌ども」といつたのは、歌の爲め――特に歌として苦心した歌でなく、色紙などを書く下稽古のために、思ひ浮ぶまゝの歌を書く、さうした歌で、つまりは一寸したすさびに出來た歌といふ心持である。○名草の濱ならば「名草の濱」は紀伊國海草郡紀三井寺村で、貝の名所である。こゝは「名草」に「慰む」を掛けて「慰むこともないから」といふ意を寓した洒落である。後撰集に、「紀の國の名草の濱は君なれやことのいふかひありと聞きつる」とある、それ等を踏んでゐる文句だらう。○なほなき心地「なほ貝なき心地」の略。「貝を拾つてもやはり貝の無い心地」といふ意に、「貝を拾つても心を慰める甲斐はない心地」といふ意を掛けたのである。「生きてゐる甲斐がないやうに思はれて」と見る説もあるが、少し立入り過ぎるやうに思ふ。○いかにして　どうかして、何とかして。○都をわすれ貝　都を忘れたいといふ意に、忘貝といふ貝の名を掛けたのである。「忘貝」は蛤の一種で、古來「忘れる」といふ言葉の綾に使はれてゐる。○涙のひまなく　涙の絶間なく碎けるやうに絶間なく。○われぞくだくる　我が心が碎ける。さま〴〵に思ひ亂れるといふ意。○知らざりし浦山風も　今迄知らなかつた海邊の山風ではあるが然しそれも。○梅が香は　吹き送る梅の薫は。「梅の薫を吹きおくることは」といふ解は原歌の趣と少しそれてゐる。○花曇　櫻の花の咲く頃、空のどんよりと曇つてゐるのをいふ。○ながめてわたるすうーッと眺めてゐるといふ意に、風の吹き渡る意を掛けた言葉。こゝの「ながめて」を語の第一義に從つて、「物思に沈みながらつくづくと眺めてゐると」と解するか、新古今集の「なごの海の霞の間よりながむれば入日なあらふ沖つしら浪」などの如く單に眺める意とするか、普通には前説の方が行はれてゐるやうだが、下の句の「かすみたゞよふはるの夜の月」には何の哀調も無いから、强ひて贈答の寓意にこじつければ兎に角、歌自體としては後解の方が適切だと思ふ。但、返歌がこの歌を自分の物思ひに曇る心といふ方に引きつけてゐる事は明かであるが、作者自體の氣持も、この歌と次の歌とは――或はこの前の歌も――田舍でも春は春なる眺めはあるといふ事を都の人にいつてやるといふ所に力點があると思ふ。○かすみたゞよふはるの夜の月　風の爲めに霞が漂つて、幽かにちら〳〵と見える春の月。返歌に「かすみのうちの春の月」とあるのと同じ思想だが、風に霞が漂ふといふのがこの歌の工夫である。「霞が吹き動かされて春の夜の月が出ました」「春霞がゆらり〳〵と動いて、その中から春の月があらはれて來た」などいふ解は、一杯に掛つてゐた霞が風に吹き動かされて、自然今迄見えなかつた月が見えて來たといふつもりだらうが、歌の感じはその方でなくて、靜かな浦風で霞が漂つて、おぼろの月がチラ〳〵と見えるといふ方であらうと思ふ。○磯山松のたえ間　磯邊の山の松の林の途切れてゐるそのすきま。○花のおもかげに立つ　花のやうな風に見える。「たえ間よりなみさへ……立つ」といふ言葉の呼應だらうが、「面影に立つ」といふ語は、「樣子に見える」といふ意の成語だから、一首の解としては、「たえ間より（見れば）」と補ふのが自然だらう。○おとづれてまし　おとづれようものを。「たづれてやつて下さい」と願望にした解は少し違ふ。「出でば……まし」の假設呼應で、一首の裏に、「都の人は私の事など思出しもなさらぬから、それで東路の花はどうかとの御たより も無いのでせう」といふ厭味――勿論親しみの技巧――が寓されてゐると見るべきである。○筆にまかせて思ふまゝに　筆の進むに任せて思ふまゝに書いて。「思ふまゝに」は隨分思ひきつた省略である。○急ぎたる使とて　その手紙を持つて行く使の者が非常に急いでゐたので。○書きさすやうなりしを　書き掛けて中途で止めるといふやうであつたが。餘り急いで思ふ事も十分書けず、半分書き掛けて止めたやうな不十分な手紙だつたがといふ意。○日頃のおぼつかなさ　日頃の氣懸りさ。あなた樣はどうして御暮しになつてゐるかと常日頃心配でたまらなかつたその不安の心持といふ意。○この文に　この手紙で。この御手紙で樣子が分つてといふのである。○かすみ晴れぬる心地　心配がなくなつて、恰も霞が晴れたやうに、さつぱりとした心持。○賴むぞよ　たよりにして待つて居ますぞ。○潮干にひろふうつせ貝　「かひある」といふための序。「うつせ貝」は空の貝。阿佛尼の「しばし都をわすれ貝」といふ歌の言葉を踏んで、「うつせ貝かひある」と綾なしたのである。○かひあ

る涙の立ちかへる世を　東國に行かれた甲斐があつて、目的をはたして都にお歸りになる時節をといふ意を、涙の寄せ返るにたとへたのである。「世」は時世時節などの世で、折、時、時節の意。○くらべ見よ　比較して見よ。私の曇る心をあのおぼろに霞んだ月にくらべて考へて見て下さいといふ意。○はれぬこゝろ　悲しい物思のために結ぼれて晴れ晴れしからぬ心。作者の意圖は、あなたの事を色々と心配してその爲めに晴れぬ私の心といふのであらう。○おなじながめを　同じ有樣なるものを。私の晴れぬ心は春の月のぼーッと霞んでゐるのと同じ有樣だといふのである。○白涙の色もひとつに散る花　白涙と同じ色に眞ッ白に散る花。「涙さへ花の」とある原歌を散る花の方に轉じて詠んだのである。「白涙の」は「白涙と」の心持で、「色」の領格でなく、こゝで一寸きれる趣と見てよからう。卽ち「色」は散る花の色である。○おもひやるさへ　想像して見るだけでも。「さへ」は正しくは「だに」とあるべき所。○面影に立つ　その樣があり〳〵と目の前に現はれる。前の歌に「花の面影に立つ」とあつた樣に、「何々の」と限定する場合とは言葉の感じが一寸違つてゐる。○あづま路の櫻を見ても忘れずば　東國の櫻を見るにつけても故郷の事を――從つて故郷にゐるこの私の事をの意も含まれてゐる――お忘れにならぬなら。○みやこの花を人や問はまし　都の花の景色はどうかと、お尋れになりませう。「人」は阿佛尼を指してゐる事いふ迄もない。この歌について、『この歌は、阿佛尼の、「都人思ひも出でば」に對する返歌であらうが、ただ同じやうな語を使つたといふだけのことで、殆ど無意味である。「人や問はまし」の語を「御問ひ下さつても、よささうなものだ」といふ意としても、返歌として無意味である』と書いた本がある。なるほどうまい歌ではないが、返歌として無意味といふのはひどい。この歌に對する阿佛尼の歌「都人おもひも出でば」の條でいうた通り、これも「忘れずば……問はまし」といふ假設の呼應で、贈答歌としてのこの歌意を端的にいへば、「あなた樣は私があなた樣の事を思ひ出さぬため東國の花の御樣子を伺はぬやうの御恨みで御座いますが、あなた樣こそ、東國の花を御覽遊ばすにつけて、こちらをお忘れ遊ばさなかつたら、一口位、都の花はどうかとお尋れがありさうなものではありませんか、そちらこそ却て私をお忘れで御座いませう。」といふのである。斯うした恨みッこをいふ、これが贈答歌として親愛の意を表現する最も普通の技巧である事、それは前にも言うた事だが、重れてここに述べて置く。

彌生の末つ方、わか〳〵しきわらはやみにや、日まぜにおこること、二たびになりぬ。あやしうしをれ果てたる心地しながら、三度になるべき曉より起き居て、佛の御前にて、心を一つにして法華經を讀みつ。そのしるしにや、名殘もなく落ちたる折しも、都のたよりあれば、かゝる事こそなど、故郷へも告げやるついでに、例の櫛中納言の御許へ、「旅の空にて、危きほどの心細さも、さすが御法のしるしにや、今日まではかけとゞめて。」と書きて、

いたづらに、あまの鹽やく煙とも、
誰かは見まし、風に消えなば。

と聞えたりしを、驚きて、返事とくし給へり。

消えもせじ、和歌の浦路に年を經て、
光を添ふるあまのもしほ火。

御經のしるし、いとたふとくて、

頼もしな、身にそふ友となりにけり、
妙なる法のはなのちぎりは。

通解　三月の末頃、いゝ年をして小供のやうなおこりに罹つたのだらうか、一日おきにおこる事が、二度になつた。どうももうすつかり元氣がなくなつて了つたやうな氣がしながら、三度目が起る筈の明け方から起きて居て、佛樣の前で、一心に法華經を讀んだ。その御利益でか、すつかりおこりがおちた丁度その折、都への便があつたので、こんな事があつたなどと、病氣の次第を國元へも知らせてやるついでに、いつもの權中納言の所へ、「旅の空で病にかゝつて、一命も危ふいといふ場合の心細さも、さすがお有難い佛法の靈驗でございませうか、今日までは先づ命をつなぎとゞめて居ります」と書いて、それから、

いたづらに、あまの鹽やく煙とも、
誰かは見まし、風に消えなば。

（若し私が死んで了つて、荼毘一片の煙も風に消えて了ひましたら、誰一人、只空しく、海士の鹽を燒く煙とも見てくれる人はないでありませう。）

と申上げた所が、驚いて、早速返事をよこして下された。

消えもせじ、和歌の浦路に年を經て、
光を添ふるあまのもしほ火。

（和歌の浦邊に長い年月を經て、益々光を添へる海士の藻鹽火は、容易に風に消えるやうな事はないでせう。——和歌の道に長年たづさはつて、道の譽の益々高いあなたですもの、容易に病死なさるやうな事はありますまい。）

自分でも法華經の御利益を非常に有難く思つて、
頼もしな、身にそふ友となりにけり、
妙なる法のはなのちぎりは。

（靈妙な佛法の華——この妙法蓮華經の、普く衆生を救ふといふ御契は、我が身につき添ふ友となつて、絶えず私をお守り下される、誠に頼もしい事だ。）

文旨　瘧病に掛つたこと、それについての權中納言との歌の贈答の事を書いてゐる。病氣の記事は、ごく一通りではあるが要領よく書かれてゐる。歌は何れも調子が低い。御座なりのものである。

語義　○彌生　陰曆三月の異稱。○末つ方　末の頃。○わか〳〵しき　若々しい、如何にも子供らしい。「わらはやみ」は童病といふ義で、概して子供に多い病氣——少くも子供らしい感じの病氣なので、老女の身としてさうした病氣に罹つた事を一寸いぶかしく思つたやうな氣分でこんな形容詞を使つたものと思ふ。「わな〳〵しき」となつた本もある、それなら、ブル〳〵とふるへるといふ意味になる。なるほどおこりは惡寒の爲めにわな〳〵ふるへはするが、そんな形容詞を使ふのも變だと思ふ。「未熟なことないふ、但しこゝは病氣の輕いことないふ」といふ解が行はれてゐるやうだが、こゝの記事から見て殊更輕いと斷るべき趣とは考へられぬし、「かろき」といふ代りに「わか〳〵しき」といふのもたかしい。雅言集覽にも「若々し」の九つの例があるが、そんな使ひ方は一つもない。○わらはやみ　おこりとも瘧病ともいふ。今日ではマラリヤといつてゐる。間歇熱の一種で、隔日又は毎日、時間をきめて熱の起る病。○日まぜ　一日おき、隔日。○あやしう　妙に、いつもと違つて。○しをれ果てたる心地　すつかり元氣が衰へて了つた心持。○三度になるべき曉　三度目の發熱のあるべき明け方。○心を一つにして　一心に、專心一意。○法華經　妙法蓮華經の略、大乘經典の一。○そのしるし　その效驗、その御

利益。○名殘もなく　あとかたもなく、すつかり。○落ちたる　おこりのなほる事を「落ちる」といふ、今日でも一般に行はれてゐる語。○かゝる事こそなど　「かゝる事こそありしかなど」の略、おこりに罹つて難儀をしたといふ事などなの意。○危きほど　一命も危い場合。「一命も危いほど」といふやうに、「ほど」を程度の意にした方がしつくりするやうだが、古文調としてはこゝの「ほど」は、時、折、場合又は間の意に取る方が自然である。○さすが　さうはいふものの。○御法のしるしにや　佛法の靈驗であらうか。○かけとゞめて　命をとりとめて、死を免れて。下に「かります」といふ思想が略されてゐる。○いたづらに　空しく、漫然と。この言葉は「誰かは見まし」に掛る、只漫然と見る人もなからうの意。「風に消えなば」に掛ると主張する人もあるが、如何に歌でもさういふ句法は無理だらうと思ふ。○あまの鹽やく煙とも誰かは見まし　誰が蜑の鹽を燒く煙とも見ようや。「あれは蜑の鹽を燒く煙だな」と氣を留めて見て呉れる人すらあるまいといふ意。「かは……まし」は反語の呼應。「鹽燒く煙ほどにも人の心をひかぬだらう」といふ解が一般に行はれてゐるが、さうすると「とも」が程度分量をあらはすやうになつて、語そのものの意味にしつくりしないと思ふ。○風に消えなば　一寸不徹底な言葉だが、前後の關係上、自分が死んで茶毘一片の煙となる、その煙が風に吹かれて消えて了つたらといふ意味のやうに考へられる。「無常の風にさそはれて茶毘一片の煙となつたら」と解すると、解自體として頗る具合がいゝが、「風に消えなば」といふだけの語にそれほどの意味が含めるのも聊か無理のやうに思ふ。○とく　早く。○消えもせじ　下の「あまのもしほ火」を承けて、表面には蜑の藻鹽火は消えなからうといひ、裏面には、あなたは死なないでせうといつたのである。○和歌の浦路に年を經て　和歌の浦の邊に長い年月を過して。「浦路」は濱邊の道の義だが、こゝは浦邊と同義に使はれてゐる。この句の表面は「あまのもしほ火」に掛るのであるが、裏面は、阿佛尼の多年和歌の道にたゞさはつてゐる事を言つたのである。○光を添ふるあまのもしほ火　「あま」は蜑と尼とを掛けた言葉だらう。表面は、燒え盛つて光を添へる海士の藻鹽火、裏面は、益々光輝を加ふる阿佛尼の歌道の名譽の意。○頼もしな　頼もしい事よ。「な」は咏歎の意の助詞。○身にそふ友　身につき添つてゐる友、常に身につき添つて守つてくれるもの。○妙なる法のはな　靈妙な佛法の花。妙法蓮華を直譯した言葉で、法華經を指していつたのである。○ちぎり　契、約束。佛の普く衆生を救はうとの約束をいふ。

卯月のはじめつかた、便あれば、又同じ人の御許へ、こぞの春夏の戀しさなど書きて、

見し世こそ變らざるらめ、暮れ果てて、
　春より夏にうつるこずゑも。
夏衣はやたちかへて都人、
　いまや待つらむ、山ほとゝぎす。

その返事、又あり。

草も木もこぞ見しまゝに變らねど、
　ありしにも似ぬ心地のみして。

さてほとゝぎすの御たづねこそ、

人よりも心つくしてほとゝぎす、
　たゞ一聲を今日ぞ聞きつる。

實方の中將の、さつきまでほとゝぎす聞かで、みちのくにより、

都には聞きふるすらむ、ほとゝぎす、

關のこなたの身こそつらけれ。

とかや申されたることの候ふなる、そのためしと思ひ出でられて、この文こそ殊にやさしく。など書きておこせ給へり。

通解　四月の初頃、幸便があつたので、又同じ人の所へ、「去年の春夏、まだ都に居た頃の事を思ひ出すと戀しさに堪へられません」などいふ事を書いて、

見し世こそ變らざるらめ、暮れ果てて、

春より夏にうつるこずゑも。

（春がすつかり暮れて、夏に移つて行く若葉の梢の美しさも、私が去年見た通りで、少しも變りはないでせう。變り果てた旅の身で、斯うして若葉の頃に逢ふにつけて、變らぬ都の事がなつかしくてたまりません。）

夏衣はやたちかへて都人、

いまや待つらむ、山ほとゝぎす。

（都の人は、もう夏着に着かへて、今や山時鳥の啼いて來るのか待つてゐる事でせう。淡しい事で御座います。）

この手紙に對する返事が、又あつた。

草も木もこぞ見しまゝに變られど、

ありしにも似ぬ心地のみして。

（草も木も去年見たまゝと變りはありませんが、あなた樣がおいでにならぬので、何だか昔とはすつかり變つて了つたやうな氣ばかりして、淋しくてたまりません。）

なほその次に、「さてまた時鳥の御聲れにつきましては、

人よりも心つくしてほとゝぎす、

たゞ一聲を今日ぞ聞きつる。

（人一倍心を盡して、時鳥の聲を只一聲、漸く今日始めて聞いたやうな次第で御座います。）

實方の中將が、五月になるまで時鳥を聞かないで、陸奥の國から、

都には聞きふるすらむ、ほとゝぎす、

關のこなたの身こそつらけれ。

（都ではもう時鳥の聲を聞きふるして、珍しくもない程でせうに、私はまだ一聲も聞きません、關のこちらに在る身は實に情ない事であります。）

とか申された事が御座いますが、今あなたの御歌を拜見して、恰度それに似たやうな事だと思ひ出されまして、この御手紙こそ殊に優雅に思はれます。」など書いておよこしになつた。

文旨　又例の權中納言との通信である。初夏の歌として第一首はつまらぬが、「夏衣」の一首は旅人らしい氣分がかなりにじみ出てゐて、すなほないゝ歌だと思ふ。こゝの返書は、文句、歌、引き歌の三つがそのまゝ載錄されてゐるために、他の個所とは形式が統一しない。そのつもりで讀んで戴きたい。

語義　○卯月　陰曆四月の異稱。○同じ人　權中納言を指す。○こぞの春夏の戀しさ　去年の春夏の頃の戀しさ。今恰も春から夏への候で、斯うして旅の空に假寓してゐるが、去年の今頃は、都にゐてあなたにもたびゝ

お目に懸つた、その頃の事が思ひ出されて誠に戀しいといふ意。○見し世　昔見た世の中の有樣。去年見た都のさまといふ意。○暮れ果てて　春が暮れて了つて。「昨年も暮れて了つて」といふ解は立入り過ぎよう。○春より夏にうつるこゝろ　春から夏に移る頃の木々の梢。即ち若葉の頃の梢の趣をいふ。○たちかへて　裁ち替へて、即ち新に作りかへての意であるが、歌句としての感じは、夏着に着かへてといふやうに響く。但、或書のやうに「たちは接頭語でかへては着換へての意、それに裁ち代へての意を掛けたもの」と說くのは語義上不自然だらう。「たちかはる」といふ自動詞なら兎に角、「たちかへて」といふ他動詞はさうはなるまい。「裁ち替へる」といふ言葉を「着替へる」といふ心持で使つたと見て置けばよいのである。○山ほとゝぎす　山にある時鳥、又は山から來る時鳥の義。但一般に、單に時鳥といふのと同義にも使はれる。こゝもその例。○ありしにも似ぬ心地のみして　昔とは同じでないやうな心持ばかりして。去年まではあなたと親しく語り合ひましたが、今は遠く別れて居るので、淋しくて淋しくて、何も彼もその當時とは違ふやうな氣ばかりしますといふ意。この句を「心持だけは全く昔とは違つて居ります」と解した本がある。なるほど草も木も變らぬが私の心持だけは變つてゐるといへば理窟はよく立つやうだが、「ありしにも似ぬ心地」といふ言葉は、私にはさうは響かない。草も木も變りはないが、而もそれが昔に似ぬやうな心持がして誠に淋しいといふ辿り心地を詠じたものと思ふ。即ち「ありしにも似ぬ」は「心地が」でなくて「それ等凡てが」であるといふのである。○さて　歌から續いた手紙の文句と見てよからう。これだけを地の文――筆者の言葉と言る說もある。古文としてさういふ場合はいくらもあるが、こゝはさう見るべき必然性が稀薄だから、寧ろ手紙の中の文句と見た方がすなほだと思ふ。○ほとゝぎすの御たづれこそ　時鳥についての御尋れに對しては次のやうに御答へ申しますの意。○心つくして　苦心して、一生懸命になつて。○實方の中將　藤原實方。一條天皇に仕へて、左近衞中將に至り、罪あつて陸奥守に貶せられた。和歌を以て聞えた人である。○さつき　陰曆五月の異稱。その頃は時鳥の最もよく鳴く頃である。○みちのくに　陸奥の國。

○聞きふるす　さん〳〵聞いて珍しくもなくなるの意。この歌、續後撰集に、「みちのくにの任に侍りける頃、五月まで時鳥聞かざりければ、都なる人に、たよりにつけて申しつかはしける。」と前書して「都にはきゝふりぬらむ時鳥關のこなたの身こそつらけれ」とあつて、この一句が違つてゐる。記憶の錯誤だらう。○關のこなた　「關」は逢坂の關。「こなた」は陸奥の國から見てこちらの方といつたのである。即ち、逢坂の關より東の陸奥の田舍といふ意。○候ふなる　ありますがといふ程の意の連體假止。こゝで終止とすれば、「ことの」に對する特殊の第一終止で、下に「事よ」といふ咏歎の意を略した形である。さう見てもよからう。「候ふな」(ありますれ)としだ本もある。○そのためしと思ひ出でられて　あなたの御歌を見て、恰度その例だと、その話が思ひ出されての意。こんな場合の文句としては、「と」の代りに「も」とある方が自然らしくも思へる。○やさしく　みやびに、優雅に。下に「思ひます」の意が省かれてゐる。○おこせ給へり　およこしになつた。「おこせ」はサ行下二段の他動詞。

さるほどに、卯月の末になりければ、時鳥の初音ほのかにも思ひ絕えたり。人づてに聞けば、比企の谷といふ所に、あまた聲鳴きけるを、人聞きたりなどいふを聞きて、

しのび音は比企の谷なる時鳥
くもゐに高くいつかなのらむ。

など一人思へども、そのかひもなし。もとより東路は、みちのおくまで、昔より時鳥まれなる習にやありけむ。ひとすぢに又鳴かずはよし、稀にも聞く人ありけるこそ、人わきしけるよと、心づくしに恨めしけれ。

通解　さうかうしてゐるうちに、四月の末になつたので、時鳥の初音をうす〳〵なりとも聞かうなどいふ事は全く斷念して了つてゐた。所が人づてに聞くと、比企の谷といふ所で、幾聲も鳴いたのを聞いた人があるなどといふのを聞いて、

しのび音は比企の谷なる時鳥、
くもゐに高くいつかなのらむ。

（忍び音でごく低く鳴いてゐる比企の谷の時鳥は、いつになつたら空の上で聲高く鳴くことであらう。誠に待遠しい事だ。）

など自分ひとりで思つたが、その甲斐もない。元々東國は、奥州に至る迄、昔から時鳥が少い習はしであつたのだらうか。それにしても、全然又鳴かないといふならいゝが、稀にでも聞く人があつたとすると、人によつて分け隔てをしたのだなと、心がじれて實に恨めしく思はれる。

文旨　時鳥に關した記事で、歌は例によつてつまらぬものだが、文の方はいゝ。「もとより東路は」以下の文句などは、徒然草あたりに伍してもそんなに遜色はないと思ふ。

語義　○ほのかにも　かすかにも、うす〳〵でも、一寸でも。下に「聞かんとは」と補ふ。○思ひ絶えたり　思ひ切つた、斷念した。○人づて　人傳へ。その當事者から直接でなく、人から人に傳つての意。○比企の谷　鎌倉妙本寺のある所。○あまた聲　澤山の聲、幾聲も幾聲も。○しのび音　ひそ〳〵と小さい聲でなくのをいふ。○比企の谷なる　比企といふ地名に「ひきき」（低き）を掛けたのである。○なのらむ　啼くであらうか。「なのる」は自分の名をいふ意。時鳥の鳴き聲がその名の音に似てゐるといふ所から、昔から時鳥の鳴くのを「名のる」といつてゐる。○みちのおく　陸奥の國。○時鳥まれなる習　時鳥の少いならはし。一般に時鳥は少なかつたものだといふ意。○ひとすぢに又鳴かずはよし　全然鳴かぬなら鳴かぬで、あきらめがつくから、それはそれで又よい。○人わき　人によつてのわけへだて。或人には聞かせ或人には聞かせぬといふやうに、人によつてわけへだてをしたといふ意。○心づくしに　心がいためられて、くやしくて。「に」は「にて」の意。「心づくし」は普通「氣をもむこと、やきもきすること」など解される。大體さういふ意味の語だが、こゝはさういふ口語の内容より少し強い、寧ろ「くやしい」「癪だ」「じれる」といふ方に近い趣と考へられる。

又和德門院の新中納言と聞ゆるは、京極の中納言の御女、深草の前の齋宮と聞えしに、父の中納言の參らせ置き給へるまゝにて、年經たまひにける。この女院は、齋宮の御子にしたてまつり給へりしかば、傳りてさぶらひ給ふなり。「うき身こがるゝ藻刈舟」など詠み給へりし民部卿の典侍のせうとにてぞおはする。さる人の子にて、あやしき歌よみて、人には聞かれじと、あながちにつゝみ給ひしかど、はるかなる旅の空おぼつかなさに、あはれなる事どもを書きつゞけて、

いかばかり、子をおもふ鶴の飛び別れ、
ならはぬ旅の空に鳴くらむ。

と、文の詞につゞけて、歌のやうにもあらず書きなし給へるも、人よりはなほざりならず覺ゆ。御返事は、

それゆゑに飛び別れても、蘆田鶴(あしたづ)の
子を思ふかたはなほぞ悲しき。

ときこゆ。

通解　又、和德門院の新中納言と申す方は、京極中納言定家卿の御息女で、深草の前の齋宮と申上げた方の許に、父の中納言が宮仕に差上げて置かれたまゝで、長年お過しになつた。所が、この和德門院は、齋宮が御養女になし遊ばされたので、自然中納言も、前の代から傳つてこの女院にお仕へ申して居られるのである。「うき身こがるゝ藻刈舟」などいふ有名な歌をお詠みになつた民部卿の典侍の姉上でいらせられる。然るべき人の子として、つまらぬ歌を詠んで、人に聞かれるやうな事はしたくないと、徹頭徹尾隱して居られたが、私が斯うして遠い旅の空にゐるのを、心もとなく思はれた爲、いろ〳〵情味の籠つた事を書き續けて、その中に、

いかばかり、子をおもふ鶴の飛び別れ、
ならはぬ旅の空に鳴くらむ。

（子煩惱の鶴が、我が子と飛び別れて、なれぬ旅の空にゐて、如何ほどまア子供の事を思つて鳴き悲しんでゐる事だらう――あなたはお子樣と別れて、さぞ旅の空で泣き暮しておいでなさる事でせう。）

と、別行にせず手紙の文句に續けて、歌のやうには見えぬ風に書きなし遊ばされたのも、他の人よりは特に深く念が籠つてゐるやうに思はれる。その御返事は、

それゆゑに飛び別れても、蘆田鶴の
子を思ふかたはなほぞ悲しき。

（鶴は、我が子のかはいさに飛び別れはするものの、而も子を思ふ心の内はやはり悲しい。――私も子供のため

を思へばこそ斯うして別れて旅に居りますものの、その子供を思ふ心の内はやはり悲しさに堪へかねます。）

文旨　定家卿の息女との贈答である。歌は格別のものではないが、その息女の身分柄を敍した所、割合こみ入つた事をさら〳〵と書いた文句は推服に値する。概して歌よりも散文の方が優れてゐるやうである。

語義　○和德門院の新中納言　和德門院に奉仕して呼び名を新中納言といつた人。「和德門院」は仲恭天皇の皇女で、義子内親王と申す方。○京極の中納言　藤原定家。本文この下に「定家」の二字のある本もある。○深草の前の齋宮　後鳥羽院の皇女熙子(ひろこ)内親王。建保五年御年十三で齋宮となつて伊勢に赴かれ、承久三年罷めて歸り、寛喜二年尼となつて深草に住まれたので、斯く申上げたのである。「齋宮」は「いつきのみや」ともいふ。昔、天子の御即位の度毎に、伊勢の内宮に奉仕せしめられた未婚の内親王又は女王の稱。○聞えしに　申した御方に。○參らせ置き給へるまゝにて　差上げて置いたまゝで。宮仕へに差上げたまゝ御暇をとらずに引續きお仕へ申しての意。○年經たまひにける　幾年もおたちになつた。「ける」を完全終止と見れば第二終止だが、上に係言葉はないから第二終止になるべき理由は無い。ルースな書き方とも見られやうが、筆者のアタマには「けるが」といふやうな氣分が働きながら、而も筆端を改めて「この女院は」と起したので、こんな表現になつたものと思ふ。古文には珍しからぬ形で、一種の省略終止と見てよからう。○この女院　和德門院を指す。○齋宮の御子にしたてまつり給へりしかば　齋宮が御子樣になし遊ばされたといふのである。○傳りてさぶらひ給ふ　齋宮から女院へと、二代引き續いて奉仕して居られるといふ意。○うき身こがるゝ藻刈舟　續後撰集戀の部に、「濁江にうき身こがるゝ藻刈舟はてはゆきの影だにも見ず」とある。「うき身」は「憂き」に「浮き」を掛け、「こがる」は「思ひこがれる」意に「舟の漕がれる」を掛けた言葉の綾で、水の濁つた入江に漕がれる藻を刈る舟の、はては往來する影も見えなくなるやうに、我が身も戀に思ひ焦れて、